
小さな出会い。 本当の居場所

NANA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな出会い。 本当の居場所

【Nコード】

N5542A

【作者名】

NANA

【あらすじ】

落ちてしまう事は簡単でもスピードが早い。大切な物は失ってから気付く。思春期の少女を描いた物語

第1話：春

私・梓^{あずさ}16歳この春高校入学。。。

『行つてきまあす』今日から新しい高校生活開始！！『ちよつと待つて写真・写真！』うちの定番である。なにかと行事ごとには、かかせない家族での記念撮影。小中学入学、卒業兄の成人式、この日も私は真新しい制服に身を包み家族と写真を撮り家を出た。

今日は同じ中学で高校も同じ友達？久美子と浩子と駅で待ち合わせをし一緒に学校まで行くことになっている。2人とは中学で特別仲が良かった訳じゃないけど、同じ中学から行くのが私達3人なので、自然と学校の登校は一緒に、ということになった。

学校は、電車・バスを使って片道40分ぐらいのところにある。

第2話：新たな気持ち

登校途中電車の中・初めての環境の変化に私達3人は嬉さと不安で少し緊張していた。

『3人クラス一緒だといいね』明るく久美子が言い出した。それに乗って私と浩子も声を揃え『そうだね』と言った。久美子の話をきっかけに行き道私達はこれからの高校生活の楽しみを沢山話した。

久美子の予想はハズレ…私達3人は別々のクラスだった。1〜7クラスあつて、私は1組。久美子は2組。浩子は頭が良く進学クラスの7組だった。

そろそろ学校にもなれ・それぞれ新しい友達も出来て、少し地味な感じで、3人よく似たタイプだけど、もともとそこまで仲が良い私達じゃなかったから・3人一緒の登校・下校はそう長くは続かなかった。

私は同じクラスで席が後のミホと仲良くなった。背が小さくいつもニコニコした少し大人しい可愛らし子。ミホとは帰り道が同じ方向で一緒に帰るようにもなった。他にも友達も出来て、こうして楽しい高校生活はスタートした。

入学して間もなくしたころ帰ろうと教室を出たところで『すいません。』…ん？…男…私じゃあないよね！『すいません！』私かなあ・後を振り返ると同じクラスの男の子がモジモジして立っていた。その男の子が漂わせる空気は、そんな場面を知らない私にも分かった。告白だ！『なに？』私は内心ドキドキだったが、冷静を装った。『俺、同じクラスの森下孝明^{もりしたたかあき}だけど…』私は軽く『うん。』とだけ言った。

森下のことは知っていた。クラスでお調子者で目立った存在だったから、でも私のタイプじゃ

ない。『俺・俺梓ちゃんの事気になつてって：上手く言えないんだけど：今日の夜電話していい？』『うん』私はまた軽く返事をした。って駄目じゃん！！そんなの！何軽く返事してんの！私は次森下から発せられる言葉の前にいろいろ考えた。家に電話されて親に出られたら大変だし、かといって今更電話止めてとも言えない。

『電話番号おしえてくれる？』また軽く『うん』と、最近買つてもらったケータイの番号を教えた。端からしたらタイプじゃないなら断ればいいって思うかもしれない。でも、告白されることが初めてな私。森下と付き合う気はないが、私の事は好きでいてもらいたいって思つた。私の事を好きでいる人がいて欲しかった。それは、森下じゃなくて誰でもよかった。それともう一つ、そのとき気付いたが、なぜか私は見栄を張っていた。男に慣れているという。

これがきつかけだったのかもしれない。私の心の何かが崩れていくのは。

第2話：新たな気持ち（後書き）

呼んでもらってうれしいです（；；）

これからもどんどんつづきますのでよろしくお願いしますm（

ー）m

第3話：友達1

森下からの告白の日の夜、やはり、森下から電話がかかってきた。でも私は出なかった。出れなかった。出て森下の告白を言われて断る自信がなかったから。もし、明日学校で

「電話したのに」

って言われても、言い訳は出来る。私は逃げた。森下は私に声をかけたとき、すごく緊張しただろう。あの気持ちを私は何も考えず踏みしめた。

次の朝、やっぱり教室入るの戸惑った。森下は朝早く、私より先に教室にいることは分かっていたから。教室に入り森下の方をチラッと見た。

森下は机に頭を押さえるように下を向いていた。

私が教室にいることを知っていてわざと私を見ないように感じた。でも、なぜか私は森下のそんな姿を見て楽になった。

『梓』おはよお『ミホだった。』おはよ『なんか元気ないねえ。

なんかあった？』『なんでもないよ！』『そっか、なんでもないならいいんだけど。なんか悩みあるんだったら言ってね』『ありがとう』『私は昨日の森下との事をミホには言えなかった。自分がずるい人間に思えて、そんな自分をミホには見せれなかった。私はまだミホと親友にはなれてないんだとそのとき思った。

私は自己主張が苦手で、今友達と呼んでいる子達にも本当の私を見せていない。

いろんな所でいろんな人に合わせているだけ。きっと・こんな私を友達と思ってくれている子はいない。ミホとは本当に仲良くなった休みの日はどちらかの家に泊まって朝まで語り明かしたときもあった。でも・ミホの中でも私は友達じゃなく、クラスメートなんじゃないか。そんな事を考えるようになった。

第4話：友達2

森下との一件以来私は・モテるようになった。それと共に、女に目覚めたというか・中学のときから束ねていた髪をおろし・化粧も始めた。そのかいあって・私の最初に求めた

「私を好きだという男」

は増えていった。

同じ学年の敬もその中の1人だった。

敬は学年でもトップクラスの美男子だった。

あるとき、話したこともない別のクラスの女の子が声をかけてきた。由希ゆきとゆう可愛い派手な私が今まで関わったことのない感じ・理想とした感じの女の子だ。

『5組の敬が梓ちゃんのこと気になつてゐたいで・アド聞いてきてつて言われたの。教えてあげてくれない？』私は迷う振りをした。何故なら、すぐ教えても良かったんだけど、由希ちゃんに軽い女つて思われたくなかったから。正しく言うと由希ちゃん達にだ。女は自然とグループを作る。由希ちゃんの属するグループは学年でも可愛い子達が集まったみんなの目をひく目立ったタイプのグループ。しかもみんな気が強い！（想像）

私が今のとこ属するグループはお洒落にはあまり興味のない・自立つことのない地味な子達のグループ。だから、敵に回したくないのだ。

私がアドレスを教えるのを悩んでいたら・『敬いい奴だし、カッコイイし、友達感覚で教えてあげて！お願い』手を合わせて頼まれた。ここまでされたら教えていいよね。『うん。じゃあアドレス』携帯のアドレスを紙に書いて由希ちゃんに渡した。『ありがとぉ』由希ちゃんは教室を出たすぐ敬のもとに行くだろう足取りだった。

その日の夜、敬からメールがきた。ただいま。今日はアドレス教えてくれてありがと。梓ちゃんこれからいっぱいメールしょ！

ただそれだけのメールだった。私の期待と違い物足りなさがあったが、森下の時とは違い、何か敬とは、これから先がありそうな感じで楽しかった。

もうすぐ夏休みだ。。。。

敬とメールや電話をして2ヶ月が経とうとしている。

私達は毎日何かしらのメールはしていた。

帰ったら ただいま だとか、寝るときは お休み など… で
も、学校では一言も話したことはなかった。

私がいる1組と敬がいる5組は端と端にあり、私は自分のクラス以外に友達はいないので、他のクラスに行くこともないし、もちろん5組に行くこともない。

敬もそうだった。

1組に来る事はなかったから学校で顔を会わす機会がめつたにない。少し残念にも思うけど、実際はそのことにホッとしていた。

メールや電話では普通に話せるけど、実際面と向かつては話せないと思ったから・・・今は外見は可愛いと言われるようになり、前より派手になったが、中身は変わらない。男性経験がない。…というか、男の人と接したことがない私は、男の子とどう接したらいいのかも分からない。その上カツコついで、どうしようもない。

でも、嬉しい事もあった。

由希ちゃんが話しかけてくれるようになった。

今まで、廊下ですれ違っても挨拶もすることもなかった。由希ちゃん達グループが放つオーラはすごかった。私もこの子達のグループに入りたい！など憧れもあった反面この子達と話すことは絶対ないだろうと思っていた。それが、敬のこと以来、話すようになった。話しかけてくれるようになった。私はそれがすごく嬉しかった。そんな由希ちゃんの行動につられるように、由希ちゃんのグループの子達も私を見るようになった。

今までは、まるで私が空気の存在のように、すれ違うときも見もしなかった。そんな彼女達が、私を見るようになった。由希ちゃんが

私と話すこともあり、私に笑顔をくれる子もいた。ほんとに嬉しかった。敬と連絡とるようになったことより、由希ちゃんが話しかけてくれること、学校で目立っている彼女達が笑顔をくれることの方が嬉しかった。

第5話：初めて

明日から夏休みという日、敬からいつもと違うメールがきた。

明日から夏休みやなあ。明日、梓ちゃん予定ある？なかったら、遊ぼうよ！ 私はキタツとばかりに嬉しかった。すぐに いいよ

って打ち返した。すぐにメールは返ってきた。明日俺バイトだから、終わってからでもいい？ 18時に終わるから、それからいい？ 私は焦った。今まで私は夜外出をしたことがない。ミホと遊ぶときも学校が休みの日に昼間遊んで18時には家に帰っている。私の両親：母はとても厳しく夜外出することを絶対に許さない。ミホの家に初めて泊まりに行くときも、許してもらえなかった。お母さんの知らない子の家に泊まりに行くなんて絶対駄目！って感じで、予定変更でミホに私の家に泊まりに来てもらったくらいだ。それから、ミホの家には泊まりに行けるようになった。でも帰りは絶対陽が明るいうちにだ…。私はそんなことに文句も言わず今までそうしてきた。夜出歩くような友達もいなかったし。

そんな母が夜の外出を許すはずがない。でも、敬の誘いを断りたくなかった。

私はミホに電話した『ミホ。お願いがあるんだけど…』 『どうしたの？』 『私、最近気になる人が出来ただけど…』 『えっ！？ほんと？早く言つてよお！で、どんな感じ？』 『その人に明日の夜バイト終わってから遊ぼうって言われて行きたいんだけど…』 と、まで言ったところでミホは私の気持ちを察したように『そんなの、梓のお母さんが許さないよねえ。おばさんに、うちに泊まるって言ったら？ 私明日家いるし、おばさんから電話あっても大丈夫だし！』 ほんとミホはいい奴だ（涙） 『ミホほんといいの？』 『いいよ、いいよ！私も梓に負けてらんないな いい男見つけなきゃ 梓頑張つてね！でもこれからはちゃんと報告してよ！？私達友達なんだから』 『うん。ありがとう。絶対報告するから』 と、電話を切った。

ミホに後ろめたさを感じた。最近の私は、気持ち的にミホより由希ちゃんを優先していた。地味なミホといるのを恥ずかしいと思うときもあった。なのに、こんな時はミホを頼った自分…ミホを利用した自分…そんな私を友達と言ってくれたミホに…

ミホも敬の事は知ってると思う。なのに相手が敬ということをミホに言わなかった。絶対報告するといったのに…

そう思いながらも明日敬と学校以外で初めて会うことに浮かれていた。

母もミホの家に泊まりに行くこと（嘘）を許してくれた。

敬にも バイト終わってからでいいよ と返事をした。待ち合わせの時間も場所も決めた。私は浮かれていた。

…初めての夜の外出

…初めて男の子とデートに…

友達を利用したこと

初めて親に嘘をついたことを忘れるくらいに

第6話：敬（前書き）

恋愛物ぽくなりました。

第6話：敬

今日は敬と会う日、初めて夜外出する日・・・

敬のバイトが終わるのが18時。親に夜出歩くの禁じられている私はお昼過ぎにミホの家に泊まりに行く振りをして家を出た。まさか私が嘘について男と会うことなど知らない母。。。

敬と会うまでには時間がかかりある。家を早く出なくてはならないと分かっていた私は地元の友達と会う約束をしていた。咲美だ。咲美とは、小学校、中学校一緒に、唯一私が親友と呼べる子だ。咲美にはなんでも話せる。私の汚い部分も…。

『梓』咲美がきた。私達はいつも地元のマク○○ルド集合で何時間も話して時間を潰す。

『梓久しぶり』

『久しぶりッ』

『ちよつと！昨日電話で言ってたけど、今日夜男と会うの？』

『うん！そうなんだ！』

咲美には昨日大体敬のことを話した。

『いいなあ。高校生活楽しんでる感じじゃん』

『まあねえ』私は茶化して見せた。

『でもさあ。おばさんに何て言っただの？うちの親は絶対許してくれないよお』

咲美の親もうちと張るぐらい厳しい。

『そんなの正直に言えないよ！高校の友達の家泊まるって言った友達にも了解済み。』

『えっ いいな！いいなあ！』

と、私の高校生活の経緯など、咲美の高校生活の話などしているうちに私のメールがなった。

敬だ！

今バイト終わった。梓ちゃんもう家出れる？

敬は、私の親が厳しくて親に嘘をついて敬と会う事など知らない。そんなこと言いたくなかった。

出れるよお。今から向かうね！

私がメールの返事をしていると、

『そろそろ行きますか？』

咲美はイタズラっぽく笑い言った。

『うん。付き合わせてごめんね』

『いいの。いいの。こんなこと、これから私も梓に頼むかもしれないじゃん！』咲美はいい奴だ。

『そのときは、喜んで！』

咲美と別れ敬との待ち合わせ場所に向かった。電車に乗り敬に言われた駅に向かう。私が乗った地元の駅から30分ぐらい走った駅だった。

待ち合わせ場所に到着。敬の姿はない。

と、そのとき、一台のバイクが私の前に停まった。敬だった。

『乗って』

『…えっ…』

『いいから、後乗って』

『…うん…』

私は分けも分らないまま敬のバイクにまたがった。

『ちゃんと俺に捕まってる』

と言っですごいスピードで走り出した。初めて乗ったバイク・・・気持ちいい・・・だたそう思った。

10分ほど走ったとこでバイクは一軒の家の前で停まった。『降りて』

バイクを降りその場に突っ立っていた。

『来て』

私は敬に言われるがまま、敬の後を歩いた。

『ここ・俺んち。入って。』

『お邪魔します』

私は聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で言った。

敬は聞こえたのか『親いないから』

敬の家は父親はいない。敬が小さいときに離婚して、それからはずっといないそうだ。母親はスナックを営んでおり夜はいい。いつも朝まで帰ってこないようだ。

これは、前に電話で話したときに聞いていた。敬の部屋に案内され『散らかってるけどその辺に座ってて、俺風呂入ってくるから』

私は入り口の入ってすぐ横の所に座った。…初めての男の部屋…敬は散らかってると言ったが、それでもなかった。

12畳ぐらいの広さの部屋、ドアはちょうど部屋の角にあり、入って右奥にベッド、その向かいにテレビ、その横に小さな冷蔵庫、壁には友達との写真がたくさん張ってある。何人かが楽しそうに笑っている写真。学校の友達の写真はなかった。その写真すべてが夜撮った写真だった。部屋の中央にはテーブル、テーブルの上にはタバコの吸い殻が山積みの灰皿。敬タバコ吸うんだ…敬をすごく大人に感じた。

バイトをしている敬。

バイクに乗る敬。

タバコを吸う敬。

親に気を使っことなく夜出歩く敬。

私とは住む世界が違うんだ。でも、そんな敬を選んだ私。

私も敬がいる世界に行くことができるよね？私は今いる世界から出たい！

敬がいる世界に行きたい！

『あゝ。さっぱりしたあ。』

敬が戻ってきた。髪が濡れている。

敬の顔を初めてじっと見た。

やっぱりカツコイ。

『梓ちゃんなんか飲む?』

『いい。』

私は緊張のあまりそっけなく答えてしまった。でも敬はそんなこと気にしないように

『すぐ用意するからどこか出かけようか?行きたいところある?』

『特にないから敬君にまかせる』

『分かった。ほんとどこでもいいの?』

『うん。ほんとどこでもいい』

ほんとにどこでも良かった。だって、夜どこに行ったらいいのかわからないから。今の私は敬といれるだけで幸せだった。

敬の用意はすぐ終わった。

『じゃ、行こうか。』

またバイクにまたがり、向かった先はファミレス・・・

『お腹空いたし、まず食べよ!』

ご飯も早々にすませ、またバイクで走りだした。

今度は結構長い間走った。私はその場所がどこかわからず、ただバイクに酔いしれていた。・・・バイクって気持ちいい!何もかも吹っ飛ば感じがした。

次にバイクが停まったのは、海だった。夏の夜の海。。。

最高の気分だ。。。

2人並んで海岸に座りしばらく黙って海を眺めた。

今までお喋りだった敬が急に黙り込んだ。私はなんだか妙な空気を感じて耐えられなくなり、今まで黙っていた私が話し出した。

『敬君バイクの免許持ってたんだね。凄いねえ。』

私は何を話していいのか分からず、無難に話したつもりだった。

『これ俺のバイクじゃないんだ。先輩のバイク借りたんだ。免許も持っていない。無免許で運転してる』

敬の言葉に返す言葉が見当たらず

『そうなんだ』

としか返せなかった。また2人は黙った。私は返した言葉に後悔した。

（そうだよ。不良は免許なしでバイクにも乗るんだよ）

私の真面目さ、凡人さがバレてしまった気がして、恥ずかしくなった。

私はもつと敬と話したかったけど、言葉が見つからず、海を見るしかなかった。敬は何を考えているのか、敬も黙って海を見ていた。

どれくらい時間が経ったか分からないが、敬が口を開いた

『そろそろ行こうか』

私はシヨックだった。敬とろくに会話もしていないのに、もうサヨナラなんて…

私は親には泊まると言って出てきたので、家に帰ることは出来ない。夜はミホの家に泊まらせてもらうことになっていた。

『うん』

またバイクにまたがった。

待ち合わせをした駅に着いた。私は帰りたくなかった。でも、『帰りたくない』と言えない。言ったときの敬の反応が怖かったから。私はバイクを降り

『今日はありがとう。じゃあね。』

敬に言い駅の改札に向かった。なんだか最後気まずい雰囲気だった。私は後悔した。

今日敬と会うべきじゃなかったのか…

私はつまらない女と思われた…

もう敬に嫌われた…

何故もつと素直に今日会えた嬉しさを出せなかったのか…

改札に向かいながら思った。涙が出そうだった。

『梓ちゃん』

後を振り返ると敬が走って来た。びっくりした。

『どうしたの？』

『梓ちゃんまだ時間ある?』

『あるよ』

『梓ちゃんともっといたい』

涙で前が見えなくなつた。でも、意地で流すことを耐えた。

またバイクにまたがり、敬の腰に手を回した。私敬のこと好き。そう思いながら…バイクは敬の家に着いた。

敬の家、誰もいない家、数時間前にも来ているせいか、今度は躊躇せず敬に続き家に入った。

敬の部屋。また私は入り口のすぐ横に座つた。敬はベッドに座りテレビを付けた。

『そこにいるとテレビ見れないよ。こつち座りな』

敬は自分の隣をとんとんと叩いて言った。

『うん』

敬の隣に座つた。テレビどころではなかった。

『さつきはごめん。ひきとめて。なんか俺緊張しててうまく喋れなくて…でもまだ梓ちゃんと一緒にいたい思つて。迷惑だった?』

私も一緒にいたい。そう心の中で思つた。

『…大丈夫』

私の口から出た言葉はこの一言。心の中の思いを口に出すのが恥ずかしかった。

私は馬鹿だ。

『…ごめん。』

敬は自分が無理やり連れ戻してしまつたように思つたのだろう。私に誤つた。

私も一緒にいたかつたから　ここまできても・恥ずかしさを越えることはできず、言えなかつた。

私はこの雰囲気を変えたくて違う話しに切り替えた。

『敬君、学校楽しい?』

また私は訳分らない話しをしている。

そんな他愛のない話に敬は付き合ってくれた。そんな話しの中で敬は話しを戻そうとしたときもあった。

でも私は話しを敬に渡さなかった。敬の話しに素直に答えられないから。自分の気持ちを恥ずかしくて言えないから。

私は逃げた。

敬は諦め私の他愛もない話しに朝まで付きあってくれた。

陽が明るくなり、私達は話すこともなくなってきた。

でもそのときには、敬は自分が話そうとしていた事を話すことを諦めていた。

私達は楽しかったというより、お互い…違う。敬は疲れた空気を流していた。

敬とは終わった。私の直感だ。

私は虚しかった。自分のせいなのに。

その場にいる意味を持たなくなったような私は、いたたまれなくなり

『そろそろ帰るね』

『うん。送るよ』

敬と待ち合わせをした駅。

敬に引き止められた駅。

敬を好きだと思った駅。

またその駅にきた。

今度は引き止めてはくれない。絶対に。

『じゃあね。ありがとう』

前と一緒にセリフ

『ありがとう』

敬からの一言。

私は改札に向かった。

数時間前この辺りで敬の声がした。でも、今度聞こえたのはバイクが走り去る音・・・

虚しさだけが残った。

私は帰りの電車に乗った。

第6話：敬（後書き）

メッセージ、評価お願いします。
参考にしたいですm（　）（　）m

第7話：敬 2

・チャラン

携帯が鳴った。

『はい』

『梓？』

ミホだ

『昨日どうだったの？夜うちに泊まりにくるのかと思ってたのに、連絡ないから心配したんだよ！もしかして・・・彼の家にお泊まり？』

ミホは無邪気に言った。

『違うよ！朝までぶらぶらしてただけ！朝帰ってきたの。ミホに連絡しなきゃって思ってたけど、携帯充電切れてて・・・ごめんね。』

『そうなんだあ。・・・で、彼とはどうだったの？』

『ん。なんか思ってた感じの人と違ったって感じかな！』

敬と先がないことを確信していた私は強がり、嘘を言った。

好きな人に自分の気持ちも言えず・・・それどころか、素っ気ない態度を取ってしまった・・・なんて・・・

まるで、小学校の男の子が自分の気持ちを隠すのに、好きな子に意地悪をしてしまう・・・そんな昨日の自分。

そんな幼稚な自分。ミホに言えない。ミホに見栄を張るため嘘をついた。

『そうなんだあ。残念だったね。でも、また次いい人見つけたらいいじゃん 梓可愛いから男なんてすぐ見つかるよ』

『そうかなあ・・・』

『そうだよ！』

しばらくミホと話し電話を切った。

私はぼんやり昨日のことを思い返していた。しかし、寝ていないため睡眠が襲ってきた。

でもここで寝てはいけない。

ここで寝たら母に昨日寝ていないのがバレてしまう。

そうなたらミホの家に泊まりに行くことすら許しが出なくなる。

その日は頑張つて睡眠を追い払い、夕食を終えたすぐ、倒れ込むように眠りに落ちていった。

目が覚めたのは、次の日の昼だった。

携帯を見る。

敬からメールが来ているかもしれないという期待をした。

着信1件

メール1件

敬かも！

…着信は咲美だった。

…メールも

咲美に電話した。

『もしもし咲美？ごめん寝てた』

『もうお昼だよ！いつまで寝てんの！まあいいや！今から会わない？』

『いいけど、今起きたばっかだからもう少し後でね』

『了解　じゃあ用意できたらメールちょうだい』

咲美救われた。

私はこのまま家にいたら、敬のことを思い返すことばかりしていたはず。

すぐに用意を済ませ咲美にメール

用意OK

いつもの〇ツク集合だ。

『梓、昨日はどうだったの？』

やはりきた！その話し

咲美にはありのまま話した。

敬の優しい言葉に恥ずかしいあまり素っ気なく答えてしまった事。恥ずかしくて、自分の気持ちを素直に言えず、敬と気まずい雰囲気のまま別れた事。

あのとき素直に言えていたら…と思う後悔。全て話した。

咲美は私の気持ちを分かってくれた。

分かってくれるだろう思ったから話した。

私達は似た者同士。

男と付き合ったことがなければ、男に優しい言葉をかけられた事もない。

咲美は私のその時素直になれなかった気持ちを分かってくれた。それでも本当は敬の事を好きなんだということも分かってくれた。

『梓が敬君のこと好きで後悔してるならもう1回試してみたら？今度は頑張って自分の気持ち伝えるの！』

その言葉に私の気持ちは高ぶった。

『そうだよね！』

『今から敬君にメールしなよ』

『…………』

『敬君を誘うの！会おうって！それが夜なら、今度はうちに泊まるっておばさんにいいなっ』

咲美とは小・中学一緒なので母親もちろん咲美のことは知っている。

『うん！』

敬君この前はなんかごめんね。また会える？

数分後

いいよ

短いメールが返ってきた。

そのメールが今までとは違う感じがしてショックだったが、

咲美に、

「忙しくてゆつくりメールしてられないんじゃない？OKのメールだったんだから良ししようよ」

って言われ、私もそう思い込むようにした。

『いつ会えるかきくの！』

咲美に押され

いつ会える？

来週の月曜なら大丈夫

今日からちょうど一週間後だ

『良かったじゃん！梓、今度は頑張るんだよ！』

私は何か不安を感じながらも、咲美と一緒に喜んだ。

『これからは、控えめじゃ駄目！梓最近可愛くなってるんだから、自信もたなきゃ！』

『ありがとう咲美』

今日の咲美は熱い奴になっていた。

私もそれにつられ熱くなった。

敬との約束の月曜まで敬からの連絡はなかった。

私は咲美の言葉を思い出し、敬から連絡はなくても、メールを入れ続けた。

敬との約束の前日・・・

敬にメールを入れた。

明日本当に会ってくれるの？

これで返事がなかったら、敬のこと諦めようと思った。

勇気を振り絞ってメールした日から今日まで、私は敬にメールを入れ続けた。一度も返事は返ってこなかった。このメールの返事もなかったら明日会うこともなくなる。

私はこの一週間頑張った。

今までになく頑張った。

敬からの返事がなくても…。朝は おはよう 夜は おやすみ など…内容は対したことはないが、一方的に送り続けた。私の誠意のつもりだった。

でもこのメールの返事がなかったら諦める。

明日いいよ。前と一緒にの時間にあの駅で返事が来た！

メールは素っ気ないものの…明日会えるという喜びでいっぱいになった。

この前のような失敗はしない。そう自分に誓った。

第8話：敬 3（前書き）

投稿ギリギリかもしれません（ノ・。 ）

第8話：敬 3

… 敬に引き止められた駅

… 敬の愛を少し感じた駅

… 敬を好きだと確信した駅。

またその駅に私は立っている。

今度は敬の愛に答えたい。

素直になる。

そう誓い敬の来るのを待っている。

来た！

またバイクを借りてきたのだろう。バイクは私の前に停まった。

『乗って』

初めて会った日を思いだした。

私は敬の後ろに乗り敬の腰に手を回した。初めての時は何も思わなかったが、

敬の背中大きい。手を回した腰も引き締まっているのが分かった。

・ うつとりしているうちに敬の家に着いた。

バイクを降り、敬の後を付いて家上がった。

敬はまだ何も話していない。

（やっぱりこの前のことで起こっているのかなあ…）

部屋に入り私はドアの横に座ろうと…

その時、敬が… 敬が私を抱きしめた。

敬の匂い… 心地良い。うつとりした。

私も敬の腰に手を回した。

しばらく立ったまま抱き合っていると、敬がそっと離れたと思った

ら、私の手を取りベッドに連れて行った。

2人向かい合うようにベッドの上に座った。

敬は私をじっと見ている。

私も敬をじつと見た。

私は敬の視線に耐えられなくなり目をそらしたとき、敬の手が私の髪を撫でるように触れた。

敬の手が頭の後ろに周り手に力が入るのが分かった。

「たか…」

私の言葉を遮るように、私の唇と敬の唇が触れた。

初めてのキス。

とても優しいキス・・・私は目を閉じ、敬に任せた。

敬はキスをしたまま私を抱き寄せ、そのまま優しく横になった。

唇が離れ、私を覆い被しているような敬と見つめ合い。またキスをした。

敬の手が私の頭から少しずつ下に降りていき胸に触れた。

「…！？」

（もしかして、これってエッチする感じになってる！？）

私は我に返ったように、キスを止めた。

「駄目？」

敬は吐息まじりの声で言った。

駄目な訳じゃない。でも、こんなことになるなんて考えていなかった。

勿論、私は処女。

そのことを敬は知っているのか知らないのかは分からない。

敬はまたキスをした。溶けてしまいうるほど優しくキスだ。

敬の手が胸から下に降りる。スカートの中に手が入り、私はキスに酔いしれている場合ではなかった。

（これからどうなるの？敬の手はどこにいくの？）

そんな焦りで頭がいっぱいになり、心臓は音が聞こえてしまいうるくらいにドキドキしている。

敬の手が私のパンツに触れたとき…

（駄目だ！怖い！）

敬を押しつけた。つもりだったが、男の力に叶うはずもなく押し退

けることはできない。

敬の手を掴んで私から離そうとした。…駄目だ。かなわない。

もう、敬を止めることは出来ない。

敬の指が私の中に入った。

痛いっ！怖いっ！嫌だ！

『止めて！』

敬の力が一瞬抜けた隙に敬を押し退けた。私はそのまま敬の家を飛び出した。

敬の家を飛び出し、どれくらい走ったか分からないが、走り疲れゆつくり歩いた。

私は今日こんなことをするために来たんじゃない

敬と話したかった。

私の気持ちを言いたかった。

敬の気持ちをちゃんと聞きたかった。

敬はそういうつもりで今日私と会ったんだ

そう思ったら涙が溢れ出てきた。

涙を拭くこともせず、溢れ出た涙を止めることも出来ず、小さく声を出して泣いた。

私は歩いた。

もう二度と来ることのない駅まで…

第9話：さようなら

涙は止まることを知らなかった。

電車の中でも流れた。きつと周りの人は不思議に見ているだろう。

今の私には周りなど見えなかった。

地元の駅に付き改札を抜けると

『梓』

咲美が立っていた。

敬の家を出てすぐ泣きながら咲美に電話をしていた。何を話したか覚えていないが、泣きながら電話をした私が心配になり、駅まで迎えに来てくれたのだ。

咲美の顔を見てホツとし、その優しさに涙は量を増した。

咲美に抱きつき、声を出して泣いた。

今夜の12時前だ。咲美も夜出れるはずがない。きつとこっそり抜け出して来てくれたのだろう。

今日は咲美の家に泊めてもらうことにした。

家は真っ暗、家族は寝ているようである。そつと家の中に入り、咲美の部屋に入った。

その時にはもう涙も止まっていた。

『今私に話したい事ある？』

おばさん達にはれないように小さな声で咲美は言った。

私は大きく首を横に振った。

今話してしまうと、きつとまた声をだして泣いてしまう。

『じゃあ今日は寝よ。明日話せたら、話して。ゆっくり休んで…。おやすみ』

『うん。おやすみ』

ありがとう。ありがとう咲美。
心の中で何度も何度も言った。

私達は早く起きた。

咲美の母に私が夜来た事を誤魔化すために。

夏休みとあっておばさんもゆっくり寝ている。朝7時・・・咲美はおばさんの寝室に行き『今梓来たから』と言いに行った。これでOK！

私達はホッと一息ついた。

『昨日なにがあつたの？話せる？』

『ちよつと待つて。トイレ行かせて』

パンツに違和感があつた。トイレに行つて見てみると、血が付いていた。昨日の一件で付いたのだろう思った。

部屋に戻り、昨日の一部始終を咲美に話した。

私が拒んだときの敬が怖かったこと。

エッチをするために私の誘いを受けたこと。

『・・・ひどい・・・』

咲美は私にかける言葉がなかったのだ。

『私は咲美に感謝してる。ありがとう』

『…………』

咲美は目に涙を浮かべている。

私は泣かない。

私は咲美に話したことで気が楽になった。

咲美には感謝してる。一緒にいてくれたことに、感謝で胸がいっぱいだ。

『私はもう大丈夫だから！』

敬のことはもういい。…忘れよう。

もっと強くなろう。

そう心に決めた。

私は携帯から敬を消した。

さよなら敬。。

第10話：慎悟

夏休みも前半が過ぎたころ。。。

夕食を済ませ部屋でのんびりしていたら、携帯がなった。知らない番号。出るか出ないか迷ったけど、出た。

『はい…。』

『もしもし』

ん…？ 女？

『由希だけとお、梓ちゃんの携帯？』

『由希ちゃんかぁ。誰かと思った。』

『ごめんね。急に…梓ちゃんに伝えたいことあって敬に番号聞いたの』

敬に！？私は動揺を隠し

『伝えたいことって？』 ○○工業高校の慎悟さんて人が私の中学のときの先輩で、毎朝電車で梓ちゃんと一緒なんだって。で、梓ちゃんに一目惚れしたらしく、連絡取りたいって私の彼氏に連絡あつて…』

○○工業高校は、私の通う学校の隣の高校で、とても有名な不良高校である。

制服は普通の学ランでどこの学校か分からないって感じたか、すぐ分かる。

上の服は腰辺りまで短く、ズボンはダボダボ。髪は金髪、ピンク…さまざまだ。

だいたいこの高校に通う生徒はみんなと言っていいほど、こんな感じだ。

由希ちゃんは今の彼氏と中学のときから付き合っていて、彼氏もその学校に通う生徒らしい。

『どんな感じの人なの？』

由希ちゃんが何て敬に電話番号を聞いたのか気になったが聞かなか

った。

『私達の2つ上で3年生で、めっちゃめっちゃカッコイイよ 学校でもトップクラスだし』

由希ちゃんの言うトップクラスとは、不良でトップクラスと言うことだ。

『電話番号教えてもいいよ』

私は敬の事を忘れたかった。

敬に見せ付けたかった。

あんたのことなんか好きじゃなかった。

遊びだった。

と・・・

由希ちゃんと敬は仲が良い。きつとこの話しも敬の耳に入るだろう。

『ありがとう！これで私達（由希ちゃんとその彼氏）の顔も立ったよ。梓ちゃんには敬のときといい、こんな話しばっかでごめんね。

じゃあ、携帯教えとくから、後は頑張つてね！』

『うん。じゃあね』

本当に由希ちゃんは私の仲人みたいだ。

由希ちゃんと電話を切つて10分ぐらいして、携帯がなった。

知らない番号・・・きつとさっき言つてた慎悟さんて人だ。

『もしもし・・・』

『梓ちゃん？俺慎悟。由希から聞いてる？』

『はい、さっき電話で聞きました』

『あつ敬語とかいいから、タメ語で！』

『はい』

『あと、慎悟さんとか止めてね。由希とかは慎悟さんて言ってるけど、梓ちゃんは慎悟でいいよ』

『じゃあ、慎悟も梓ちゃんは止めて梓でいいよ』

不良〃怖い人。

私の今までのイメージを覆した。

慎悟は普通の人に思えた。それどころか、無邪気で、バカな事言っ

たり、私と対等に接してくれた。

楽しくって慎悟との話しに夢中になった。

私は氣を使うことなく、本当の自分を出せているように明るく話せた。

顔も知らない慎悟と話すのはもちろん今日が初めて。でも初めてじゃないみたいに、私は話すことが出来た。

慎悟のおかげだ。

すごく楽しい人。もっと話していたい。

慎悟と会ってみたい。

もう2時間以上話している。

『梓ごめん。もうこんな時間。長く付き合わせてごめんなつ。俺はいつでもいいから、梓が暇なとき連絡して』

『うん。また連絡する』

心地いい慎悟との余韻を残しながら眠りについた。

朝起き、昨日慎悟と電話したことを再確認するように昨日の慎悟の着信履歴を見た。

…いつでも電話してって言った。

今すぐ電話したい…。また慎悟の声聞きたい。話したい。

でも昨日の今日だし…

ただ慎悟の声が聞きたいだけ…。用事はない…。もし慎悟が話してくれないと会話がない…。

発信のボタン押せない。

慎悟からの電話を待とう。

慎悟と初めて話した日から3日が過ぎた。

毎日毎日、慎悟からの着信がないか携帯ばかり見ている。

4日目の朝、携帯がなった。

慎悟だあ！

『もしもし』

待つてましたとばかりに出た。

『梓？あのさあ…』

慎悟の声が暗い。

『どうかしたの？』

『どうかしたの？じゃねえよ！』

…えっ？…起こってる？

『…………』

『俺いつでもいいから連絡してって言ったじゃん！梓なんで連絡してこねえんだよ』

慎悟は怒りながら淋しそうだった。

『…ごめん…電話しようと思ったけど…。なに話していいか分からなかったし…』

『そんなの気にすんなよ！梓が電話しようと思ったときに電話したらいいんだよ！分かった？』

まるで子供に言い聞かすように言った。それが嬉しかった。守られているようで。

そのときはもう慎悟の怒りはなかった。ホッとしたような感じだった。

『梓今日なんか予定ある？』

『何もないけど…』

『今から出てこれる？俺近くまで迎えにいくよ』

『大丈夫だよ。』

慎悟と会えるんだ。

2時間後に私の家の近くで待ち合わせをした。

近くといってもそう近くではない。私が男といるところを近所の人に見られでもしたら大変！そんなことが親の耳に入ったら、夏休み中外に出してもらえなくなる。

母にはミホと遊ぶと言って家を出た。
いつもどおり夕方に帰ればバレない。

私は敬のときにいっぱい親に嘘をついた。
今はもう嘘を付くことに抵抗はなかった。
当たり前のように親を騙し家を出た。

第11話：幸せ

私と慎悟の家は意外に近くだったことにびっくりした。歩いてでもそう遠くない。

だから待ち合わせ場所も簡単だった。

「〇〇を曲がった角で…」

みたいな感じだ。

慎悟が通っていた中学より私の行っていた中学のほうが、慎悟の家から近いが、学校の規定の範囲の決まりがあり中学は別だった。

待ち合わせ場所には金髪のモヒカンヘアの男がいた。慎悟だろう。

私は慎悟の顔を知らない。でもあれは慎悟だ。慎悟はまだ私が近づいて行つてることに気付いていない。…どうやって話しかけよう。こつという時、後から行くのは嫌なものだ。

『おう！梓』

私に気付き呼んでくれた。

その声とともに、私は3メートルぐらい走り慎悟に駆け寄った。

『ごめん。遅れて』

『気にすんな！』

ポンポンと私の頭を叩いた。

もう私は

「慎悟の事好きだ」

そう思った。

初めて会ったばかりなのに……。敬のときにしろ、私は惚れやすいのだろうか。

とりあえず、私達は近くの公園に行くことにした。

慎悟と並んで歩いている。慎悟はヒールを履いている私より頭半分

くらい背が高い。肌の色はどちらかというと白目。奥二重の切れ長の目。細くカットした眉。由希ちゃんの言うとうりカッコイイ。

歩きながら慎悟の横顔を眺めた。…こんな人の彼女になれたらいいだろうなあ。

『梓…さっきから見すぎなんだけど…』

うつとりしていた私は我に返った。

『あつ。…ごめん』

『俺の顔、……変?』

『全然変じゃないよ!カッコイイ』
思わず言ってしまった。

『またまた、そんな事言つてえ』
ちよつと照れてた。

公園に着きベンチに座った。

今度は慎悟が私の顔をじつと見ている。前を向いていてもその視線は分かった。

今度は私が

『見すぎなんだけど』

慎悟の真似した。

『梓可愛いなあって思つて』

『何それえ!さっきの仕返し?』

『まだだよ!由希から聞いてない?俺、梓に一目惚れしたんだからさっ!…こんなこと言わせんな!バカ!』

恥ずかしくて返せなかった。でも嬉しくて顔が緩んだ。

さすがに夏休みの昼間の公園とあって、子供達が増えてきた。

『場所変えよつか』

『うん。』

『俺んち来る?』

『うん。』

公園から10分くらい歩いて慎悟の家に着いた。

1階建ての小さな家。

慎悟の後を続いてあるいた。慎悟は玄関には向かわず、家の横を通り裏へ歩いて行った。

(?)

家の真裏に来たところで、床から天井までの長方形の窓を開け

『入って』

そこが慎悟の部屋らしい……。慎悟はいつも玄関からではなく部屋の窓から出入りをしているそうだ。なので、窓の外には靴箱がある。

私は初めて見る光景にびっくりした。と、ともに不良っぽさを感じた。

実際・玄関からより入りやすかった。

部屋はさっぱりとしていて綺麗だ。タバコと香水の匂いが混じった男の匂い。

慎悟は部屋に入るなりタバコをくわえた。でも私の顔を見てタバコを離れた。

『吸っていい?』

『いいよ』

私に気を使ってくれたのだ。敬は何も言わずタバコを吸っていた。嫌じゃなかったけど、慎悟の気遣いが大人だと感じた。

慎悟はベッドに腰掛け

『こつちおいで』

突っ立っている私にタバコをくわえながら言った。敬とのことを思い出し、躊躇した。

『なんもしないからおいで!』

また子供に話すように言った。

私は慎悟のこの喋り方が好き。子供扱いされてる感じだけど、そんな感じが好き。

慎悟の横に座った。

私はコルクボードに貼ってある写真を眺めていた。

『写真みる？』

『見たい！』

慎悟は押し入れからアルバムを出し私に手渡した。

ぶ厚いアルバム…この中にまだまだ私の知らない慎悟がいるんだと思うとドキドキした。

綺麗に貼ってある写真。

沢山の友達の写真があった。

学校で撮った写真。

先輩。後輩。との写真

慎悟はアルバムをめくるたびに説明してくれた。

その中でも一

番よく慎悟と写っている人がいた。慎悟の親友で 雅史^{まさし} という人

だそうだ。慎悟と張るくらいカッコイイ。

『雅史とは小学校から今の高校までずっと一緒に一番の親友でさあ

…』

雅史君の話をする慎悟は本当楽しそう。

『梓にも今度紹介するわ』

『うん。ありがとう』

『でも梓、雅史に惚れるなよ！雅史男前だからなあ』

『うん！』

なんか私達付き合ってるみたい。この時がいつまでも続いてほしい

…。

今日初めて会ってお互い聞きたいことも沢山。私達の会話は止まなかった。

慎悟は私に沢山の質問をした。

私も慎悟に沢山の質問をした。

『ところで、梓はヤツたことある？』

『何を？』

『…エツチ』

私があまりにも自然に聞き返したので、少し言いずらそうだった。

『…ないよ…』

恥ずかしかった。

した事がないのが恥ずかしかった訳じゃなくて、純粹にその質問に答えることが恥ずかしかった。

『そうなんだ』

何故か慎悟は嬉しそうだった。

慎悟には聞くまでもないと思い聞かなかった。

私達が夢中に話している間に外は薄暗くなっていた。

部屋の時計を見ると18時になろうとしていた。

まずい！もうこんな時間。今帰ればまだ怒られない。

… 慎悟とまだいたい。

どうしよう。

後はどうなってもいい。今の慎悟との時間を終わらせたくない。

私は慎悟との時間を取った。

頭には母の起こった顔がよぎる。無理やり私はそんなこと拭い去った。

… 慎悟と離れたくない。

私は慎悟にバレないように鞆に手を入れ携帯の電源を切った。母から電話がなるのを予測して。

『梓時間大丈夫？』

慎悟が聞いたそのとき時間は19時になろうとしていた。

私が大丈夫な時間はもうとくに過ぎている。

『大丈夫だよ』

『ならまだ一緒にいて大丈夫？』

『うん』

慎悟は何気なく言っているのだろうが、慎悟の言葉が幸せ。

『… 俺、梓のことマジ好きだわ。』

…今何て？ …好き？って…？

『一目惚れで梓のこと好きになって、でも、ツレするのも、女にするのも、やっぱり人間中身じゃん。梓と1日いて思った。梓を俺の女にしたい』

これって告白だね・・・？

私はめっちゃめっちゃ嬉しかった。

もちろん答えは全然OK。でもそれをどう言葉にしていいいか分からない。

慎悟は私を見つめた。

私もそれに答えるように慎悟を見つめた。

『俺の女になって』

『うん』

返事が言えた。

『俺マジ言ってるんだけど、梓分かってる？』

急にチャラけた慎悟に戻った。

『私もマジ言ってるよお』

慎悟がチャラけたように言ってくれたから私も言い返せた。

こういう慎悟が好き。真面目に話したあと、空気を和ませるようにチャラける。

居心地が良かった。

『じゃあ、今から梓は俺の女、梓の男は俺な！…やっべえ 俺マジうれしいわ』

…私もうれしい。自然と笑みがこぼれる。

『俺ばっか喜んでんじゃん！梓ももつと喜べよ！それとも俺の事好きじゃない？』

何言ってるの？大好きに決まってるじゃん！ …なんて恥ずかしくて言えない。

『……。』

恥ずかしくて慎悟の目を反らした。…そのとき、慎悟の手が私の頭に回り私の頭が慎悟の胸にうずくまった。

『俺マジ梓の事好きだから』

『…私も好き』

やっと言えた。

慎悟の匂い。慎悟の体温を感じる。

このまま時間が止まってほしい。

私は幸せの絶頂だった。

第12話：私は変わる

慎悟に家まで送ってもらった。（実際には家の近く）

玄関のドアを開けると、さっきまでの幸せが嘘かのように気分は沈んでいた。

時間は21時。母がどんな顔して待っているか…。

『…ただいま』

『あずさ！っ！ちよつと来なさい』

ほらきた！声で分かるくらい母の怒りは頂点に達していた。

『こんな時間まで何してたの！？』

『…ミホと遊んで…遅くなった…』

『嘘言わないの！あんたの帰りがあんまり遅いし、連絡とれないし、お母さんミホちゃんに電話したんだから』

ヤバイ！今日のことミホに言っただけだし、ミホが急に話し作れるはずかない。ミホと遊んでないことは分かっているんだ。

『あんたいつたいこんな時間まで何してたの？』

『…』

言い返せない。

言い返す嘘が思いつかない。

どうしたらいいんだろう。そう思いながらも私の中に母に対する怒りが込み上げてきた。

何故夜遊びに行ったら駄目なの？

何故そんなに縛られなきゃならないの？

私の怒りも頂点に達した。

『どうでもいいじゃん！ほっといてよ！』

そう言っただけで自分の部屋に飛び込んだ。

初めて母に言い返した。

初めて母に反抗した。

今まで母に反抗したくても出来なかった。母が怖くて。

私は母に言い返したことで満足を感じた。今まで私の前に立ちほだかつていた大きな壁を壊せた感じた。

母が怖くて私は今まで自分を我慢してたんだ。

こんな意地っ張りになったのも、自分を素直に出せなくなったのも全部母のせいだ。

これからは母に縛られた生活なんか嫌だ。

私はその日から母対して、反抗する気持ちだけしか持たなかった。

慎悟と付き合った喜びを一番に咲美に伝えた。

『梓良かつたじゃん！私の言ったとおり男なんてすぐ見つかったでしょ？』

『ですねぇ。』

私の喜びと一緒に感じてくれた。

『咲美はいないの？』

『何が？』

『好きな人とか…』

『…気になる人ならいる』

『本当にいゝ！？どこの誰？どんな人？連絡とってるの？』

『梓落ちついて！』

最近私の男話ばかりで、咲美の男ネタはなかった。

昔は良く好きな人の話をしたけど、付き合いとかいうのはなかったし、考えてもいなかった。好きだけで満足してた。

でも今は、私には慎悟という彼氏がいる。咲美にも早く彼氏が出来てほしいと思う。

『毎朝駅で見かける人なんだ。私服でいるから学校には行っていないと思う。仕事をしてるんじゃないかなあ。まあ私の一目惚れだね』

咲美はかなりの面食いだ。咲美が一目惚れするくらいだからカッコイイ人だと思う。

『連絡とってるの？』

『そんなっ！話したこともないよ』

『電話番号聞いてみたら？』

『そんな事できないよお』

『そんな事言つてたら前に進めないよ！待ってるだけじゃ駄目！自分から行かなきゃ』

私は敬のときに素直になれず後悔した。もし初めて会ったとき自分の気持ちを素直に言えていたら、敬とあんな終わり方をしなかったんじゃないか・・・と後悔したから、咲美には後悔してほしくなかった。

『断られたらどうしよう』

『自分の気持ち言つて断られるのは仕方ない。でも伝えないまま終わるのは後悔するよ。きつと...』

『...だよ。そうだよ！私明日いつもの駅行ってみる！仕事ならいるかもしれないし』

『頑張れ！咲美！』

『ありがとう梓。私頑張るね』

ウジウジしてたって駄目。自分から前に進まなきゃ。咲美に言いながら自分に言つてた。

私は後悔しない。

私はウジウジ考えない。

私は強くなるんだから。

...私は変わった。

第13話：再確認。疑惑。

私達は付き合ってからほぼ毎日というほど会った。

朝から慎悟の部屋でまったりしながら1日を過ごす。そんな毎日…。特にどこに出かける訳でもないが、それでも一緒にいることが幸せ。帰りは毎日21時。帰ると母は毎日口うるさく怒鳴る。

私は母と顔を合わせることなく朝家を出て慎悟の家に向かう。

家に帰ると母の怒鳴り声を見殺して部屋に直行。

もう馴れた。母の怒鳴り声も。

母の怒鳴り声を見殺すだけで、こんな簡単に夜遊び出来る。何故今まで我慢してたんだろう。

家に帰ったらまず慎悟に電話。2人の決め事だ。

慎悟はメールをしない。メールだと気持ちが悪く伝わり難いから嫌いなんだって。だから私もメールはしない。慎悟とはいつも電話。

そんなこだわりを持つ慎悟も好き。

今の私は慎悟なしではいられない。慎悟に夢中だ。

そんなある日いつものように朝、起きたたての慎悟から電話が鳴る。

…いつもどおりだ。

『もしもし』

『梓おはよう』

『おはよう。慎悟』

いつもの始まりの会話。この後、

「今日何か予定ある？」

「何もないよ」

「なら、おいで」

「分かった」

という感じで毎朝慎悟の家に向かう。

…今日は違った。

『俺今から飯食うわ』

『うん』

『じゃあな』

…え！？終わり？

『…うん。じゃあね』

今日は会わないの？ 聞けなかった。

今日は何か用事があるんだろう。と思い込んだ。

今日1日慎悟からの電話はなかった。最近毎日会ってたから、慎悟だって友達と遊びたいよね。でも寂しいよ…慎悟…

でも！また明日の朝、電話鳴って…いつものように会えるだろう。朝いつも10時に慎悟から電話がある。昨日会えなかったから電話きたらすぐにでも飛んでいけるように、10時には用意を済ませ、

慎悟の電話を待った。

電話は鳴らない。

まだ寝てるのかなあ。起こすの悪いし、慎悟からの電話待とう！

いつまでも経っても慎悟からの電話はなかった。

絶対変だ！さすがに昨日の夜から今日の夜まで寝てるなんてありえない。

慎悟に嫌われたのかなあ…でも2日前まで何ともなく仲良くし

てたし…連絡できない訳でもあるのかなあ…

不安…不安でどうしようもない。

慎悟が離れていつているようで…

慎悟がいなくなったら嫌だ。

慎悟がいなくなったら私どうしたらいいの？

慎悟…早く電話してよ！

私の目からは自然と涙がこぼれ落ちていた。

泣き疲れ知らない間に眠った。

次の朝、真っ先に携帯を見た。

… 慎悟から電話はない。気が狂いそうだ。

私は慎悟に会えない寂しさに耐えられず、朝早いにも関わらず慎悟に電話していた。

『…はい…』

思いつきり寝起きの声。 慎悟がいつも電話する2時間は早い。

『 慎悟…』

『 梓か、うてか、めちゃめちゃ早いじゃん！どうした？』

どうしたじゃないよ！寂しくて死にそうだよ！

『…』

恥ずかしくて言えない

言えないけど、分かって！私がどんな気持ちで電話したか分かって！

『… 梓、話しある。今から来て』

初めて聞く暗く真剣な声。

嫌な予感。

でも、どんな話だろうと慎悟に会いたい。

『 分かった。』

すぐに向かった。

慎悟の部屋の窓ガラスを開け中に入る。 慎悟の姿が見当たらない。

慎悟はまだベッドの中にいた。 しかも寝てる…。

私はベッドの側に行き慎悟の寝顔を見つめた。

会いたかった。

寂しかった。

慎悟といるとあつという間に過ぎる一日が、 慎悟といないと凄く長い。

『… 慎悟』

そつと呼んでみた。 『ん…。 あず…さ…か。 早かったなあ』

当たり前だよ！

会いたくて、会いたくてたまらなかったんだから…。

心の声を出せたらどんなに楽だろう。
でも、慎悟には伝わってる。口に出さなくても私の気持ち、きっと
伝わってるはず…。伝わってほしい。

慎悟は寝転びながらテレビを付けた。

私もベッドの下に座りテレビを眺めてた。 何か気まずい雰囲気
のようで、テレビを見るしか出来ない。

『梓…』

『ん？』

いつもと違うのは分かっている。でも、気付いてないよう…。私はい
つもどおり…を装った。慎悟に背を向けたまま。

『梓！こっち向いて！』

私はベッドの上に乗る、慎悟も体を起こし向かいあった。

『梓はさあ、今日どうして電話してきた？』

始まった。私の苦手な真面目な話し…

『なんでそんな事聞くの？』

慎悟は意気込むように大きく煙草を吸った。

『梓は俺のことどう思ってる？』

『どうしたの？急に』

私はまだ真面目な話をする準備が出来てない。

この雰囲気を変えられることなら、変えたい。

…私はまた逃げようとした。

『梓。真剣に答えて』

まずい。。。

私がここで逃げたら慎悟とは終わってしまう。慎悟と終わりがく
ない。

…頑張ろう

『…好きだよ』

『本当に？』

『本当だよ。だから、なんでそんな事聞くの？』

『いつも、電話して誘うの俺ばつかじゃん。梓から言ってくれたことないし、俺が誘うのに無理やり付き合ってくれてんのかなあって好きだって思ってたのは俺だけなんじゃないのって』

慎悟がそんな事考えてるの知らなかった。

私はいつも当たり前のように慎悟の電話を待って、慎悟の誘いを待って、断ることなく慎悟のもとに行っていた。

慎悟の事嫌なら、慎悟がどんなに誘ったて行かない。私が行ってく事は慎悟の事を好きだから…

それで私の気持ちは伝わってると思ってた。

伝わっていなかったんだ。

私が思っているほど慎悟とは解り合えていないんだ
そう思ったら涙が出そう。

我慢した。こぼれないよう必死だった。

『好きだから慎悟のどこに来るの』

これ以上喋ったら涙がこぼれちゃう。

『俺さあ…いつも言ってるけど、梓の事マジ好きなんだあ。』

そう、慎悟は会うというも

「好きだ」

と言ってくれる。

それに対して私はいつも微笑むだけ。

それで伝わってると思ってた。

口で言わなくても伝わってるって…

『俺、梓のこと好きになるほど不安で…俺ばつか好きなのかなあって…でも、俺そんな強くないから…自分だけ好きなのとか辛いから…だから今日梓の気持ちちゃんと聞きたいって思ってた…』

『…』

今喋ったら泣けちゃう。言葉が出ない。

『梓の気持ち、ちゃんと喋ってくれないと俺わかんねえよ。』

『慎悟のこと好き…大好きだよ…』

声が震える。

涙が勝手に溢れてくる。もう駄目。

私は慎悟に涙を見せないように下を向いた。でも私が泣いてるのはきつとバレてる…。こんな事で泣いちゃって…きつと慎悟に嫌われちゃう。でも涙が止まらない。

…？

慎悟が近い。

私は慎悟に抱き締められていた。

『やつと言ってくれた。俺も梓の事好き』

嬉しくて嬉しくて私の涙は量を増し溢れ続けた。

涙でぐちゃぐちゃになった私を慎悟は優しく拭ってくれた。

そして慎悟の顔が近づき、私は素直に受け入れた。

慎悟と初めてのキス。

私の人生で二度目のキス。

そのまま私達はゆっくりベッドに横になり、とても長いキスをした。慎悟は壊れそうな物を触るように私の体に触れた。

嫌じゃなかった。敬の時とは違った。私の気持ちが変わったんだ。

ゆっくり私の服を脱がし、慎悟も器用に自分の服を脱いでいった。

お互いの体温を確かめ合うようにしばらくの間、裸で抱き合っていた。

恥ずかしかったけど、慎悟に抱かれる幸せを感じた。

慎悟の体あったかい。

慎悟のいい匂い。

このまま慎悟を離したくない。

しばらくすると慎悟は少し体を起こし

『梓初めてだよな』

耳元で囁いた。

私は頷いた。

慎悟の手が私を優しく撫で…

慎悟が私の中に来た。

私達は一つになった。お互いの気持ちを再確認するように…正直、気持ちがいいものではなかった。

痛い だけだった。でも慎悟と一段落と近づけた感じが気持ち良かった。

終わってからでも慎悟は優しく側にいてくれた。

でも、慎悟の様子がおかしい。

『どうかしたの？』

終わった後にこんな事聞けるのは私が初めてだったからだろう。

『…梓、本当に初めて？』

『うん。初めてだよ』

『嘘言つてない？』

私は直感した。

敬のときに私は血が出た。もちろん二回なんか出ない…。

慎悟は疑ってるんだ。

でも本当に慎悟が初めての相手なのに…

『本当の事言つて！俺、嘘付かれるほうが嫌だから』

さっきまでの幸せムードはどこへ行ったのか、またこんな話し…

本当の事って……。慎悟に敬との事なんか言えない。

慎悟に疑われてる事が悲しかった。一度緩んだ涙腺はまた涙を溢れ出させた。

『…本当だよ…慎悟が初めて…だ…よ…』

また涙は流れだした。

『分かった。分かったから…ごめんな』

私達は無理やり会話を変え雰囲気を変えようとした。

でも数時間前の幸せな感じにはもう戻らない。

慎悟は多分まだ私を疑ってる…

私は敬のことを思い出し、慎悟に後ろめたさを感じてる…

私達はお互い凝りを感じながら今日は早く別れた。

慎悟に抱かれた幸せよりも、慎悟を騙しているようで罪悪感でいっぱいのまま家に帰った。

今日は早く寝よう。

明日には忘れてるかもしれない…。

第14話： 涙

私は咲美に処女じゃなくなった事を報告した。

咲美は興味津々にいろいろ聞いてきたが、私はまだ慎悟に罪悪感を感じていて、咲美の話しに乘れなかった。

『ところで、咲美は例の彼とどうなったの？』

私は話しを咲美に変えた

『そうそう！彼とメールしてるんだ！』

『良かったじゃん』

彼の名前は祐介。

咲美が駅で待ち伏せをして声を掛けたいらしい。

で、すんなりメアド交換・・・って感じで仲良くしてるみたい。咲美の楽しそうな話を聞いたら無性に慎悟に会いたくなった。

あのとき、慎悟は胸の中の思いを私に言えずにいた。

私が泣いたせいで、慎悟はあれ以上私に聞けなかったんだ。

慎悟は我慢したんだ・・・

慎悟が離れて行きそうで怖い。

慎悟が遠くを感じるよ・・・

一緒にいないと余計遠くに行ってしまうそうで不安だ。

慎悟の顔を見てないと不安だ。

会いたい。会いたい。会いたい。

気づけば慎悟に電話してた。

『はい』

『慎悟？今何してるの？』

『何もしてないよ。テレビ見てた。』

慎悟は普通だった。

その普通が私の不安を一層不安にさせる。

『.....』

『梓どうかした？』

優しい声。

ずっと慎悟の側にいたい。慎悟の表情を一つ一つ見ていたい。

『今から会える？』

『いいよ。おいで。』

私は急いで慎悟に会いに行った。

『梓早いじゃん！』

『でしょう！』

やっぱり慎悟は普通だった。

二人でテレビを見ながら、ゆっくり過ごした。

慎悟はもう私にあの話しはしないつもりだろう思った。

敬との事、慎悟には話したくないはずなのに、今は聞いてほしいと思ってる。

今なら話せる。

慎悟には話せる。

今の私と慎悟の間には溝を感じる。

一緒に居ればなくなると思った不安もなくならない。

体が触れ合うぐらいにそばにいるのに、慎悟が遠い…。

敬との事を言えばこの溝がなくなることとは分かってる。

だから言いたい。

だからお願い。もう一度私に聞いて。

慎悟は聞かなかった。

二度と聞こうとしなかった。

それからも慎悟は普通だ。もう何も思っていないかのように。

私も自然と不安を忘れ、毎日慎悟と電話し、毎日慎悟と会った。毎日慎悟と体を重ねた。

とうとう、夏休みも終わった。

この夏休み敬といろいろあったが、そんなことも忘れるくらい慎悟でいっぱい夏休みだった。

私と慎悟は一緒に学校に通うことにした。

家近いから最寄りの駅も一緒。

学校近いから降りる駅も一緒。

だからこれからは一緒に行くことにした。

夏休み終わって初めての学校。

私はいつもより早く家を出て慎悟の家に向かった。

少し道は反れるが、自宅から駅までの間に慎悟の家がある。

時間的にもそう変わらない。

いつもどおり窓から慎悟の部屋に入ると慎悟はもう用意を済ませていた。

『梓おはよ!』

初めて見る慎悟の制服姿。 改めてカッコイイ・・・

『おはよお』

慎悟の家から駅まで歩いて10分程度。

私達は駅に向かった。

制服姿で初めて並んで歩くことがすごく新鮮だった。

慎悟なのに慎悟じゃないみたい・・・

初めて会った感覚に似てる。

駅に着き電車が来るまでまだだいぶ時間がある。並んで駅のベンチに座った。

『今日の梓喋んねえなあ』

『なんかいつもと違うから・・・』

『何!? 梓緊張してんの?』

私をからかうように言った。

『うるさい!』

いつもの感じに戻った。

キツ目な言葉で言い合いながらも、ジャレ合っているような・・・

『慎悟』

誰だろう…？

声のする方をみると慎悟と同じ制服を着た男の人だ！

『雅史かあ』

この人が雅史君か！

慎悟の親友雅史だ。

『珍しっ！慎悟今日は朝から学校？』

『うつせえよっ』

『って、この子が噂の梓ちゃん？』

私は恥ずかしかった。でも嬉しかった。

親友に私のこと話してくれてたんだ。

『梓ちゃん可愛いねえ 慎悟なんか止めて俺と付き合わない？』

冗談だっけすぐ分かった。

『雅史！こいつすぐ本気にするから！』

『ちよつと慎悟！』

私はそう言いながらもこれも冗談だっけ分かった。

こういうノリなんだ。

『でも噂どおり可愛いじゃん！梓ちゃん俺らの学校で噂になってて

さあ』

『…え？』

信じられない。中学まで地味で可愛いなんて言われた事のない私
が他校で噂になってるなんて・・・

『マジで！〇〇校の一年で可愛い子いるって！…で、ぶっちゃけ言
うと、朝から学校なんて来たことない慎悟が梓ちゃん見たさで早
起きして電車乗ってんの！』

『雅史やめろって！』

雅史君は慎悟に目を向け、笑いながら話をつづけた。

『で、梓ちゃん見て一目惚れって訳』

慎悟は恥ずかしそうだが私は嬉しい。

『もう雅史あっち行けて！』

『はいはい。邪魔者は退散いたしやす』

雅史は慎悟の方を見て、にやけながら歩いて行った。

『ごめんな。あいつ朝からテンション高すぎ……ってかマヂ恥ずかしいんだけど』

『……私は嬉しかったよ』

今の私は、こういう事を素直に慎悟に言えるようになっていた。照れを隠すように、慎悟は私の頭をくしゃくしゃとしたりした。

『もう！止めてよ！ぐちゃぐちゃになるじゃん！』

『そうかあ？最初からぐちゃぐちゃじゃねえ？』

『もっつ！』

そうこうしていると電車が来た。

さすがに朝のラッシュ。人がぎゅうぎゅうに詰まってる感じ。

私は扉の端に立ち、慎悟は私を囲うように私達は向き合って立った。隣の車両を見ると雅史と同じ学校の人だらう人達がガラス越しにこっちを見て笑っている。

慎悟は知らない振りをしているんだろう。

私が慎悟から目を反らし周りを見ると、同じ車両の離れた所にミホの姿を見つけた。

一瞬ミホと目が合い、私が手を振ろうとしたら、ミホは目を反らした。

……？気付いてないのかなあ。ただそう思った。

私達が乗ってる電車は高校生がとにかく多い。

私を通ってる高校。

慎悟が通ってる高校。

あと三つの高校が同じ市内に固まっている。

だから、大抵同じ時間の電車にみんなが乗るため、私と同じ制服を着た子も沢山いる。

一旦降りる駅に着いた。

今から私は学校までバスに乗る。

慎悟の学校は私が乗るバスからでも行けるが、大抵の人は電車を乗り換えて行く。

今日の慎悟は私と同じバスに乗って行くそうだ。

このバスに乗るのはほぼ私の通う学校の生徒。

ただでさえ目立つ慎悟が浮いて見えるのは仕方ない。

私達はバスの後ろの席に座った。

前を見るとミホの姿がある。

ミホはこっちを見ない。私もバスの中の人混みを掻き分けてまで、ミホの所に行くことはしない。

どうせ降りる場所は一緒だし…

今日は始業式だけだから早く終わる。

帰りに連絡を取り合う約束をして私は慎悟より一足先にバスを降りた。

…ミホの姿はない。

先に行っちゃったのかなあ…

教室に入るとミホはクラスの友達と仲良く話していた。

『ミホおはよう！久しぶりだね』

『…おはよう』

何かミホが素っ気なく感じた。

…気のせいだよ。

席に着くと私は積極的にミホに話しかけた。

『朝電車一緒だったの気付かなかった？』

『…気付いたけど…一緒に居た人梓の彼氏？』

『そつだよ！ミホに言わなかったっけ？夏休み中に出来たんだ』

『…良かったじゃん』

軽い返事。今日のミホ感じ悪い。

私はミホと話す事を止め前を向いた。

その時、

『梓ちゃん』

由希ちゃんだ！

『あつ！由希ちゃんおはよう。』

クラスがざわついた。

由希ちゃんが私達のクラスに来たことがないし、私に話しかけることに（？）だったんだろう。

多分いつの間に友達になったの？って感じたと思う。

『おはよう。ちょっと梓ちゃん慎悟さんと付き合ってたんだって？』

『うん。そうなんだ。』

『慎悟さんから彼氏に連絡あつて付き合ったの聞いたんだ！梓ちゃんいいなあ。あんなカッコイイ彼氏がいて』

『由希ちゃんも彼氏と仲良くしてるんでしょ？』

『まあ、ねえ。仲良くっていうか、腐れ縁って感じかな』

そう言いながらも好きなんだろうなって感じた。

『もうすぐ始業式始まるね！梓ちゃん一緒に行こ』

『うん』

私は由希ちゃんと体育館に向かった。

ミホがどうしたかは知らない。

急にあんな態度取られて私も気分悪いよ！

久しぶりにミホと会ったのに、結局今日は朝以来話さなかった。

午前中で学校は終わり、私は慎悟に電話した。

慎悟はもう終わってるらしく、朝バスに乗った駅で私を待っていてくれる。

私はミホに対して気分悪いまま慎悟の待つ駅に向かった。

駅に着き慎悟に電話した。

『今近くの喫茶店にいるから、そこで待ってて！今から行くから』
慎悟を待っていると、バスが来た。

中からは同じ学校の生徒が沢山降りてきた。

その中にミホの姿があった。

クラスの子と一緒にだった。ミホは私に気付き、こつちを見たがすぐ目を反らし、私の前を素通りしていった。

私は何がどうなったのか分からない。

私がミホに何かしたの？

考えたが何も思いつかない。

ここまで態度を急変されると、気分が悪い。

ミホに対し怒りが込み上げる…反面かなり凹む…

早く慎悟来ないかなあ。。。

横を見ると今私が最も会いたくない人が歩いてくる。

敬だ…

学校の友達と三人でこつちに歩いてくる。

私は下を向いた。

（お願い早く通り過ぎて！）

一人が私の前で立ち止まった。それに続いてあと二人も私の前に止まった。

私は下を向いていたため足しか見えない。…でも私の前で止まったのは「敬」

だって分かった。

…私は前を向いた。

敬が奇妙な笑みをしながら私を見る。

『先行ってて』

あとの二人は駅に向いて歩いて行った。

『梓ちゃん久しぶりだね』

その言い振りは、一時感じた優しい敬ではなかった。

笑ってはいるが、どこか冷たく、私を見下し、嘲笑うような感じだった。

『…久しぶり』

敬が怖い…

そんな私の気持ちを感じとり、楽しむかのように話し出した。

『梓ちゃんもしかして処女だったの？』

馬鹿にした言い方・・・

『……』

『梓ちゃん帰っちゃってからシーツに血付いてたから、俺びっくりしたんだけど！』

こんなところで言わないで！

私は恥ずかしくてまた下を向いた。

『梓ちゃん遊んでる風だから、俺絶対やらせてもらえと思ったんだけどなあ。。。残念だったよ。俺優しくするから、今度やらせてよ！？』

敬は笑いながら去って行った。

あの時、私が優しいと感じた敬は嘘だった。

少しでも私の事を好きでいてくれると思ってた。

それも嘘・・・

私は悔しくて、髪の毛で顔を隠し下を向いたまま泣いた。

あんな奴のせいで慎悟に嫌な思いをさせてしまった。

敬との事で私達の間溝が出来たと思った。でも、一瞬でも敬と私はお互い好きだったんだと思うと・・・仕方ない・・・と思えた時もあった。

でも、それもこれもすべて嘘だったんだ。

私は騙されたんだ。

敬はただ私とやりたかっただけだったんだ。

・・・そんな事で慎悟を傷付けたんだ・・・

悔しくって悔しくって、私は大粒の涙を零した。

もうすぐ慎悟が来る。

泣いてるところ見られたら、また慎悟に心配かけちゃう。ハンドタオルを鞆からだし、涙を拭いた。

『梓』

『慎悟!』

『ごめん待った?』

敬と会って時間を長く感じたが、実際はそんなに経ってなかった。

『んん。待つてない』

『…ん? 梓泣いてた?』

『えっ!?!』

バレた?

さっきまで泣いてたんだから目は真っ赤で腫れてる。分かるはずだ。

『泣いてないよ! コンタクトズレて痛くてさあ』

『そっか大丈夫か?』

『もう大丈夫!』

『ブサイクな顔が一段とブサイクだぞ! 梓ちゃん』

『もう! うるさい!』

良かった! 敬といたところを見られてなかったんだ。

私達は駅に向かって歩き出した。

…でも、私は気づかなかったが、敬との一部始終見ていた二人がいた。

第15話： 大好きだよ。

二人駅に向かってあるいていると、慎悟の携帯がなった。

『はい。：そんな無料だつっつの！』

：？何だろう？

電話はすぐに切れた。

慎悟は言わずらそうに

『俺の連れが梓の事見たいって：さっきいた茶店に連れてきてって
：梓が嫌ならいいんだけど：』

『：いいよ！行こ！私も慎悟の友達見たいし！』

『ごめんなあ・・・』

『気にすんなって慎悟』

慎悟の口調を真似て言ってみた。

『おっ！なかなか言うようになったなあ』

『ふふん。』

やっぱり慎悟といると楽しい。

慎悟に案内され茶店に向かった。

駅の商店街に入り、細い路地に入った。昼間なのに少し薄暗い・・・
こんなところがあるなんて知らなかった。

路地沿いには夜になると開店するんだろうと思う店が並んでいた。

そこに一件小さな喫茶店があった。

《モカ》と書かれている看板が立っていた。

慎悟はその店に入り私も後に続いた。

中にいたのは金髪や坊主や店の中なのにサングラスをはめた人など
：十数人いた。

慎悟もそうだけど・・・こんな姿で学校に行くの？と思う人ばかり・・・

みんな慎悟の友達だ。

朝、駅であつた雅史君もいた。

『梓ちゃんのお出ましい〜』

雅史君だ！

『梓ちゃんこっちおいで！俺の隣座んなよ！』

『俺の隣も空いてるぞ！』

みんなそれぞれに言う。

『梓はこっち！』

慎悟に言われ慎悟と一緒に並んで座った。

『チッ！慎悟ばっかいいところ取りかよっ』

『俺の女だっつうの』

みんな笑っている。

私は分かっている。私を口説くように言っているが、本当はみ

んなそんな気なんか全然ない。

俺らが口説きたくなるような女を連れている…

みんな慎悟を祝福しているんだ。

そんな事勿論慎悟も分かっている。

慎悟は良い友達が沢山いるんだ。

慎悟はみんなに慕われているんだ。

そんな慎悟の彼女になれた事を思うと鼻が高くなった。

周りを見ると十数人いる男の中に一人のヤンキーな女の人がいる。

雅史の隣に座り親しそうに話している。

雅史の彼女だ！直感した

とても綺麗…

茶色く染めた長い髪。

バッチリ決めた化粧。

制服を着ていなかったら、とても高校生には見えない。

私がとても子供に感じた。

きっと慎悟の周りにはこんな綺麗な女の人達がいるんだ。

慎悟は周りから慕われてて、私は鼻が高い。

でも慎悟は本当に私でいいの？

不安になった。

私と慎悟はランチを食べると店を後にした。

『梓ちゃん、また俺らとも遊ぼうね』

『うん』

挨拶代わりだと、私は笑って言った。

店を出ると

『お前あんなところで愛想振りまかなくていいの！軽く流しといたらいいんだよ！』

『うん。ごめん』

『分かったらよしっ』

また私の頭をぐちゃぐちゃにした。

慎悟はきつとヤキモチ焼いたんだ。

嬉しい。

慎悟も私の事好きでいてくれる。だから一緒にいるんだよね。

慎悟を信じよう。

慎悟の部屋に着き、私は気になっていた雅史君の彼女だろう人に付いて聞いた。

『今日モカにいた女の人雅史君の彼女？』

『レナの事？』

レナって言うんだ。

『レナは雅史の女、あいつら中学ん時から付き合ってた… もう4年ぐらい経つのかなあ…それがどうかした？』

『綺麗な人だなあって思ってた』

『そうかあ…俺は梓の方が可愛いと思うけど』

『可愛いと綺麗は違うの！…なんか大人だなあって』

『そらそうだろ！梓より二つも上だし…』

なんだか私の言いたい事が伝わってない気がする…

『でもレナはすげえよ！雅史ってカッコイじゃない！だから女とか嫌ってほど寄って来るわけ・・・断ることもあつたけど…誘惑に負けちゃう時もあつてさあ。。。』

『浮気って事？』

『そう。それも一回じゃないなあ・・・でもレナは常に雅史が戻ってくるの待ってたんだよ。まっレナも気が荒いから黙って待ってた訳じゃないけどな』

笑いながら話してくれた。今笑って話せるってことは、今は大丈夫ってことだろう。

私は勝手にそう解釈した。

『しかもあいつ、俺らと一緒にのアホ校行ってるけど、実はめっちゃや頭いいの！中学ん時から俺らと一緒に馬鹿やってたのに、何故か勉強は出来てさあ。もつと上の高校だって余裕で行けたのに・・・あいつ、俺らと一緒にの高校行ってるの！』

『なんでなんだろう・・・』

『決まってるじゃん！雅史と一緒にいたいからじゃん！』

『凄いな。親は何も言わなかったのかなあ』

『…そらうるさく言われただろ？あいつ、俺らには何も言わなかったけど…』

『雅史君にも…？』

『言うどころか、雅史には』

「別にあんたと一緒にいたいからあの学校選らんだ訳じゃないからね！調子に乗らないでね！」

だって！そんな事言っても分かるけどなっ』

レナさんてカッコイイ。きつと雅史君の重荷にならないように気を使っただ。

その時、慎悟の携帯がなった。

『おっ啓太じゃん』

『啓太？』

『由希の男だよ！梓ちよつと待ってて』

私に断りを入れ電話にでた。

『啓太かつ！どうした？』

話しの内容まではわからないが、啓太の声が電話から洩れてる。

啓太と話していると、慎悟の声が変わっていった。怒りが混じった声。

『今、由希も一緒にいるのか？俺今からそっち行くから』

慎悟は電話を切り、私に向き直した。

『梓、今日何かあった？』

・・・なんだろう。

『何もないよ！』

一瞬、敬がよぎったが、まさかと思いシラをきった。

『俺今から啓太のとこ行くから、梓送ってくわ』

只ならぬ感じがした。

いつもは歩いて送ってくれるのを、今日は単車で送ってくれた。

『また連絡するから』

と残し凄い勢いで行った。

夜になつても慎悟からの電話は来ない。

どうしたんだろう。

その時、電話が鳴った。

慎悟ではなかった。

由希ちゃんだ。

さつき慎悟が電話してた時、由希ちゃんの名前が出た。由希ちゃん

んなら何か知ってるかも…と思い電話に出た。

『あずさちゃん？』

由希ちゃんのいつもの明るい声と違った。

芯はしっかりしているものの…少し声が震えてた。

『どうしたの？』

『…今日の帰り駅で敬と話してたよね？』

『 えっ？ 』

見られてたの？

『 私、啓太と駅で待ち合わせしてて…そしたら…敬と梓ちゃん話してるの見て… 』

『 …うん。 』

見られてたんだ。。

『 啓太が梓ちゃん達のとこ行こうとしたんだけど…私止めたの…ただ話してるだけだよって！ …でも敬が行ったあと梓ちゃん…泣いてたよね…？ 』

『 …… 』

『 気になって、私達梓ちゃんのとこに行こうとしたら、慎悟さんの姿見えて…行けなかった。 』

『 …… 』

私は何も言えなかった。

『 でもね！…梓ちゃんが泣いてたの凄く気になったの…。梓ちゃんと敬引き合わせたの私だし…。 慎悟さんも泣いてたの知らない感じだったし…。 』

『 …うん。 』

『 その後、啓太がキレちゃって… 』

『 …え！なんで！？ 』

『 啓太、慎悟さんのこと凄く慕ってて…その慎悟さんの彼女が他の男に泣かされて…でも慎悟さんはそれを知らないから… 』

『 …うん… 』

『 …私止めたんだけど…啓太が慎悟さんに伝えるって電話したの…
…それで慎悟怒ってたんだ… 』

『 慎悟…由希ちゃん達のとこ行っただよね？ 』

『 …うん。 』

『 今もいるの？ 』

『 …それが…今飛び出して行っちゃった 』

『どこいったの!?!』

『…多分…敬のどこ…』

『敬の…どこ?』

『…うん。慎悟さん凄く怒ってて…多分敬やバイよ。私・直接は見たことないけど…啓太が言ってた。…慎悟さん怒らせるとマジやばいつて!』

『…啓太くんは?いるの?』

『慎悟さんが飛び出して行ってから、啓太…雅史さんに電話して…啓太も出てった』

由希ちゃんが泣いてる。

私のせいで、みんなを巻き込んでる。

『由希ちゃんごめん!』

私は一方的に電話を切り家を飛び出した。

『出かけてくる〜!』

『ちよつと!梓〜』

母の目に私が映る前に家を出た。

こんなところで捕まってる場合じゃない!

話しは後で聞くから…

どれだけでも聞くから…

今だけは許して…お母さん…

私は夢中で慎悟の家に向かっていた。

夢中過ぎて分からなかった。家に行っても慎悟はいない。

今じつと慎悟を待つことも出来ない…

でも、慎悟の居場所が分からない…

私は行く宛もなく歩いた。

『ねえねえ。俺らと遊び行かない?』

横を見ると、原付に二人乗りした知らない男。

勿論、無視。今相手してる場合じゃない。

『無視しないでよお。遊び行こうよお』

急に怒りが込み上げた。

『うつせえんだよ！てめえらの相手してる場合じゃねえんだよ！』
原付の二人組はブツブツ言いながら去っていった。

早く慎悟を見つけない！

きっと慎悟は傷付いてる。

私からじゃなく他人から今日の事を聞いた。

それは慎悟が最も嫌うことだから…

分かってたのに…

そんな事分かってたのに…言えなかった。

慎悟にあつて謝りたい。

『彼女と俺らとは遊び行かない？』

またかよっ！？俺らとは？馬鹿じゃねえの！

『いかなえっ……』

顔を上げてビツクリ！

『慎悟！』

単車に乗った慎悟と雅史君だ。

『梓やるなあ。ナンパ男を追い払うとこ見てたぞ！これで俺も安心だ！』

『梓ちゃんこええ！』

慎悟も雅史君も私の気持ちも知らないで、呑気だ！

とりあえず私も単車に乗った。無理やり三人乗りだ。

雅史君を送って行った。

雅史君が単車を降りると私を呼んだ。

何だろうと思ひ慎悟の顔をみた。

『…行つてこい』

私は単車を降り雅史君の所に行った。

『梓ちゃん。今日の事だいたい分かつてるよね？』

『…うん』

慎悟には聞こえない小さな落ち着いた声。

『慎悟の事責めないであげてね』

『責めるなんて！…私が悪いから…』

『梓ちゃんが悪くないよ！慎悟も悪くない！…男と女やっぱいろいろあるじゃん！自分の女が泣いてるのはやっぱりほっとけない。特に俺らみたいのは、言葉で上手く言うのは苦手なんだよ！』

だから今回の慎悟の事許してあげて！それに…あいつ（敬）泣いて謝ってたし（笑）』

『…うん。ありがとう。雅史君もごめんね。迷惑かけちゃって…』

『そんな事はいいよ。親友の事だしさ！親友が傷付いてる時、その親友の彼女が傷付いてる時…やっぱほっとけない…』

でも俺が行かなかったら、敬って奴死んでたな！』

『えっ！？』

『慎悟一度キレると収まれないから…で、いつも俺が止め役ってこと！でもまあ、慎悟の勢いに最初っからビビってたから…』

『そうなんだ…』

『…梓ちゃん…辛い思いしたんだね。』

優しい言葉に緊張の糸が切れた。

泣けてきちゃうよ…

『梓〜！』

慎悟が呼んでる

『多分今日の事慎悟は言わないと思う。梓ちゃんの事も聞かないと思う。だから俺が代わりに伝えたから…』

『ありがとう。雅史君。』

『仲良くするんだよ』

雅史君に手を振り慎悟の元に行った。

『なげえよ！雅史と何話してたんだよ？』

分かってるくせに

『ちよつとねえ』

私は誤魔化した。

私は単車にまたがり、走り出した。

『慎悟はいい友達持つてるね…』

『何！？聞こえない！』

『なんでもない！』

慎悟を掴む腕が強まる。

慎悟が懐かしい…。

数時間前まで一緒にいたのに…ずっと会ってなかったような…

そのまま私は家に送ってもらった。

『…慎悟…ごめんね』

慎悟は何も言わず、バイクにまたがったまま、私を抱き締めてくれた。

『梓、おやすみ。また明日なっ』

『おやすみ、慎悟。また明日ね』

凄く長く感じた1日…

慎悟。 慎悟。

ずっと一緒にいようね！

大好きだよ

第16話： 失ったもの（前書き）

あらすじを変えました。

今回短いです。どうぞ読んで下さい。

第16話：失ったもの

私は次の日学校で由希ちゃんに謝った。

『昨日はごめんね』

『いいよお。そんな事』

明るい由希ちゃんに戻っていた。

『梓ちゃんと電話切ってからすぐに啓太戻ってきたの…雅史さんに慎悟のそこには俺が行くから、お前は戻れて言われたみたいで』

『そうなんだ。啓太君にも迷惑かけちゃって…ごめんね。』

『そんな事…もとはと言えば、啓太が勝手に慎悟さんに電話してこ
うなっちゃった訳だし…こっちこそごめんね。…ところで、梓ちゃん敬と…ごめん！聞かない！梓ちゃんが言いたくなったら言つて
！』

『…ごめんね。』

そこまで仲良くない私にこんな気遣いをしてくれる。

由希ちゃんはいいい子だ。それに比べてミホは…

学校が始まってから大分経つ…

まだ一度もミホと話していない。

私を避けているのはよく分かる。

それに今まで仲良くしてたクラスメートも、無視まではしないが、
どこか素っ気ない。

クラスで除け者にされてる感じ。

どうせ除け者にされるんだったら、その訳を聞いてみよう！

ミホに直接聞こうとしたが私を避けてるため話せない。

最近ミホと仲良くしてる子に聞いた。

『ねえねえ。ミホ私の事避けてるよね？』

『…そう…かなあ』

どこか私を怖がってる感じがした

『私、別に喧嘩したい訳じゃないから…教えて』

言いづらそうに話し始めた

『梓ちゃん 校に彼氏いるんだよね?』

『うん』

何故知ってるんだろう? 毎朝一緒にいるから見たのかなあ...

『ミホ気になる人がいるって言ってたよね?』

え? 知らない。... そんな事言ってたかなあ... 言ってたような気もする...

『そうなんだ... それが何か関係あるの?』

とりあえず、知らない振りをした

『ミホが気になってた人って... 梓ちゃんの彼氏なんだ』

『... えっ! ? どう言うこと?』

『多分... 梓ちゃんが彼と付き合う前から... ミホは彼のこと好きで... それを知って梓ちゃんは彼と付き合ってたって... 彼を梓に取られたって...』

... そんな事知らなかった...

ミホが気になる人がいる事は聞いたような気もするけど... それが
慎悟! ?

そんな事聞いてない!

しかも取られたって? どういう事?

知らない。知らないよ私...

『取られたって? どういう事?』

『私もよく分かんないけど... ミホの好きな人を知って梓が取った
って』

知らない。本当に知らない。ミホの好きな相手が慎悟なんて...

『... ありがとう... もういいよ』

私は弁解する気力もなかった。

ここで意地でも誤解を解くことはできたはず...

まだミホとやり直せたはず...

でも今の私はそんな事考えられなかった。

誤解を解くどころかミホを憎いとさえ思った。

ミホは慎悟が好きなんだ。

私から慎悟を奪おうとする人は許さない。

私は慎悟に夢中になり過ぎて分からなくなっていた。

- ミホは私から慎悟を取ろうとはしない。

- ミホはちゃんと言えば分かってくれる子

- 私はミホを親友だと思っていた事。

私は大切な事すべて忘れてしまっていた。分からなくなっていた。

…今の私は慎悟しか見えていなかった。

その日から私はミホに話しかけようという気をなくした。

それどころか、ミホに対して敵対心を持つようになった。

…慎悟は私の！と言わんばかりに。。。そう思う反面見下していた。

あなたの好きな慎悟は、私の彼氏なんだから…私を選んだんだから…と。

私には慎悟がいる。

ミホなんていなくてもいい。

一度は親友と思ったミホを私は簡単に切り捨てた。

私は、私の中からミホを捨てた。。。

第17話：解放

ミホとは話してない。

私は学校で由希ちゃんと過ごすことが多くなった。

慎悟と啓太が知り合いってこともあり、由希ちゃんとは話しも合ったし、楽しかった。

由希ちゃんのグループの子達とも少しずつ話すようになった。

それも・慎悟の存在が大きかった。

由希ちゃんと他10人のグループ

その内由希ちゃん含め7人が彼氏いる。

その内5人が慎悟のいる 校の生徒と付き合っている。

だから、私が慎悟の彼女とあつて興味があるみたいだ。

ミホが居なくなつてから・学校で友達はいなかった。

でも今は慎悟のお陰で由希ちゃん達と友達になれた。

こんなところでも慎悟に助けられてる

私は自然と由希ちゃん達のグループの一員になっていた。

学校の外でも一緒にいるときが多くなった。

外から見ると華やかなグループ、人達に見えた。

実際中にはいると、イメージとは違った。

彼氏に悩んでたり

親の事で悩んでたり

悩み事は一緒だ。

男の人と付き合つたことがない子さえいた。

あとわかつたのは、10人もいるグループ。

グループの中にもグループがある。

学校で過ごしたりするのはみんな一緒。

でも、大体みんな2・

3人に軽く別れていた。

私は最初は由希ちゃんと仲が良かったが、特に真弓と恵里と仲良くなった。

由希ちゃんはあまり学校に来ない。

かったるいみたいで…

真弓は高校に入ってから、友達に紹介された他校の同い年の人と付き合っているみたいだ。

恵里は私達の一つ上の彼氏がいる。慎悟と一緒に学校の人。慎悟の一つ下だ。恵里が中学の時から付き合ってるみたい。

敬は、慎悟との一件があってから、私に話しかけることはなかった。

私と目を合わすこともなかった。

最近姿を見ないと思ったら、学校を辞めていた。
辞めた理由は知らない。

多分、敬が言い出したのだろう。

学校の男の中で、

梓はやばい人と付き合ってるから、手を出さない方がいい。
という噂が流れていた。

口説く男は勿論、口説くつもりはなくても、私に話しかけて慎悟に目を付けられるのが怖いんだろう。

今では、学校で私に声をかける男はいない…

私はそれでもいい。

学校にいれば、真弓や恵里がいる。

学校を出れば慎悟がいる。慎悟以外の男なんかいらない…

・今日は慎悟と一緒に帰らない。

用事があるから、先に慎悟の部屋に行って待つ事になっている。

他人の家にその家の人（慎悟）がいないのに入るのは初めて緊張した。

でも慎悟の親は絶対慎悟の部屋に入ってこない・・・

慎悟と付き合つて、もう3ヶ月：この家・・・この部屋には何十回：数えられないほどいるが、一度も慎悟の親に会った事がない。。

私はこの部屋で一人で何をしたらいいか分からず、テレビも付けないで、じっと座っていた。

フツとクローゼットが開きっぱなしになっているのが気になった。クローゼットの中には前に慎悟が見せてくれたアルバムがあった。

その横に、小さなアルバムがもう一つあった。

私は無性にそのアルバムがきになった。

見たい！でも勝手に見ちゃいけない・・・

私は自分の好奇心に負け理性を失った。

慎悟はまだ帰ってこない・・・

私は小さなアルバムを手にとった。

ゆっくりアルバムを開いた・・・

：見なきゃよかった。

一ページ見て思った。

写真には慎悟と：慎悟の隣には女の人・・・

悔しいけど、凄く綺麗な人・・・

レナさんを見たとき綺麗と思った。でも、写真に映る人はレナさん

よりも断然綺麗・・・

ページをめくる手は止まらなかった。

アルバムは最後まで、慎悟と女の人だった・・・

二人で頬を寄せた写真

幸せそうな笑顔の写真

キスをした写真

二人の思い出がつまった写真

私は初めて嫉妬した。

足音が聞こえ、私は急いでアルバムを締まった。

慎悟が帰ってきた。

私はなにもなかった用に慎悟を迎えた。

『おかえり』

『ただいま』

その日私達は久しぶりに躰を重ねた。

慎悟と躰を合わせていても、写真の女の人気が気になった。

あの人もこういう事してたんだ…

慎悟に聞きたい。

あの人は昔の彼女なの？

どうして私というのに、まだアルバムを大切にしてるの？

まだ慎悟の中に彼女はいるの？

聞きたい事が沢山ある。

…聞けない…

女々しいのは嫌だから…

女々しいと思われるのが嫌だから…

あれから、どれだけ慎悟と一緒にいても…どれだけ躰を合わせ

ても…どれだけ慎悟に

「愛してる」

と言われても…写真の人を忘れる事はなかった。

何故なら、慎悟のあんな顔を見たから…

私には見せない顔…

アルバムの中の慎悟はいつも楽しそうで…癒されていた。

私には見せない慎悟の癒された顔。

それだけ、彼女の存在の大きさを魅せられた気がしたから…

彼女に対する嫉妬は日に日に大きくなっていく。

その日たまたま由希ちゃんが学校に来ている。

由希ちゃんなら知っているかも・・・

『由希ちゃん。聞きたい事があるんだけど、ちょっといい？』

『うん。どうかした？』

『慎悟の事で…』

私達は屋上に向かった。

『慎悟さんと何かあったの？』

『そういう訳じゃないんだけど…慎悟が昔付き合ってた人の事なんだけど…』

『私を知ってることなら話すけど…梓ちゃんも分かっていると思うけど、慎悟さんカッコイイから…聞いて良いことばかりじゃないよ！』

…それでもいいの？』

『…いいの』

心の準備は出来ている・・・

『なら・・・私の知ってる事は話すよ』

『慎悟の昔の彼女で凄く綺麗な人いた？』

『^{ルミ}瑠美さんじゃない？』

『名前は分かんない…』

『瑠美さんは、梓ちゃんと付き合う前に慎悟さんと付き合ってた人凄く綺麗な人だったなあ』

『…どういう付き合いしてたの？』

『詳しくは知らないけど…慎悟さんと一年ぐらい付き合ってたんじゃないかなあ…本当に綺麗な人でお似合いの二人だったよ！…あつ

…ごめん』

『いいの。続けて』

『瑠美さんとは梓ちゃんと付き合う半年前に別れたの。瑠美さんに

他に好きな人が出来たみたいで：慎悟さん振られたの：それでもまだ瑠美さんのこと引きずって、瑠美さんが戻って来るって信じてたんだって．．．でも戻ってこなくて、凄く荒れてた時期もあったんだって．．．で、梓ちゃんと出会ってって感じかな』

『まだその人の事忘れてないのかなあ』

『ん〜。でも、みんな言ってるみたいだよ。梓ちゃんと付き合ってから慎悟さん落ち着いたって！それって、梓ちゃんのこと好きだからでしょ？』

『まだ忘れてはないのかなあ』

『私が思うに：人ってそんなに簡単に忘れないと思うよ。特に自分がマジになった人の事は：ずっと忘れないと思う！上手く言えないけど、もし、私が啓太と別れたとするじゃん！私は他に好きな人が出来たとしても、きっと啓太の事は忘れないよ！自分が真剣に愛した人だしさっ！だから心の中にはずっといると思う。おばあちゃんになってもね』

『そういう物なのかなあ…』

『私はそう思うよ！だから慎悟さんの中に瑠美さんがいても不思議じゃないよ！だからって今でも瑠美さんが好きっていうのは違う感じがする。今大切なのは梓ちゃんだと思うよ』

『そういう物かあ。ありがとう。由希ちゃんの話聞いて楽しかった』

『よかった。役に立てて！でもこのこと慎悟さんに言わないでね。

啓太に怒られちゃう』

『言わない。私も慎悟に内緒にしたいし』

由希ちゃんの意見に納得した。

相談してよかった。

私はやっと写真の人から解放された。

今は私が彼女．．

私の彼氏は慎悟・・

お互い好き・・・

その気持ちで十分だよね！

慎悟との今を大切にしよう。

第18話： 離さないで…

－ もう季節は冬。

慎悟と付き合って4ヶ月が経つ。

もうすぐクリスマス…という時、一つの事件が起きた。

由希ちゃんと啓太君が別れた。

理由は啓太君の浮気だった。

由希ちゃんはそれが、どうしても許せなかったらしい。

それから、由希ちゃんは一段と学校に来なくなつた。

私が最後に由希ちゃんと会ったとき私に言った

『私、啓太と3年間一緒にいたんだ。離れることなんて考えた事なかった…この先ずっと一緒だと思つてた。…でも、案外別れるときはあつさりなんだよね。びつくりしちゃった。』

『戻ることはないの？』

『ないよ…。私の中でちゃんと整理したから…啓太のことも片付けちゃった…』

とても悲しい声…。泣くことにも疲れてしまったかのような…。悲しかった。

それから間もなくして、由希ちゃんは学校を辞めた。

私は相変わらず学校帰りは大抵慎悟という。

『もうすぐクリスマスだね』

『だなあ…梓一緒にいれる？』

『うん！』

『今年クリスマス土日じゃん！泊まりにこない？』

『いいの？』

『梓が良ければ』

『全然いいよ』

彼氏と過ごす初めてのクリスマス。しかもお泊まり
私はクリスマスが来るのを楽しみに待った。

12月24日

朝から慎悟の家に向かった。

親には友達の家泊まると言った。

今はもう昔の私とは違った。

親と話すことも少なくなり、毎日夜遅く帰る。

母親も昔とは違った。

出かけるときも、誰と行くの？早く帰りなさいよ！など言わなくな
った。母がそれを言う前に私がいなくなってるっていう感じが…
夜遅く帰ってもうるさく言わなくなった。
きつと諦めたんだろう。

今日は夜、慎悟と雅史君とレナさんとご飯を食べに行く予定。

私が朝から行っても特にすることは無い。

でも少しでも長く慎悟といたいから…

私達は雅史君達と待ち合わせの時間まで、テレビを見たり、昼寝を
したり、話をしたり、ゆっくり過ごした。

- 集合時間になり、私達はバイクにまたがり向かった。

4人で会うのは初めて…

雅史君とはよく会うけど、彼女のレナさんと会うのは、私が初めて

モカに行ったあの日以来…

近くで見ると一段と綺麗…

その時嫌な思いがよぎった。

きつと数ヶ月前までは、この場所…

う人がいたんだ…

私がいる場所に瑠美とい

悲しくなるから止めた。

今日は楽しいクリスマスなんだから！

レナさんは優しかった。

もつと怖い人を想像してたけど…凄く気が回る人…

私のお皿にご飯を取ってくれたりした。

- 集合時間になり、私達はバイクにまたがり向かった。

4人で会うのは初めて…

雅史君とはよく会うけど、彼女のレナさんと会うのは、私が初めてモカに行ったあの日以来…

近くで見ると一段と綺麗…

その時嫌な思いがよぎった。

きつと数ヶ月前までは、この場所…

私がいる場所に瑠美とい

う人がいたんだ…

悲しくなるから止めた。

今日は楽しいクリスマスなんだから！

レナさんは優しかった。

もつと怖い人を想像してたけど…凄く気が回る人…

私のお皿にご飯を取ってくれたりした。

慎悟や雅史君が煙草を吸えば、軽く灰皿を差し出す。

そんな気遣いが出来る人…

私達のご飯を食べゆつくり色々な事を話した。

私と慎悟の事…

雅史君とレナさんの事…

学校の事…

時間はたっぷりある。私達は今の時間を楽しんだ。

私達は店を出た。雅史君達とはここでサヨナラだ。後はお互い二人きりで過ごす時間…

慎悟・雅史君・私・レナさんといった感じで店を出る。

慎悟と雅史君は楽しそうに大分前にいる…私が店を出て慎悟のところにこうとしたとき…

レナさんが小さな声で、

「梓ちゃんごめん」

と言った。

私は何だろうと思って、振り返ったとき、レナさんは叫んでいた。

『慎悟！瑠美！あの人と別れたんだよ！…泣いてたよ！』

「慎悟に会いたいって」

」

一瞬四人の時間が止まった…。

私は頭の中が真っ白になった

『レナ！』

一瞬の沈黙を解くかのように、雅史君は怒り混じりに叫んだ。

止まった時間は流れ出した。

私はレナさんの言葉の意味を理解した。

理解するとともに、私の居場所がなくなる気がした。

…私どうしたらいいの？

…私ここにいるのに…消えちゃいそうだよ

歩きたいのに…慎悟のどこに行きたいのに…地面に張り付いたように足が動かない…

その時足が動いた！

慎悟が私の腕を引っ張ってくれてる。

『じゃあなっ！お休み！』

慎悟は私の肩を強く抱きながら歩き…何もなかったように雅史君達に別れの挨拶をした。

『…慎悟！』

私達がバイクに向かって歩いてるときも、レナさんの叫びは聞こえてた。

『止めるレナ！』

レナさんを止める雅史君の声…

慎悟は振り返らなかった

慎悟に離されたら、止まっていまいそうな足…

慎悟はずっと支えてくれた。

慎悟の部屋に着いた。

暗い部屋…

慎悟は部屋の電気は付けず、部屋の隅にあるライトを付けた。
少し…ほんの少し明るくなった部屋…

私達は会話をなくした。

私は慎悟に聞きたい事などなかった。

…瑠美さんのことを…

私の頭は壊れてた。

考える力をなくしてた。

『…梓？』

慎悟が読んではるのに…言葉が出ない。

でも慎悟の方を向いた。

『こっち来て』

黙って慎悟に並んでベッドに座った。

『手。出して…』

慎悟に言われるまま手を出した。

『クリスマスプレゼント！』

そつと私の指に通した。 指輪

『お揃い!』

慎悟は優しく微笑み自分の手を見せた。

『…ありがと』

嬉しくて、自然と涙がこぼれてる。

『…ありがと…ありがと…』

何度も言っただ。

何度言っても足りないくらい…

慎悟はそつと私を抱き締めた。ずつと抱き締めてくれた。

慎悟がいてくれたら私は何もいらない!

何も望まない。

慎悟が側にいてくれるなら何でもする

だから…私から離れていかないで…

12月25日

クリスマスも終わっちゃうという寂しさがあった。

『今日は二人で出かけようぜ!』

『うん』

私達は付き合ってから、いつも一緒にいたけど、出かけるって事をしなかった。

学校帰りは、大抵モカに寄り、慎悟の友達と過ごす。

休みの日は慎悟の家でまったり…

といった感じで数ヶ月過ごしてきた。

私は慎悟と過ごすどれも楽しかった。

嫌だなんて思っただ事一度もない。

…でも、デートはやっぱり嬉しい。

慎悟は水族館に連れて行ってくれた。
本当に楽しかった。

帰り道海に連れて行ってくれた。
冬の海って綺麗・・・って事慎悟に教えてもらった。
夜景を見に連れて行ってくれた。

初めて見た夜景・・・
言葉を失うほど綺麗・・・

今日1日私達は色々なところに行った。

思い出を作るように

別れ際、慎悟は言った

『梓、愛してる』

いつもより重い言葉・・・

『私もだよ！』

私は一人になり、幸せを噛み締めていた。

それと共に、恐さが込み上げた。

慎悟の事大好き・・・好きで好きでたまらない。

その分、慎悟がいなくなつた事を考えると怖い・・・

第19話： 別れ

慎悟を好きになればなるほど…不安になる。

今日も学校帰り、慎悟とモカに寄り 慎悟の家にいき…いつも通りの1日・・・

… 慎悟の携帯が鳴るまでは…

慎悟の携帯が鳴った。 慎悟は携帯の画面を見ると、携帯を閉じた。

『…出ないの？』

『梓と一緒にいるのに、電話に出るの時間が勿体無いじゃん！』

慎悟は冗談ぽく言った。

でも私は見逃さなかった。

着信の画面を見た慎悟の切ない表情…

… まだ鳴っている。

… 切れた。

… また鳴った。

… 慎悟はまた携帯を閉じた。

『出ないの？』

また聞いた。

『いいんだよ！』

少しムキになる慎悟…

そうしているうちも、携帯は鳴ったり止んだりを繰り返している。

『出なよ！』

ムキになってるのは私だ・・・

『…はい』

静かに出た

電話の向こうの相手は女だ。 しかも泣いてる…

電話からかすかに漏れる声…

瑠美さんだと直感した。

意外に私は冷静だった。

慎悟が電話に出る前から…私が

「出なよ」

と言った時から…んん。最初に携帯を閉じた時から分かっていた。

…瑠美さんからの電話だって…

分かってた…

慎悟は電話を切ると

『ごめん梓！』

そう言い残し、飛び出して言った。

私の返事を聞く前に…

慎悟が飛び出して行くことも分かっていたような…

私は一人部屋にいる。

不思議と泣くこともなかった。

最後の結末までも分かっていたように落ち着いていた…

私は静かに立ち上がり、慎悟の部屋を後にした。指輪を置いて…

もう二度来ることのない部屋

静かな夜の道をゆっくり歩いた。

いつも慎悟と歩いた道を今は一人歩いている

…慎悟と過ごした楽しい時間が蘇ってきた。

今になって涙が出る。

でも私の足は止まることなく歩いてる…前に進んでる…

涙と一緒に慎悟を流してしまおう。

私はゆっくり、ゆっくり歩き泣いた。

慎悟を流すにはまだ涙がたりないよ…

慎悟との事…流すには歩く距離が短いよ…

沢山泣いた。。

枯れるかと思うほど涙はでた。。

家の前で涙を拭いた。

この扉を開ければ慎悟とは完全に終わり・・・
勢いよく家に入った。

ベッドに横になり、ボーっとした。

…終わっちゃった…

もう涙は出ない
出さない。

由希ちゃんの言葉を思い出した。

「案外終わりはあっさりなんだよね」

ほんと！ 自分がここまであっさりいくとは思ってもみなかった。
もっと泣きじゃくり、もっと気を荒らすと思ってた。

よく別れは突然くると言う。

…でも、私も由希ちゃんも、きっと別れを予感してた。
好きだから…愛してるから…ずっと見てるから…

一つ一つの表情、変化を見逃さない。

そして、別れの予感を感じるんだ。

そして、知らない間に自分の気持ちを整理してる。

私も由希ちゃんもその整理が別れだった。

私は疲れて、とっても疲れて、眠った。

慎悟の事好き過ぎて、だから不安で、私疲れちゃったよ慎悟。

私はぐっすり寝た。起きたのは昼。

携帯のランプが光っている…お知らせだ…

慎悟からの電話

履歴が埋まるほどの着信。

こんなに鳴ってたのに私寝てたんだ。

私は慎悟に電話をしなかった。

私は昨日すっかり自分の気持ちにケリを付けた。
でも、慎悟の声聞いたら気持ちが揺らぎそうだから…
それに、慎悟に別れを告げられるのが怖かった。

今日は久しぶりに咲美に会う。最初慎悟とばかりで咲美と会ってなかったから…

私はもう一度自分に言い聞かすように、慎悟との別れを咲美に伝えた。

私が普通に話している事が不思議だったのか

『梓強くなつたね』

『そうかなあ』

強くなるって決めたから…

『私、もつと落ち込んでると思ってた』

『ん。自分の中でちゃんと整理したから…落ち込んだって、泣いたって、何も変わらない。ならそんなこと止めようって！』

『強いなあ．．梓』

慎悟からの電話はまだ鳴ってる。1日5回ぐらい…私の携帯のメモリから慎悟は消えてる。でもずっと…毎日見てきた番号…覚えてる。知らない番組からも鳴る。多分雅史君だろう。

私は出なかった。

しばらくすると、二人からの電話は鳴らなくなった。本当に終わった

私はいつもの日常に戻った。ただ隣に慎悟がいないだけ…

寂しさを紛らわすように、毎日遊んだ。

恵里や真弓と…毎日・毎日・夜遅くまで…

家には寝に帰るだけ…

学校に行かない日もある。静かに授業を聞いていると、慎悟を思い

出し寂しくなるから…

一人で歩いていても、ナンパはされる。
なんの抵抗もなく付いて行ったりした。

好きでもない男と付き合ったり…好きになれるかもしれない…
でも好きになれず、すぐに私が別れを言う。

また違う男…男…男

転々とした。

どれも長くは続かない。1ヶ月…半月と保たない。

一夜限りの男も沢山いた。

どれも駄目。

慎悟と別れて2ヶ月が経つ…

短い間に私は色々な男と関係を持った。家に帰ること、学校に行く

ことも忘れて…

どれも、私の心を満たしてくれない…

どれだけの男と寝ても…

どれだけの男に

「愛してる」

と言われても…

私の心は満たされなかった。

躰目当ての男は、その場だけ…

会って間もない私の事を

「愛してる」

と言う男…

どれも信じられない。

どれも詰まらない。

今日は卒業式

今日は恵里と真弓と遊ぶ事になってるし、卒業式だけだから、午前中で終わるから学校に行った。

一年の私には卒業式なんて関係ない。

ずっと寝てた。寝てる間に終わってた。

私達は早々に学校を後にし、バスに乗り込んだ。

『とりあえずカラオケでも行こうよ』

『行こうよ』

恵里の提案に私と真弓は乗った。

私達は行きつけの駅の近くにあるカラオケに行くことにした。

バスが駅に近付いて行くと、

今日は卒業式とあって、駅には、花束を持った色々な学校の卒業生らしき人がたむろっていた。

慎悟も卒業かあ…

いつも私の隣にいてくれた慎悟…

短い間だったが、私達は愛し合った。

ほんの少し前の事なのに、凄く懐かしく感じた。

駅に沢山いる卒業生の中に慎悟の姿を見つけた。

まだ私は慎悟を目で追っている。

慎悟と毎朝歩いた場所を歩いてても…

慎悟と帰ったこの駅にいても…

慎悟の姿を常に探してた。

…でも、別れてから一度も会うことはなかった。

私は窓際に座り、動くバスの中から慎悟を目で追った。

慎悟達がいる前を通り過ぎバスが止まった。

慎悟は私に気付いていない。

私は見てたよ… 慎悟… 慎悟の晴れ姿… この目に焼き付けたから… ありがとう慎悟…

私は慎悟にお別れ出来ないままいた。

でも今出来た。

慎悟は私に気付いていない。
それで良かった。

今の私は慎悟と付き合ってた私と違ってしまったから。
汚れてしまったから。
慎悟に合わす顔ないから。

私達はバスを降りた。

カラオケに行くには慎悟達の前を通らないといけない。…どうしよう…

恵里と真弓は慎悟達とは逆の方向に歩きだした。

『カラオケ行かないの？』

私は聞いた。

『カラオケこつちからでも行けるじゃん！』

恵里が言った。

『梓が向こうから行きたいならいいけど？』

真弓が悪戯っぽく言った。

私を思ってくれたんだ。

『…ありがとう』

慎悟に気付かれることなく、私達は歩き出した。

『梓ちゃん！』

聞き覚えのある声…

振り返ると雅史君が立っていた。

私は恵里と真弓に先に行ってるよう伝えた。

『梓ちゃん。久しぶり！』

あの頃と同じ笑顔…

『久しぶりだね』

『元気してた？』

『元気してたよ！雅史君卒業だね。おめでとう。』

『ありがとっ！』

『よく私がいるの分かったね？』

『バスの中に梓ちゃんの姿見つけて！梓ちゃんは俺に全然気付いてなかったけど！…慎悟見てたもんね？』

雅史君はするどいなあ。

『何言ってるのぉ？』

誤魔化すのでいっぱいだ。

『梓ちゃんの元気な顔見れて良かった！心配してたんだ！』

『私は元気だよ！………慎悟は元気？』

『相変わらずだよ！』

『…そっか』

『またどこかで会えるといいなっ』

『そうだね！』

雅史君と別れ際、私は雅史君と目を反らしながら、遠くの慎悟を見た。

一瞬慎悟と目が合った気がした。

…私は慎悟を見つめる事はしなかった。

そのまま後ろを向き歩き出した。

雅史君は私が一瞬慎悟を見た事を見逃さなかった。

『梓ちゃん！』

『何？』

軽く振り返った。

『まだ戻るんじゃないの？』

『どこに？』

雅史君が真剣な顔をして近付いて来た。

『慎悟と…まだやり直せるんじゃないの？』

『何言ってるのぉ？』

『今でも慎悟の事好きなんだろ？』

『慎悟の事は良い思い出だよ』

雅史君とは逆に落ち着いた口調で言った。

『なんでだよ。なんでお前らそうなんだよ!』

『私はもう変わっちゃったの．．．慎悟といた時の私とは違うの』

私は笑顔を作れなくなりそうで、後ろを向きまた歩き出した。

『梓ちゃん、変わったりしてねえよ!今でも慎悟の事見てるじゃん!．．．好き合ってるのになんでだよ．．．』

私は泣いてた。

後ろから雅史君にバレないように泣いた。

雅史君、私、本当はまだ今でも慎悟の事好きだよ!思い出になんかなくてない。

でもね．．．どうしても、あの時．．．慎悟が部屋を飛び出して行ったときの事が忘れられないの。

私．．．寂しかったんだよ。

慎悟に置いてかれて一人で寂しかったんだ。

悲しくて．．．淋しくて．．．心細くて．．．

私の中空っぽになっちゃったんだよ。

雅史君が言うように、慎悟の所に帰ることも出来るのかもしれない．．．でも、これも私の意地なんだ。

何の意地かは分からない．．．

でも慎悟がいなくなってから、私はこの意地で立っていられるの。。
サヨナラ雅史君。

サヨナラ慎悟

真弓と恵里は部屋には入らず、カウンターの所で待っていてくれた。

『ごめん。遅くなって』

『いいって!行こ!』

私達はカラオケに来ると、決まったパターンがある。

…暗黙の了解っていうのかな…

恵里が一番に歌う。

恵里が最初に歌う歌は決まっている。

いつも恵里が歌っているのに、今日はその歌が滲みた。

昔の歌、恵里がいつも歌うから覚えた。

恋すると・苦しくて・諦めようとするけれど・ツボミのまま、この思い摘むなんて出来ない・またいつか会いたいね・でも・もう二度と会えないね・サヨウナラ…

…涙が出ちゃう…

その時、真弓が自分のハンドタオルを渡してきた。

『梓・泣いていいよ・私ら側にいるから』

体の力が抜け涙がどつと溢れた。

私は泣いた。泣いて・泣いて・泣きまくった。

真弓も泣いてる…

恵里も泣いてる…

私のために泣いてくれる…

ありがとう。

第20話： 失い。

春

私達は二年生になった。

嬉しいことに、恵里と真弓と同じクラスになった。

毎日楽しかった。

新しい彼氏も出来た。

同じ学校で一つ上の亮^{ひろ}。

出会いは簡単。

学校で声をかけられて、電話やメールをするようになり、付き合うことになった。

付き合ってから亮とは、大抵一緒にいた。

亮は学校では目立った存在。

私達グループみたいな感じ。

学校では男もグループがある。

男前は自然と集まる。

同級生からは羨ましがられたが、先輩には目を付けられる。

今日も学校帰り亮の家に行った。

真つ暗になった部屋に電気も付けず、テレビの灯りだけ…

二人掛けの低いソファに座りテレビを見てると、亮が私の顔を自分の方に向かせた。

私達は唇を合わせた。

亮の舌が入ってきた：私も舌を絡ませた。

亮の手が私の体を触り始めた。

私達はソファからずり落ちるように、じゅったんの上に寝そべっている。

それでも私達は続けた。

亮は私のお腹に出し、私の隣でぐったりしている。

『梓ちゃん!』

『梓でいいよ!』

『梓、俺の事好き?』

『好きだよ』

亮は満足そうだ。

本当に亮が好きなのかは分からない。

でも、やり終えてこんな事聞かれたら、そう答えるしかない…

亮と付き合って3ヶ月…

季節も変わり制服も夏物に替えた。

この3ヶ月私は亮と付き合いながらも、色々な男と遊んだ。

勿論、亮には内緒…

亮のことは好き。

一緒にいるにつれ、徐々に好きになっていった。

…でも亮だけでは、私は満たされなかった。その隙間を埋めるように、男友達と遊んだ。

あと数日で夏休みという時、私は体調を崩した。

体がダルい…

胃がムカムカする…

食事もう通らない…

風邪引いたかな…?

それでも遊びに行ってた。

少し辛いくらいで寝込むなんてもつたいない!

私は毎日胃のムカつきを感じながらも、亮と会い…体を重ねたり、

恵里や真弓とはしゃいだり、

男友達と遊んだり…体を重ねたり、

繰り返してた。

…でも今日は本当にえらい・・・。

ベッドから起き上がれない…

どうしちゃったんだろ？ …私。

今日の予定はすべて断り一日中寝てた。

『梓！ご飯は？』

母の声が頭に響く。

『いない！』

精一杯、声を出した。

その日の夜・・・強烈な吐き気に襲われた。

我慢出来ずトイレへ直行した。

…本当、体調不良だ。。。

そんな翌朝

『梓！』

母の大きな声

『何？』

『出かける用意しなさい』

なんなの！？ 私えらいのに…

『どこいくの？』

『病院連れてつてあげるから…支度しなさい』

病院か…こんなに体調悪いし、行つとくか…

母に連れられ病院へ向かった。

えっ！？ なんで！？ 来てびっくり

『なんで産婦人科？』

かったるそくに言った。

『梓、ここ二ヶ月生理きてないでしょ…』

…そういえば、きてない。

私は、生理がきてない事を忘れるほど、遊ぶ事に夢中だった。

私は何がどうなってるのか分からないまま、病院に入った。

名前を呼ばれて、看護師さんに案内され、診察場に入った。

椅子が一台あり、椅子の横にはカーテンが掛けられている。

『下着を脱いで椅子に腰かけてくださいね』

カーテンの向こうから指示された。

言われるまま、下着を脱ぎ、椅子に腰掛けた。

…すると、椅子はカーテンの方に回転した。

椅子は回転するとともに、背もたれが少し倒れ、腰が上がり、足が開きだした。

男の前で私はもう何十回と股を開いている。

男の人の前で股を開く恥ずかしささえ無くした。

なのに、凄く恥ずかしい・・・

器具らしき物が中に入ってきた。凄く違和感を感じる。

男の人が入る感じと全然違う・・・

すると今度はカーテンが開いた。

『これが赤ちゃんね』

先生は、私の斜め前にあるテレビにはを指差しながら、淡々と説明した。

『今ちょうど、12週あたりね』

…赤ちゃん？ 12週？

…どういう事？ 私、分かんないよ…

『では、下着を付けて今度は隣の部屋に来てくれる？』

『はい・・・』

椅子はゆっくり元の位置に戻った。

- 言われるまま隣の部屋に行くと、先生は何か書き物をしていた。看護師に誘導され、丸い椅子に座った。

『今3ヶ月に入ったとこね。最後に来た生理はいつ？』

…いつだったっけ…

『…お腹の子どうするか決めてるの？』

…どうするて…

『…今日お母さん一緒よね？お母さん呼んできて私に確認をとり、看護師に母を呼ぶよう命じた。』

『どうも…』

母は入るなり頭を下げた。

『娘さんは今妊娠しています。どうするかは決めていますか？』

『中絶します』

『そうですか。では時期も時期なんで早めに行った方がいいので、来週辺りでどうでしょう』

『お願いします』

母はまた頭を下げた。

・帰り道母は何も言わなかった…

私も何も言わなかった。

…言えなかった。

・家に帰っても母は何も言わなかった。

…いつもと変わらない母…

私は今の状況を把握出来ず、部屋に閉じこもった。

真弓に電話しよう…

真弓は同じ年だが、お姉さんの存在。

『はい』

明るい真弓の声…

『…真弓…』

『どうしたの！？』

私の声で、いつもと違う事を察したんだろう。

『私…妊娠してた…』

『…えっ！？本当に？』

真弓は信じられない感じた。

そら信じられないよ… 私達まだ16歳だもん…。

『本当だよ… 今日病院行ってきた』

『…亮君との…?』

『…うん』

実際は分らない…

真弓は私が他の男と遊んでたの知らない。

私は、亮の子だと信じたい。

その気持ちは、亮が好きだから…とは違った。

私あんなに遊んでた…色々な人と寝た…。すべてが、どうしてもよかった…。

でも、私はここまできて、誠実さを守りたかった。

…違う…。真弓に少しでも誠実さを見せたかった。

どうでもいいと思ってた…

所詮、男は体を許せば、満足してる。簡単だ…と見下していた。

友達なんか、所詮、仲良いのはその場だけ…と、諦めていた。辛

い時側にいてくれた優しさも忘れて…

なのに、こんなところで真弓に頼ってる。

真弓に側にいて欲しいと思ってる。

友達だと思ってる。

都合がいいと言えばそれまで。

でも、大切だと思った。

真弓が大切だと思った。

今日は終業式

…学校なんて行く気になれない…。

真弓は、そんな私を心配して、終業式の後來てくれた。

『梓、調子どう?』

『…まあまあ』

『梓の親は何て言ってるの?』

『一瞬に病院行ってから話してないよ…こんな私にうんざりしたんじゃない』

『…そうなんだ…亮君には言ったの?』

『言ってる。親がまだ言うなって…お母さんから亮に話すから…』

『…そっか』

そう…お母さんから亮君に話すから…確かにそう言った。

それから一日…また一日と過ぎたが、母は亮に話していなかった。

…やっぱり、あいつ(母)の言うことなんか信じられない!

私は自分の口から亮に話すことに決めた。
面と向かって話す勇氣はなく電話した。

『梓、どうしたあ?』

…馬鹿な奴…呑気な奴…

『亮…私…妊娠してる…』

『梓、その冗談はキツいつてえ…』

『本当だよ…』

『マ…ジ…?』

『…マジ』

『…どうするの?』

それは私が聞きたいよ!

『おろす事にした…』

『そっか!辛いけど、それが一番いいかもな』

…嘘つき…

辛いなんて思っ
てないくせに
本当はホツ
としたんでしょ？ バレバレだよ。
私が今どんな気持ちでいるか分かる？ 分かんないよね…

『そうだね…』

それしか言えない。これ以上亮と話しても無駄だ…
泣けてきた…

悔しくって、悲しくって…

こうなってしまった事、自業自得だって分かる。

でも、こんな男と出会ってしまった事…

こんな情けない男を一瞬でもパパに持ったお腹の子…

悔しい。悔しい。

『でもさ。本当に俺の子？ 梓他でも遊んでたじゃん！ 俺知ってるよ』

私もそれぐらい考えたよ。

確かに他にも遊んでた。…子供が出来たって分かってから色々考えたよ。

今までの事、鮮明に思い浮かんだ。

他の男は必ず避妊してた。

亮は一回も付けなかった。

それなら、亮の子って思った。

『亮の子だよ…』

確信じゃない。

でも、そんな事言えない。 だって言ったら私が不利じゃん。

『梓がそう言うなら信じる…けど、俺って偉いよなあ』

…はあ？

『何が？』

『俺の子って認めた訳じゃん！ 他の男は違うよきつと…』

『……』

馬鹿。馬鹿。

お願いだからこれ以上喋らないで！
嫌になるだけだから…

『あとさぁ．．もう私達別れようね．．．』

これ以上亮と付き合っっていく理由がない。

続けたって、うまくいかないのは目に見えてる。

『そうだな。俺からも．．．』

『何？』

『この事、俺の親には言わないで。』

…最低…

言われなくても、言わないよ。誰だって嫌じゃん！親に知れたら…

普通、暗黙の了解でしょ！？

口に出してしまった亮は男の価値を下げた．．．

それとともに私の亮に対する憎しみが膨れ上がった。

…亮だけずるい

…私は親に知られて、家での居場所をなくした。きっとこれからも…

…亮だけ何もなかったように、のうのうと暮らしていくの？

…亮だけ…亮だけ…

私の中は亮への憎しみと憎悪で埋め尽くした。

次の日真弓はまた来てくれた。

昨日、妊娠してることを亮に伝えた事、亮との会話、全て真弓に話した。

『亮君最低．．．』

『梓このままで悔しくないの？』

『悔しいよ．．悔しいけど、どうする事も出来ない…』

少し考えたすえに真弓は言った

『亮君の親に言ったら?』

『えっ!?!』

『だって悔しいじゃん!…傷ついてるの梓だけじゃん』

『……』

『梓が言えないんだったら、私が言っただけあげる』

真弓は私の携帯を掴んだ。

『私が言っよ』

正直・亮の親に言ってやりたいと思っただ。

でも、一人で立ち向かう事が出来なかった。

今は真弓がいる。真弓も同じ意見でいてくれる。
今なら言える。

私は亮の自宅に電話した。

『はい。』

亮の母が出た。

『もしもし…梓です』

『梓ちゃん?どうしたの家に電話なんて…亮今いないのよ』

『…今日はおばさんに話しがあつて』

『どうしたの?』

優しいおばさんの声…亮の家にいるときは、必ず私の分も夕食を作ってくれた。

優しいおばさん…ごめんね…

『私…妊娠してるの…亮の子…』

『…亮は知ってるの?』

おばさんの声が沈んだ。

『…知ってる』

おばさんのため息が聞こえた

『お腹の子どうするか話したの?』

『…おろすことにした』

『…そう』

え！？ ……それだけ！？ 自分の息子がしたこと分かってるの？
また、ため息が聞こえた

『子供が出来たって事は、そういう行為をしてたって事よね？…お
ばさんの知らないところで。それは、梓ちゃんも同意だったはずよね
？』

『…うん』

おばさんの優しくかった声が、冷たい…。感情が無くなった声にな
った。

『それで、子供が出来るなんて分かってたはず…。亮とあなたが勝
手にした事。亮とあなたが出した答えでしょ？今更おばさんに言わ
れても、何も言えないわ。とりあえず、話は聞いたから。』
電話は切られた。

『おばさん何て言ってた？』

『…困るって…亮と私が決めたことですよって…』

『…最低。子が子なら親も親だね…。』

私は親に言うことで、亮に復讐出来ると思ってた。

・…おばさんは怒り、家の中はめちゃくちゃになり、亮の居場所は
なるなる。

そうなると思ってた。

・…おばさんは分かってくれると思った。同じ女だから…
だから言ってくれると思った。『ごめんね』って…

私の考えは甘かった

復讐にもならなかった。

私を分かってくれるどころか、亮をかばった。

…無駄だったんだ…

手術当日までずっと真弓は一緒にいてくれた。
せつかくの夏休み彼氏といたいはずなのに…

『梓、準備できてる？』

『うん』

私は病院に向かった。今日も真弓は来てくれた。
一緒に付いてきてくれた。

今日は手術。

私の赤ちゃんがいなくなる日。

手術後2時間ほど病院のベッドで休み、家に帰った。

姿も人の形もない命。…でも確かに存在した命が無くなった。
無
くした。

今まで私を勢上がらせていたものが崩れていく。

見栄も…

プライドも…

体を許せば付いてくる…甘いもんだ…と見下していた男。そう
思ってた男に一生の傷を負わされた。

傷付いたのは私だけ…

亮とその家族は、きつと忘れるだろう… 「梓の嘘」

そう片付けるだろう…

私の親は、恥じるだろう…。こんな私を… 出来た子供を…
真弓はいつもそばにいてくれた…でも、真弓は傷ついてはない。

傷つくのは女

その言葉が支えだった。自分が弱者になることで、支えられた。
自業自得

そんな事考えたら私は、生きる意味がなくなっちゃうから・・・

高校二年生の夏休み、一つの命がこの世を絶った。

第21話： 入り口

高校生活二度目の夏休み・・・私は子供を失った…自らが決めた事…

・・・この事を知ってるのは、私と母と亮とその親と真弓だけ…

『梓ちゃん、今日飲み会あるんだけど、来てくれない？』

私は高校生になって、世間が広くなった。

仲が良い友達ではないが、知り合いは沢山出来た。

友達の友達…その友達…

横の繋がりで増えていった。

こんな誘いもしよっちゅうだ。

『いいよ』

家にもマイナス思考になるだけ。

出よう！

私を飲み会に誘ったのは 典美^{のりみ}。

高校は違っけど、ちよくちよくは会ってる。

まあそのほとんどが、飲み会の誘い。

私達は高校生で勿論未成年。

でも、飲み会もするし、煙草でいつも部屋ムンムン。

私もいつからか煙草を吸うようになった。

でも、その場だけ。周りが吸ってたら吸う感じの付き合い程度・・・

飲み会の待ち合わせの場所に向かった。

電車で向かうから、駅まで典美が迎えに来てくれることになってる。

『梓ちゃん！』

典美が原付にまたがりやって来た。
運転してるのは、今日一緒に飲み会をする男の子・・・

『こんばんは』

『こんばんは...』

私と男の子は軽く挨拶を交わし、私も原付にまたがり、三人乗りで、飲み会が行われる家へと向かった。

私が着いたときには、メンバーは揃っていた。
挨拶も早々に交わし

『はい。梓ちゃん』

ビールを手渡された。

『じゃあ、乾杯！』

かけ声と共にみんな一気に飲み出した。

私は戸惑った。

... おろしてまだ一週間... お酒飲んでもいいのかなあ...

ここまできて、そんな事考えてた。

『梓ちゃん飲んでないじゃん！飲もうよ！』

この言葉も、私の状況を知らなければ仕方ない。

・・・飲もう！今更自分を守る理由もない。今を楽しもう。

私は渡されたビールを一気に飲み干した。

亮の事も忘れよう。いつまでも、憎むのは止めよう。憎むほど自分
が惨めだ。

親も… おろしたことも…

何もかも忘れるようにはしゃいだ。

夜中まで騒いで…お酒を飲んで…

無免許で原付に乗ったり…

今ある原付は2台。1台に三人乗っても台数が足りない。

今日は8人いるから、あと1台あれば、みんなで動ける。

『梓ちゃん原付乗れる？』

駅まで典美と一緒に迎えに来てくれた高哉^{たかや}が私に向かって聞いた。

『乗れるよ』

私は数回だけ乗った事があった。…慎悟と付き合ってたときに、教えてもらった。

『じゃあ付いてきて！原付パクリにいこ！俺マジ上手いぜパクる（盗む）の！』

高哉は自慢気に言った。

今ある2台の原付も高哉が盗んできたもの。

「原付なんてその辺にゴロゴロ転がってる（人様の）。買うのなんて馬鹿らしい」

だって…

『いいよ！行こ！』

私と高哉は1台の原付に乗り、探しに行った。

高哉は原付を停めた。

『ここでいいよ！俺ずっと狙ってたのあるんだ。梓ちゃんは先に帰ってて、俺もすぐに行くから』

『分かった！じゃあ後でね』

私は来た道を戻った。

みんなが待つ家に戻った。原付を止めようとしたら、高哉が来た。

『高哉君早いじゃん！』

『だから俺上手いって言ったじゃん！梓ちゃんのも今度持ってきてあげるね』

『本当に？ありがと！』

私達はみんなの所に帰り、パクったばかりの原付を加え夜の闇に溶けて行った。

行く宛なんてない。

夜の街をただ走り…大声を出し騒ぎ…

私達は一睡もすることなくはしゃいだ。

…こんな感じ初めて。

今までに飲み会なんて腐るほどした。

でも、ここまで楽しくはしゃいだのは初めてだった。

今までの飲み会は、すぐに男と女意識し合ってた。

カッコイい男はいないか…

会った瞬間からお互い目当ての相手を見つけ、友達は女同士でいるときには見せたことのない、甘い声を出し、甘い視線を送り、誘いを待つ。

男女大勢ですることが多いので、他の女の子がラブラブ光線を送り出したら、自分の気に入る男がいなかったらといって、帰る事は出来ない…。次第にカップルが出来てしまうから、余り物の相手をしなくてはならない。

目当ての男がいればいいけど、いなければ最悪な飲み会になる。天と地の飲み会だ。

今回は違う。状況が今までと違う。

4人いる男のうち3人は彼女もちで、隠すことなく言ってる。

勿論、今回の飲み会は内緒らしい・・・。

女4人も、私と典美以外の2人は彼氏もち。それもみんな知ってる。

今回はみんな男や女を目当てで集まった訳じゃないんだ。

飲み会が始まりしばらくしてその空気が分かった。

みんな普段の憂さ晴らしをしたいだけ...

家にいれば口うるさい親から

私達は決して優等生ではない。学校に行けば先生にのけ者にされ

彼氏や彼女...友達との悩み...

普段の日常から少しでも逃げたいだけ...忘れたいだけ...

そんな気持ちと同じで集まってるんだ。

私は典美以外会うのは今日が初めて。

でもすぐに打ち解けた。

男女の友達関係なんて成立しないと思ってた。

今日それが覆された日だった。

やっと、私は居場所を見つけた。

仲間を見つけた。

最高の出会いが出来た日だ。

満足感に浸りながら、朝方みんな解散した。

…最高だと思った出会いが、下り坂の入り口とも知らずに…

第22話： 高哉の過去

飲み会以来私達は頻繁に集まるようになった。

といつても、私と典美と高哉の3人・・・

飲み会の8人揃うことはなかった。

飲み会の時にいた私と典美以外の女の子2人は彼氏もち。

高哉以外の男はみんな彼女もち。

普段の日常に戻れば、不満はありながらも、それぞれ元のサヤに戻っていく。

でも、私と典美と高哉は一緒にいた。

それぞれ用事が無いときは、高哉の家に自然といた。

私も、真弓や恵里と遊ぶ意外は高哉の家にいた。

典美がいなくても高哉の家に行くようになった。 典美も大抵高哉

の家にいた。

まるで自分の家に帰るように私達は高哉の家に帰った。

3人でいても気楽だった。

一緒に空間にいるけど、みんなそれぞれの事をしてる。

携帯をいじってたり、テレビを見てたり、雑誌を読んだり・・・

用事が出来れば、それぞれ出かけていなくなる。

それでも、家にいるよりよかった。

家で一人していると寂しさだけが押し寄せる。

誰かのそばにいないと不安で押しつぶされる。

世間から一人取り残されているようで...

一人でいるのが嫌だった。

典美も高哉も一緒なんだろう。

私達は、その寂しさを支えてくれる相手＝彼氏、彼女、だったりする。

友達は、結局は彼氏のところに戻っちゃう。

いくら一緒にいても、最後は彼氏の所に行っちゃう。…その後私は戻る場所がない。

彼氏の所に行く友達を見てると、寂しさが倍増する。

今の私達にはその相手がいない。

似たもの同士支え合っしかなかった。

私と典美が毎日高哉の家に入り浸っていても、高哉の親は何も言わない。

小さな家の庭に無数に放置してある原付を見ても何も言わない。

高哉の家は小さな長屋。 部屋に入るときも窓から。

たまに外で高哉の母と会っても私の方を見ない。

知らん顔。

挨拶もしたことない。

今日は、典美は来ていない。ふと気になって、高哉に聞いてみた。

私達はお互いの悩みを言い合いた事はない。

お互い何らかの事情があるのは分かった。

あえて聞かない。

暗黙の了解だ。

でも、私は聞いた。

『私達いつもいるけど、高哉のお母さん何も言わないの？』

私は家にいる居場所がないから高哉のところにいる。

でも高哉がその事で親に言われて、嫌な思いをしてたら、私達が一緒にいる意味がない。

『ああ。あいつは何も言わないよ』

『そうなんだ』

それ以上は聞いちゃいけないって思った。

高哉がいいならいいや。

そう思った。でも高哉は話しを続けた。

『あいつ本当の親じゃないから…俺のことなんてどうでもいいの』

『…そうなんだ』

これ以上は言えない。

でも高哉は続けた。

『俺が赤ちゃんのとき、親父とお袋が離婚して…お袋が男作って逃げただけだよ。で、俺と姉貴を置いて家を出た訳。…これは、ばあちゃんから聞いたんだけど』

私は軽く頷いた。

『それから…親父はあんま家に帰ってこなくてさっ。まあ毎日飲み歩いてたんじゃねえのかなあ。だからほぼ俺と姉貴はばあちゃんに育てられた感じかな…俺が小学4年の時に、今のあいつと再婚したんだ。話しによると、親父、あいつと結婚するときに、

「子供達は置いてく」

って言ってたみたいだけど、実際捨てられなかったみたい。親父の中にまだ親の心が残ってたみたいで…」

高哉は淡々と話を続けた。

そう見せていただけ…きつと心の中は寂しさを思い出してるはず・

・

『あいつは渋々俺らと暮らすことになって、でもさ！結婚したからって親父が家に落ち着くはずもなく、また帰ってこなくなったんだよ。…それで、あいつの怒りの矛先がまだ小さかった俺らに向けられて…』

そこまできて高哉は話すのを止めた。

『どうしたの？』

『まだ話す？これ以上話すと暗くなるよ？…まっ！もう暗くなってるか』

『高哉君がよかつたら話し続けて』

ただ単に興味があつた。

そんな環境の子が実際にいるなんて…

『今で言う虐待？受けだしたんだ。あいつ気狂ってたから…ばあちゃんも怖くてあいつに何も言えなかったんだ。俺が小4、姉貴が小5だったかな。親父とあいつの喧嘩が絶えなくなつてさ、…最初は言葉で俺と姉貴を罵ったんだ。』

「あんたらのせいよ」

って感じで…それがエスカレートして、ご飯食べさせて貰えなかったり、風呂にも入れなかったり…そう思えば、
「ご飯よ」

って出て来たのが、残飯だったり…普通野菜の捨てる部分が皿に盛られてんの！消費期限が過ぎたのとかさっ！でも、次いつ食べれるか分かんないからさあ…がつついて食べたよ…」

- 言葉が出なかった。胸が締め付けられた。

高哉は顔色一つ変えず話した。それどころか笑ってる。

その笑顔が辛い…

辛かっただろうね。

そんな簡単に片付けられない…

『姉貴が中学入ってもまだ虐待はあつてさ。しかも、学校で姉貴がイジメにあうようになって…風呂も入ってないし、服は毎日一緒に臭いじゃん！それが始まりでさっ！幸い俺はイジメには合わなかったけど…辛かったと思うよ。家でも、学校でも…俺より姉貴の方があいつにひどい目に遭わされて…女同士つてもあったのかなあ…姉貴は学校に行かなくなって…家にも帰ってこなくて』

高哉は一息おいてまた話し始めた。

『こんな環境で育って、真っ直ぐ行くわけないじゃん。姉貴は中学で他校のヤンキーと付き合うようになって…そのままヤンキーまっしぐらって感じ！多分、一人でぶらついてナンパで知り合ったんだと思うけど…勿論イジメもなくなったし』

『高哉君にお姉ちゃんいたの知らなかった…』毎日来てるのに姉の姿は家になかった。

『姉貴は中学もろくに行かないまま、この家出たんだ…その時付き合ってた人が19歳で、一緒に住むって…俺も一緒に誘われたけど

断った。姉貴は俺より辛い目にあつてたから、やつとの幸せ邪魔し
たくなかったし…ばあちゃん置いて行けないじゃん！その頃はもう、
あいつがどうにか出来る姉貴じゃなかったから…俺も反発するよう
になって、あいつの思い通りにはならなくなつたし…逆に今度
は成長してく俺らにビビるようになって、何もしなくなつただけ
ど…」

『どうしたの？』

『あいつの相手が俺と姉貴から…ばあちゃんにいつたんだ…姉貴も
俺も家にほぼ帰ってなくて、気付かなかった…ばあちゃん一人で耐
えてたんだよ…』

『……』

『その事に気付いたときは姉貴は家を出る寸前でさっ！ばあちゃん
は姉貴に謝つたんだよ』

「ごめんね。ごめんね。守つてあげられなくて」

つて…俺らはさあ、ばあちゃん恨んだことなんて一度もなかったん
だよ。逆に感謝してた。ばあちゃんが親みたいだったから。姉貴と
の最後の別れんときに姉貴がばあちゃんの変化に気付いてさ…ばあ
ちゃんの服をそつと捲つたんだ…。ばあちゃん…体がアザだら
けでさ…」

初めて高哉の表情が曇つた…

『俺、姉貴の後ろに立つてたんだけど、何も言わず、あいつが居る
台所に向かつたんだ…あいつがばあちゃんを…つて、その時初めて
きづいたんだ…自分が情けなくてさあ。ばあちゃん辛かっただろう
つて…俺はあいつのところに歩きだしてた。あいつを殺そうつて…そ
したらさ、姉貴が凄いい勢いで後ろから俺を押しつけてたんだ。俺
もその後に続いて台所に入ったら、姉貴は包丁をあいつの喉元に当
てて…』

「てめえ！ばあちゃんに何してたんだよ！」

って、すげえ勢いでさっ、あいつビビって何も言い返せなくて」

高哉はすっかりしたように笑った。

「てめえ今度ばあちゃんに近付いたら殺すぞ！」

って…もうあいつ完全にビビっててさあ、その後姉貴は俺に言ったんだ

「ごめんね。高哉。ばあちゃん守ってあげて…」

って…

姉貴はばあちゃんに何度も何度も泣いて謝ってた。で、姉貴は家を出たんだ。」

「…今お姉ちゃんは？」

「今はその頃の彼氏とは別の男と一緒に住んでる。俺もばあちゃんも姉貴が一人で家を出た事恨んでなんかない…幸せになつてほしいし…。今もたまに顔だすよ！」

「おばあちゃんは？」

おばあちゃんがいた事も知らなかった。

「…ばあちゃんは姉貴が家を出て半年ぐらいして…死んだ。それから、あいつと俺とこの家で二人ってこと！姉貴があいつを怒鳴ってから、あいつは俺やばあちゃんと話さなくなつたんだ。お陰で…短い間だったけど、ばあちゃんと昔に戻つたみたいに過ごせたし！だから俺が何しててもあいつは何も言わないって訳。親父も帰ってこないんだし、あいつ出て行けばいいのに…ずっといんの」

高哉は茶目っ気たっぷりに言った。

「何でおばさんはここにいらっしゃるの…」

「俺が思うに、まだ親父のこと好きなんだと思う。ここにいれば親

父が帰ってくる・・・って思ってるんじゃない？』

…まだ好きだからか…

おばさんも大変だったんだ… でも！おばさんのしてきた事は人として許せない。

『…高哉君は…もういいの？…おばさんの事許してる？』

『ん〜。一言で言えば許せない。でも、何年も親父を待ち続けてる事は凄だと思う。』

『それって、許してるのとは違うの？』

『違う！俺が受けてきた仕打ちは今は何も思わない…けど、ばあちゃんを思い出すと、今でも、あいつを殺したいって思う…あいつを家族とは昔も今も認めてない…他人と暮らしてる感じがな』

高哉は幼い頃から凄く重いものを背負ってるんだ…
今笑って話してるのも、高哉の意地だと思った。

『梓ちゃんは？』

『ん？』

『俺ばつか話したじゃん！梓ちゃんも自分の事話してよ』

『…私かあ』

『そうそう！二人で暴露大会！』

高哉は明るく言った。

『私は何もないよ…強いて言うならただ親がウザいだけ』

…ごめん高哉。私まだ言えない。

…一番愛した慎悟の事

…子供の事

まだ言えない。

忘れたつもりでいたのに…

本当は、私は何も忘れてない。

無理やり胸の中の箱に仕舞い込んでるだけ…

出てこないように、無理やり蓋をしてる。

私の中の箱はもう一杯になって、少しの揺れでこぼれ出しそうになってる。

今、高哉に話したら…全てがめちゃくちゃにこぼれちゃう…

高哉は辛い過去を話してくれたのに…でも、もう少し待って…もう少し片付けたい。私の箱の中が全て過去になり、順番に出てくるまで…

第23話： 同士

『最近、典美こないねえ』

『そついやそつだなあ…』

あれほど毎日高哉の家にいたのに、最近・典美の姿がない。

『ちよつと電話してみるわ』

『おう』

高哉は寝転がって漫画を読みながら返事をした。

・・・

『は〜い』

『典美？最近何してるの？』

『実は…彼氏できたの！』

そついうことが…

理由が分かった私は、さっさと電話を切った。

『典美何て？』

『彼氏出来たんだって』

『…そつか。良かったじゃん』

高哉は漫画から目を反らすことなく答えた。

…私は寂しい。

彼氏が出来た事は良かったと思う。

でも、寂しいよ。

私…また取り残されてる…

『…梓ちゃんも早く彼氏見つけてさ。いつまでもこんなとこに居な

いで。』

…高哉も私が邪魔になったの…？

『私…こない方がいいの？』

『そういう意味じゃなくて！…ただ単に梓ちゃんにも彼氏できたらなあ…って…ごめん…』

思わぬ返答に高哉は汗って言い訳した。

高哉の慰めも耳に入らない…

…私、寂しいよ…

いつも、典美と高哉と三人でいた。

私は孤独だった。

典美も高哉も私と同じ気持ちなんだと思ってた。そこに私は居場所を見つけたと思っていた。

でも本当は違ったの？

…私は、誰かに必要とされたい

そう思っていたのは私だけ…？

典美は彼氏が出来て新しい居場所を見つけた。

高哉も、彼女が出来たら、違う居場所を見つけ、私はここには居れない…

そう思った私は平常心を失いかけていた。

『私…どこにいけばいいの？ ほかに行くところなんてないよ！』

『急にどうした？』

高哉は訳が分からなといった感じた。

『私にはここしか居場所がないの…ずっと孤独なんだよ…』

『なんでそんな事言うんだよ！梓ちゃん友達いるじゃん！』

『友達はさあ。結局最後は男とこいくの!』
『だったら梓ちゃんも彼氏作ったらいいじゃん!すぐ出来るでしょ!?!』

私の気持ちを分かってくれない高哉にムキになった。

高哉は私がムキなる理由が分からないから、高哉の声も荒だっていた。

『男はさあ!.....』

その先を言うのを止めた。

確かに高哉の言う通り、彼氏を作ろうと思えば作れる。

でもね、私を

「好き」

だと言ってくれる男...

体だけでも私を必要としてくれる男...

どんな男と付き合っても...

どんな男と寝ても...

相手を好きじゃないと私の寂しさは埋まらなかった。

私の居場所じゃなかったんだよ...

現に寂しさを紛らわすのに男に走った私は...

子供を失った。

私の身勝手な行動が生んでしまった命...

私の身勝手で命を失った子...

『男は何だよ!?!』

『...男は裏切るんだよ!』

こうとしか言えない。

この言葉を高哉なりに考えたのか、高哉は黙りこんだ

『…ごめん。俺だって孤独だよ…。でも、言葉に出すとさあ…余計辛いから…強がってんだよ』

落ち着いた声で高哉はいった。

私の頬に涙が伝った。

その涙は寂しいから…辛いから…って出た涙じゃなかった。高哉も同じなんだっていう安堵感から出た涙だった。

高哉は座っている私に近付き、私を抱き締めた。

私も高哉を抱き締めた。

今まで男と抱き合った感じとは違う。

とても力強く、私を抱こうとする感じではない。でも、凄く落ち着く感じ。

『梓ちゃんの居場所はこちら…』

高哉は小さい声で力強く言った。

『いいの？』

『いいよ！梓が来たい時に来たらいい…梓がいるここが俺の居場所…』

『あつ今、梓って言った』

『…うん。俺の事も高哉って呼んでよ！』

『分かった高哉』

お互い寂しさを分かち合うように抱き合った。

『でも高哉に彼女が出来たら、来れないよね？』

高哉の体を離し、冗談ばく聞いた。
でも内心は本気の問いだ。

『ん〜。その時はどうするかなあ。また別の場所に俺と梓の居場所
作るか？』

『だね！』

それで私は満足。
高哉とはずっと一緒にいれるんだ。

第24話： 誓い

高校二度目の夏休みも半分を過ぎた。

この夏休み私は一生忘れる事のない思いをした。

中絶

その事で分かった男の本音

家で無くなった居場所

一人になると思いだす。

中絶するときの麻酔の感じや、あれほど私を

「好き」

だと言った亮の軽はずみな言葉。

だから一人でいたくない。辛くなるから・・・

今日も高哉の家に向かった。

寂しさを分かち会う事で居場所を感じるから...

・・・ガラガラ・・・

いつも通り窓から部屋に入った。

一瞬でいつもと違う事を察した。

臭っ

この鼻を突く臭い何？

でもどこかで掻いた臭い・・・？

！油性マジックの臭いだ！

高哉はベッドに座り、ビニール袋を口にあてている...

？

『高哉？何してんの？』

私の問いに答えない。

私は高哉のそばに寄り顔を覗き込んだ。

『高哉？』

高哉は私の顔をジッと見つめた。

・ ・ ・ いつもの高哉と違う・ ・ ・

私は分かった。今高哉が何をしているのか・ ・ ・

高哉はシンナーを吸ってる・ ・ ・

『あるさかつ・ ・ ・』

舌が回っていない。

・ ・ ・ 私どうしたらいいの？

いつもと違う高哉。

高哉を初めて怖いと思った。

『あるさも吸う・ ・ ・？』

ビニール袋を私に差し出した・ ・ ・

『・ ・ ・ うん』

断ったら高哉を裏切る事になると思った。

高哉は私の寂しさを分かってくれた。今高哉がこうしてるのも何か訳があるはず・ ・ ・

高哉は私を居場所だと言ってくれた。

断れば高哉を一人にさせちゃう。

私は高哉が差し出したビニール袋を受け取った。

高哉は笑った。

とても嬉しそうに・ ・ ・

とても無邪気な笑顔で・ ・ ・

高哉はまた違うビニール袋に透明の液体を入れ、口に当てた。
私は見よう見まねで、高哉から受け取ったビニール袋を口に当てた。

・・なんだろうこの感じ・・

気持ちいい・・

今まで考えていた事が分からなくなる・・

目の前に見える物がどうでもよくなる・・

今自分がしている事がどういう事なのか考えられない・・

私の頭は止まった。

きっと考える事を止めてしまったんだ。

なんて楽なんだろう。

時が止まったように私達は吸い続けた。

私は知らない間に寝ていた。

横を見ると高哉も寝てる。

時間はA M 1：00

こんな時間か・・

起こすのは止めよう。

私は暗がりの中、テレビを付けた。

高哉を起こさないよう・・小さな音で。

・・とうとう私やつちやつたなあ・・

煙草だつて吸うし、お酒だつて飲んでる。

でも、私はまだ16歳。煙草もお酒も本当は駄目。20歳になつてからって分かつてる。

でも世間ではそれを許されてる部分もあるんだよね・・・

明らかに未成年なのに、外で煙草を吸ってても大人達は何も言わない。

夜コンビニでお酒を買うことも出来る。未成年は駄目って張り紙してあるけど、実際ちゃんと売ってくれてるし…

警察を呼んだりもしない。

そんな私達を大人は見ても見ぬ振りなんだよね。

でも、今さっきした事は違う。

外でしてたら、きっと見て見ぬ振りはしないだろう。

警察のお世話になるんだ…

テレビは付けたけど見てなかった。今自分がした事を考えていた。駄目な事をしたのは分かってる。

でも、罪悪感はない。

そんな事より、高哉を一人にさせなかった事や、あの一時嫌な事を忘れられた事の方が強かった。

そんな事を考えていたら高哉が起きた

『梓…』

『起きたの？』

『うん。…ごめんな』

『何が？』

高哉の

「ごめんな」

の意味は分かった。

私を巻き込んだことへの謝罪だって…

でも、私は知らない振りをした。

それが高哉への優しさだと思ったから…

『今日…お袋が来たんだ…』

『高哉が小さい時に家出た？』

『…そう。俺一瞬誰だかわかんなくてさあ。大分老けてたけど写真で見たお袋だつて分かった…』

『何しにきたの?』

『入るなり家人中あさりだしてさっ…ありえねえよなっ! 16年振りに息子に会ったつうのに挨拶もなしでさ』

高哉は私の問いに答えることなく話出した。

私は高哉のいるベッドを背もたれにし、テレビの方を向いたまま聞いた。

『お母さん…何しにきたの?』

『金だよ…。さすがに引くわあ。初めて見たお袋が、金金言って走り回ってる姿は…』

開き直ったように明るく言ってるけど、悲しさを隠しきれていない。

『…うん』

後向けない…

高哉の顔見れない…

きつと今、高哉の顔は言葉ほど明るくないから…

そんな顔、私に見られたくないだろうから…

心は泣いてる…

だから今日こんなことしてたんだ。

私は今日高哉が悲しい時に…

高哉と共にシンナーに手を出した事に…

高哉の寂しさを分かってあげられた気がして満足だった。後悔はない。

『俺らを捨てたお袋なのに…俺ん中で母親はこうっていうイメージ

があつたのかなあ… そんなお袋見たくなくて、バイトして貯めてた金渡したんだ。そしたら素直に帰って行くんだよ！薄情だよな…」
『…うん』

『家出てくとき言つたんだ…俺に背むけてさ！』

「ごめんね高哉」

つて…。お袋に掛けてもらつた最初で最後の言葉…』

高哉が泣いてるのが分かった。

私は高哉の方を振り返り、そつと高哉を抱き締めた。高哉の寂しさを少しでも吸い取ってあげるように…
そつと抱き締めた

悲しかったね

寂しかったね

辛かったね

そんな言葉は言わない。

言葉にしちゃうとその気持ちが増えるから…

『ごめんなあ。梓…』

私の胸に顔を埋め、高哉はまた謝つた…

『うん。気にしないで…』

『もう、こんな事しないから…』

『うん』

そうだよ。一度の過ちなら誰でもある。

二度としなきゃいいんだから…

高哉は寂しさを一人で抱えきれず、薬物に手を出した。

私は高哉の寂しさを少しでも分かっただけで、薬物に手を出した。

私達は他に手段を知らなかった。

私達はいけない事をした…と分かっている。

だから、同じ事を繰り返さなければいいんだ。
としない事を違った。

…と思い。二度

第25話： 困惑

高哉と共にシンナーを吸った日から私達は分かち合えたかのように今まで話さなかった事も語るようになった。
私達…というより高哉が…だ。

いつもと同じように今日も高哉の部屋でお互い好きな事をしていた。

『梓さあ。シンナー吸ったのあの時が初めて？』

『そうだよ。高哉は？』

『俺は違う…。初めてしたときは中3だった』

…初めてじゃなかったんだ…

確かにそうだよね…

気が滅入って〃シンナー

だなんて一回も経験ないのに、しないよね。

『梓には本当のこと伝えようと思って…』

真剣な高哉…

『きっかけはなんだったの？』

『前に言っただと思うけど、その頃俺あんま家に帰ってなくてさ』

『お婆さんの事があったときだよ？』

高哉は義母に小さい時に虐待を受けて中学になりその反動で家に帰らなくなった。

『そう。その時連んでたのが中学ん時の先輩でさあ。その人が、もう中毒になるほどシンナー吸ってたんだ…。最初はヤバイ！って思っただけ…。その頃、家の事とかで逃げ道ほしくて…。一緒に

「やっちゃったんだ」

「そうなんだ…。」

昔の高哉の状況だったら逃げなくなる気持ちもわかる。

「…一回で止めようと思った…でも辛くなるとまた手出してた…」

「そのうち止めらんなくなってる…」

「それからずっとしてたの？」

「…うん」

「私と会ってからもしてた時あったの!？」

私は少し声を荒立てた。

そんな私に、高哉は焦り気味に言った。

「違うよ! 梓と会ってからのはしてない」

ホツとした…

私と出会ってからもしていたなら、私はきっと怒っていた。

その怒りは、高哉がシンナーに手を出し、悪いことをしていたからじゃない。

私の知らない高哉がいるのが嫌だった。

私は高哉の全てを知っていたい。

高哉の好きなものや嫌いなもの…

良い高哉も悪い高哉も…

全て受け入れたい。

高哉という人間を把握しておきたいって思う。

でも、この気持ちは愛情じゃない。

友情

私は高哉に友情を感じている。だからこそ、全てを私に見せてほしい。汚い事も隠さないでほしい。

愛情なら許せる嘘も友情なら許せない。

『本当に?』

高哉の言葉を信じてるけど、確認した。

『本当だよ。でも梓と出会う前まではしてた…』私が次の言葉を言う前に高哉は話しを続けた。

『梓と会ってから、俺…梓に支えられてた。いつも一緒にいてくれて、俺…寂しさなんて忘れてた。だからシンナーなんかに出さなくなったのかも…』

高哉がそう思っていてくれた事が嬉しかった。でも納得できない。…じゃあ何故あのとき…

『ありがと。でも本当の支えにはなってなかったんだよね?』

遠回しに聞いてみた。

本当の支えになってなかったから、あの時高哉は、またシンナーに手を出したんだよね? …って。

『それは違う。俺の気持ちが弱すぎたんだ…。梓はマジで俺の支えになってくれてる』

『…私も高哉が支え』

私は高哉の支えでありたい。ずっと…。

高哉を支えるために強くなりたい。

そして私は高哉に支えてもらいたい。ずっと…。

言葉には出さなかったが、私達は誓い合った。。。

梓 16歳

高哉 16歳

私達は若かった。

分からなかった。

自分の事を支えられないのに、他人を支える事なんてできるはずがない……。

私達は弱かった。

真剣に誓ったはずのものが簡単に壊れるなんて……。

でも、間違いなくその一時……一瞬。私達の気持ちは真剣だった。

夏休みも後半に差し掛かった

今日は珍しく1日家にいた。時間は18時になり、少し日も落ちてきた。

たまには家でのもんびりするのも悪くない。……その時……携帯が鳴った。

着信?……誰だろう?

私の携帯はあまり着信がない。

高哉も真弓も恵里も……みんなほぼメールだから。

この夏休み私はほとんど高哉という。真弓も恵里はほぼ彼氏というらしい……

せっかくの夏休みだからしょうがない……

でも二人とはメールは毎日ってぐらいしてる。

だから……急なような限り電話が鳴ることはまずない。

携帯を開けた。

知らない番号・・・

いつもは、知らない番号からの着信は出ないようにしてる。

勝手に私の番号を他人に教える奴がいるからだ。

同じ年頃の男は女に敏感らしく、少しでも可愛いつて噂を聞けば、その女の子会ってみたいらしく…。正確にはやりたい。んだけど…。そういうので、ちょっとした知り合い程度の子は私に許可なく勝手に番号を教えてるみたい。

だから、知らない男から携帯にかかってくることがあるから、知らない番号は出ない。

けど、この電話はしつこい程鳴ってる。
恐る恐る出た。

『もしもし…』

『もしもし！梓ちゃん？』

『そうだけど…』

やっぱり…。また男か…。

『雅史だけど、覚えてる？』

…ん？雅史？ってあの？ 慎悟の友達の雅史君？

『…雅史君？…どうして…？』

私はこの状況を理解出来ていない。

何故雅史君が電話してきたのか…

何故今頃になって…

そんな私の思いを余所に雅史君は話し出した。

『久しぶりだね。梓ちゃん元気してた？』

相変わらず優しい声… 懐かしい。

『元気してたよ。雅史君は元気？』

なんだかあの時に戻ったみたい…。

『梓ちゃんもう高校二年だね？学校楽しい？』

『うん。楽しいよ』

何故、電話してきたのか。

私は聞きたい事も忘れて、私はあの時に戻ったように…そして、懐かしく雅史君との話は盛り上がった。

楽しかったあの時…

何もかも初めてで新鮮だったあの時…

タイムスリップしたように鮮明に蘇った。

『雅史君は今何してるの？働いてるの？それとも進学？』

『俺が進学出来るわけないっしょ！働いてるよ！汗水流してね』

『そうなんだあ。頑張ってるんだね』

雅史君は直ぐに言葉を出さなかった。

一瞬、本当に一瞬の沈黙があり、何故かその一瞬の沈黙がぎこちない感じがした。

そして、私を現代に戻した。

『… 慎悟も一緒だよ… 慎悟も一緒に働いてる』

雅史君の声が変わった…。

『… そうなんだ。 慎悟も頑張ってるんだね！』

慎悟はもう過去。

そう言わんばかりに明るく言った。

本当は、一瞬詰まりそうな声を押し出した。

… 慎悟…

言いたくても言えなかった名前…

雅史君の口からやっと出た名前。待ってた。

あの時から私は一時も慎悟を忘れた事はない。

でも辛いから…。

慎悟の事を過去にしよう…って私の中の箱に無理やり詰め込んである。

蓋を開けると二度と箱に納められない気がして、怖いから。

本当は過去になんかなってない。

慎悟といた時をいつも近くに感じてた。

『あれから一年ぐらい経つよなあ…』

『そうだね！』

…そう。 慎悟と出会ったのは、ちょうど一年前の夏休み。

『俺が電話したのびつくりしたでしょ！？』

『びつくりしたよう。なんで分かったの？番号』

雅史君は一息吐いて本題に入った。

『 慎悟の部屋で見つけたんだ』

『何を？』

雅史君が何を言いたいのか分からない。

『 梓ちゃんの電話番号』

『 どういうこと？』

『俺さあ。ずっと誤解解きたくって。 梓ちゃんに電話したかったけど、番号わかんなくてさ。でも、最近慎悟の部屋で見つけたんだ。』

梓ちゃんの番号が書いてある紙を…」

「紙？」

「多分、あいつが梓ちゃんの電話番号を初めて聞いたときに、メモった物だと思うよ。あいつまだ捨てらんなくて持ってたんの！」

「そうなんだ…。」

正直嬉しい。

でも、もう止めて！

私の中の箱が苦しがつてる…。

「慎悟は今日俺が梓ちゃんに電話した事は知らない。でも、どうしても梓ちゃんに知っててほしくて、電話したんだ…」

「……」

聞くのが怖い。

「あの時さあ…。梓ちゃんを部屋に残して、慎悟が部屋を出たとき… 慎悟電話してたでしょ？」

「…うん」

「あれ… 慎悟の元カノの瑠美からだったんだよ…」

「…知ってるよ」

「やっぱり…。知ってたんだ」

「その人電話の向こうで泣いてた…」

あの時の記憶は今でも鮮明に覚えてる。

思い出せば出す程あの時の虚しさも蘇る。今でも虚しさを感じる。

「…うん。瑠美はどうしても慎悟と寄りを戻したかったみたいなんだ…。都合いいやつ。慎悟と付き合ってたときは、他に男作って別れたのに…。その男が駄目だったらまた慎悟… って」

「でも、慎悟もまだ好きだったんでしょ？」

私はあえて慎悟を自分から遠ざけた。

『確かに慎悟はずっと瑠美を引きずってた…梓ちゃんと会うまではね！梓ちゃんと付き合ってから、慎悟は梓ちゃんだけだったよ』

私の中の箱が疼き出した。

ずっと閉じ込めてた慎悟を好きという気持ちが、出てきちゃうよ。

『なら…ならどうして、あの時慎悟は行っちゃったの？』

もう平常心を保てなくなった。

本当は慎悟に問い詰めたかった事…。

『あの時、電話で瑠美が言っただって。

「助けて」

って。泣いてて訳も言わなくて…。ただ事じゃないと思って瑠美の元に向かったんだ…。けど本当は何もなかった…。…慎悟が瑠美を引きずってた事、瑠美も知ってたんだ。だから慎悟と寄りを戻す事は簡単って思ってたみたいけど…。…慎悟が梓ちゃんと付き合った事を知った瑠美が、慎悟を取り戻そうとついた嘘だったんだ。あの時あいつはマジで梓ちゃんだけだったから…』

私は雅史君の言葉を遮った。

『でも！まだその人を思う気持ちがあったから、慎悟は出て行っただけでしょ！』

『違うよ！それは違う！あの時間違いなく慎悟は梓ちゃんだけを考えてた！……慎悟を庇う訳じゃないけど…。人ってさあ。どんな別れ方をしても真剣に好きになった奴を嫌いにはなれないし、困ってたら助けたいって思うんだよ。特に慎悟はさ…。でもそれはまだ好きだからとか愛してるからとは違うんだよ。……慎悟が愛してたのは梓ちゃんだけだったよ』

『そんなの分かんないよ！どんな理由があれ、私は慎悟にいてほしかった！何より私を選んで欲しかった』

私の箱から押し込めてた気持ちも暴れだした。

慎悟を過去に出来ていたら、雅史君の言葉を素直に聞けたのかもしれない。

でも、まだ慎悟を過去に出来ていない。

慎悟と一緒に過ごした時が今でも最近の事のように思うんだよ。

…まだ慎悟を愛してる。

『ごめん。俺梓ちゃんの気持ちも考えないで…。でも最後に言わせて。あの時、瑠美の嘘が分かって慎悟は直ぐに戻ったんだよ。でも梓ちゃんはいなかった。慎悟後悔してた。…今でも後悔してる。今でも…』

雅史君はその先を言うのを止めた。

私が泣いているのが分かったんだろう。

これ以上、私の心を乱すのは止めようと…。

…ごめん…雅史君はそう言い残し電話を切った。

あの時、部屋で慎悟の帰りを待てていれば…

あの時、意地でも慎悟にすがりついていれば…

今は違ったの？

慎悟と一緒にいれたの？

…もう遅いよ。

もう遅い。後には戻れないんだから。

なのに、会いたいよ。

慎悟に会いたいよ。

私の中の箱が蓋をあけてしまった。

今直ぐにでも慎悟のもとに飛んで行きたい。

その気持ちを抑えられたのは、慎悟を愛してるから・・・

慎悟に愛してもらいたいから・・・

慎悟が愛したのは一年前の梓。今の梓は違うから・・・。

今の私をきつと愛してはくれない・・・。

慎悟にはあの時の梓でいたいから・・・。

だから会えない。

私は高哉に会いに行つた。

今の自分をコントロール出来ないから・・・。

第26話： 誓いが崩れた日

高哉といれば今の気持ちも落ち着くだろう・・・
その一心で高哉の元に向かった。

高哉の部屋に着いた。

こんな日に限って高哉はいない。
電話した。…でない。

高哉。早く帰ってきて。

私は一人高哉の帰りを待った。

まだ部屋は微かにシンナーの匂いがする。
そう簡単に消える匂いではない。

私の中であのシンナーを吸ったときの感覚が蘇る。

楽になりたい。

忘れない。

私は夢中で部屋中を漁っていた。

…もう一度…もう一度…と。

押し入れを探ると一番奥にあった。

その物を取り出すと、私は躊躇することなく、
快樂の世界に飛び込んでいった。

どれぐらい経った頃だろう・・・高哉が帰ってきた。

高哉が帰ってきて嬉しくて高哉に飛びついた。

でも高哉は私がシンナーをしているのが分かり、
私からシンナーを取り上げようとした。

私から快樂を取り上げる高哉を許せなくなり、さっきまでの喜びを忘れ、高哉から離れた。

私は思い悩んでいた事も忘れ、その一瞬、一瞬の感情のみだけだった。

『たかやも一緒にしょ?』

私が初めて手を出したあの時の高哉のように、私は高哉に勧めた。

高哉はあの時の私のように受け取った。

私達はハイになった気分を家の中だけに止めておけず、外に飛び出した。

・・初めて高哉と会ったあの日のように、盗んできた原付に二人乗りして……。

怖さなんて感じなかった。

怖さなんて知らなかった。

警察に捕まったら……。など微塵も感じなかった。

どれぐらい走っただろう……。

陽も明け始め、私達の快樂も冷めだした。

快樂が冷めるとともに、私には罪惡感が押し寄せた。

…高哉を誘っちゃった。

…もうしないって決めたのに…。

高哉の顔を見れないでいた。

高哉に謝りたい。

「ごめんね」

その一言が素直に言えない。

何でもないときなら言える言葉なのに、本当に言わなきゃいけないときほど言えない。

『梓、楽しかったなあ』

高哉は明るく言った。

『うん』

私は高哉の言葉に逃げた。

「ごめんね」

を言わないまま、その場の雰囲気を高哉に任せた。

何故、私がシンナーに手を出したのか、高哉は聞かなかった。

私も言わなかった。

高哉と私は他愛もない話しをして、高哉の家に帰った。

私が初めてシンナーをした日とは気持ちが違っていた。

高哉に対し、罪悪感があったものの…、シンナーを吸っていた時の楽しさ…、快樂の方が勝っていた。

…それは、高哉も同じだったのかもしれない。

この時から私と高哉の関係は崩れたのかもしれない

今日も高哉の家に向かった。

やっぱり部屋はまだシンナーの匂いがする。

『俺、煙草買ってくるわ』

そう言い高哉が部屋を出た瞬間、私はシンナーに手を出した。

今高哉がいないからって、帰ってきたらバレちゃう。

でも一緒にいるときに、手を出せない。

やつちゃったら、もうこっちのもの！

…そんな感覚だ。

別に今日辛い事があった訳じゃない。

今寂しい訳じゃない。

…ただ私の体が欲しがってる。

部屋に残る残臭が私を誘うのだ。

高哉が帰ってきた。

高哉は私に一瞬目を向けたが、何もないように普通だった。

私はシンナーの入ったビニールを口にあて、明らかにシンナーを吸っている私。

高哉は普通だった。

いつもと変わらない高哉。

高哉は煙草の入った袋を置き、テレビを見たり、漫画を見たり…。しばらくすると、シンナーの入ったペットボトルを手に取り、ビニール袋に注ぎ、吸い出した。

…一度は止めようとしてくれた高哉。

今はもう私を止めようとはしてくれない。

それどころか、一度は止めようとしたシンナーにまたハマってしまった。

私達は変わってしまった。

私達はお互いを止めようとはしない。

もうしない

あれほど真剣に誓い合ったのに…。

こんなにも簡単に崩れてしまうなんて・・・。

ただ…。ただ高哉を一人にさせたくない。

最初はその思いだけだった・・・。

お互いを支え合いたかった・・・。

今はそんな思いを遠い遠い昔の事のように忘れてる。 私達は抜

け出せなくなった。 暗い闇から

毎日、毎日シンナーを吸うようになった。

いつからか、高哉に会いに…。ではなく、シンナーを吸いに高哉のもとへ…。

に変わっていった。

…今は、ただそれだけの付き合い…

第27話： 汚染

高哉と私は支え合うといった関係ではなくなった。

今ではそんな事、ただの奇麗事だったかのようにも思う。

・チャラチャラ
携帯が鳴った。

『はい』

『梓！いい物手に入ったから、今からおいでよ』

『ちようど今から行こうとしてたところ』

『じゃあ待つてるからなっ！早く来いよ！』

…何だろ？

高哉が来いだなんて催促の電話初めて。

いい物って言ってたし…？

まっ！行けば分かるかっ！

『梓！やっと来たか！待ちくたびれたよ！』

『いつたいどうしたの？』

『これだよ！これ！』

高哉が手を差し伸べて持っているものを私に見せた。

高哉が持っていたものは、

「パイプ」
だった。

テレビの中で昔の人が煙草を吸うときのパイプみたい。

『これ何？』

『これで吸うんだよ』

『何を？』

『葉っぱだよ！』

『葉っぱ？』

『マリファナ！』

『えっ！？』

マリファナ…

名前は聞いた事ある。

吸っちゃいけない事も知ってる。

『さつき先輩が持ってきてくれたんだ！やろうぜ！』

『うん！』

私には断る理由がなかった。

それに私には、好奇心があったから…。

『これ…どうやってするの？』

『確か…こうして…こうやって…』

一人ぶつぶつ言いながら、高哉は準備を始めた。

ジッパー付きの小さいビニール袋を取り出した。

中にはお茶の葉を細かくしたような物が入っていて、高哉はその葉をパイプに詰めた。

パイプの先に口を付け、葉の入ったところにライターで火を付け、一気に吸い込んだ。

『どんな感じなの？』

『……』

高哉は何も言わず、持っていたパイプを私に差し出した。

『煙草吸う感じと一緒にいいの?』

高哉は何も言わず、頷いた。

私はパイプに口を付けた。

『吸い込んだら少し肺で止めて』

私は頷いた。

…熱い!

吸った瞬間の感想。

…ん?

私には葉っぱの良さが分からなかった。

この時の“良さ”とは、気分の高まっていく良さの事だ。

…私はシンナーの方が好きだなあ…

それ以来、私が葉っぱに手を出すことはなかった。

一方で高哉は、葉っぱを気に入ったらしく、シンナーを吸ったり、葉っぱを吸ったり…色々だった。

高哉曰く、その時の気分なんだって…。

私達は毎日…毎日シンナーを吸った。

家には一樣毎日帰っているけど、親と顔を合わせない時間帯。親が寝た時間に。そして、まだ寝てる時間に家をでる。

でもちゃんと家に帰った証拠は残しておく。

…片付けられた台所のテーブルに飲みかけのコップを置いておいたり…。

親には会いたくない。

顔を見れば何かと文句を言う。

無視すればいいのだけれど、耳障りだ。

でも…やはり、シンナーの臭いをさせて親には会えないから…。

今の私の体は常にシンナーを欲しがっている。

私の脳は何よりもシンナーを優先している。

そんな私が唯一まともな考えが出来るのがここだ。

そう思っている、シンナーを止めれない。止めようとも思わない。

シンナー…。私達は一日と空けることはなかった。

高哉と語り合う事も今はない…。

きつとお互いを思いやる気持ちもなくなってしまったんだ…。

今は何よりも…誰よりも…シンナーに夢中だ。

第28話： 恐怖

夏休みも後わずか。。。。

毎年この時期行われる地域全体の祭りがある。この地域一番の祭り。おじいちゃんおばあちゃんから、子供まで集まる。

夜になれば、ここぞとばかりに暴走族が集まる。

この祭りが始まると夏休みもあと少しとを感じる。

今日がその祭りの日

私も毎年行っていたが、今年は行かない。

真弓も恵里も彼氏と行くって言ってたし…。

何より今の私には祭りよりも大事なものがあるから。

高哉の家に向かう途中、昼間頃から浴衣姿の人が溢れていた。
…今から祭りに行くんだろうなあ…。

ガラガラ

あれ？高哉は？

部屋に入った瞬間、高哉の姿を探した。

部屋を見渡すと高哉は部屋の隅に膝を丸め座っていた。

高哉が今正常でないのはすぐ分かった。

部屋は臭くないから、葉っぱでもしてるんだろう…。

私は高哉に構うことなく、テレビを付けしばらく何もせず見ていた。

『梓…。これ…マジヤバいわ…』

やっと高哉が喋った。

『何が？』

高哉はテレビを見る私の前に座った。

高哉が手に持っている物に目が釘付けになった。

注射器だった

聞かずとも分かった。

今高哉がしてるのは、葉っぱではない…。シンナーとも違う。
シャブだ

『梓もする？』

高哉は笑っている。けど、目が笑ってない…。

『…いい…』

初めて高哉の誘いを断った。

怖い…。

シャブが怖いんじゃない。

…高哉が怖い。

『なんで？一緒にしようよ』

『いいよ私は…』

『なんでそんな事言っただよ…。いいじゃんしようよ』

必要以上に私を誘う。

高哉が怖い…

シャブをした高哉が怖い…

高哉をこれほどまでに変えてしまったシャブが怖い…

笑っていても目が笑っていない。

何をしてくすか分からない様な…。

そんな高哉を見たらシャブに手を出す好奇心は私にはない。

『なあ。一緒にしようよお』

まだ言い寄ってくる。

笑いながら言ってるけど、目つきはだんだん鋭くなってく。

これ以上断りきれない…。

これ以上断って高哉を興奮させたら、何をされるか分からない。

…この場から逃げ出したい。

…高哉から逃げたい。

でも怖くて体が動かない。

…諦めるしかないか。

…今更自分を守ったって、仕方がないよね。

私はシャブを打つことを決めた。

私は高哉の誘いに頷いた。

その瞬間、玄関のドアが開く音がした。凄い勢いで誰かがこっちに
向かってくる足音。

『高哉 ！』

その声とともに勢いよく部屋のドアが開いた。
私は部屋に入ってきた人から目が離せない。

深い紫色の特攻服を着たキツ目なとても綺麗な女の人・・・。
……誰なんだろう。

高哉は注射器を持って固まったまま、その人を見ていた。

『遅かったか……』

その人は高哉を見つめ悲しそうに言った。
高哉から目を反らすと次に私を見た。

『あんたもしたの？』

私は首を横に降った。

さっきまでの怖さとこの人が突然現れた驚きで声が出ない。

私から目を離すと、その人は高哉の持つ注射器を取り上げ、無造作に置かれたシャブの入った袋を持って部屋を出た。

すると、水の流れる音が聞こえた。

…トイレに流したんだ。

私は高哉を見た。

シャブを捨てられ、暴れるんじゃないか……。

…私の思いとは逆に、高哉は凄く怯えていた。

膝を抱えるように座り、体が微妙に震えている。
下を向き何か言っているけど、声が小さくて聞き取れない。

高哉が何に怯えているのか……。

この女の人に…？

…違う。

高哉の精神が変になってるんだ。

これがシャブなんだ…。

これが薬物…なんだ…。

私が高哉から目が離せないでいると…女の人に戻ってきた。

『高哉！しつかりしなっ！姉ちゃんだよ！』

…姉ちゃん…？

この人が高哉のお姉さん？

お姉さんは高哉の前にしゃがみ、うつむいた高哉の肩を揺すってる。
それでも高哉は顔を上げない。

お姉さんの声など聞こえていないような……。
下を向き震えてる。

『…駄目か…』

そう言うと、立ち上がり、押し入れの中を物色しだした。

ここにあることを知っていたかのように、押し入れの中から、
10本ほどの注射器とシンナー…葉っぱ…

高哉が持っている薬物をすべて袋に詰めだした。

『おいで！』

『え！？』

『あんたは、私とおいで』

私に向かつて言つと、お姉さんは薬物をいれた袋を持ち部屋を出ようとした。

私は何故呼ばれているのか分からず、動けないでいた。

『早くおいで！このままここにいと、高哉何するか分かんないよ！』

私はお姉さんの後に続いて部屋を出た。

…高哉を残して。

玄関前には大きな改造した単車が止まっている。

…もしかして、これお姉さんの単車？

『乗りなっ』

お姉さんはバイクにまたがり、顎で後を指した。

『…はい』

私がまたがったと同時にエンジンがかかり、マフラーが凄い爆音を鳴らした。

…一体何処に連れて行かれるんだろう…。

しばらく走ると川沿いの土手に着いた。

お姉さんはバイクを止め、さっき高哉の部屋から持ってきた薬物入りの紙袋を持ち、河原に向かい歩き出した。

私は訳が分からなかったが、後に続いて歩いた。

お姉さんは、袋からシンナー入りのペットボトルを出し蓋をはずして、歩きながらシンナーを流し出した。

中身を全部捨てできると、またペットボトルを袋にしまった。

それでもお姉さんはまだ川沿いを歩いている。

私はお姉さんの2m後を歩き続けた。

私達が歩く少し前に高架が見える。

高架下には、ダンボールを上手くつなげ、ダンボールの上にビニールシートを被せてある大きな物がある。

…きつと、ホームレスの家だろう。

お姉さんはダンボールの家の前で止まった。

『おい！おっさん！ドラム缶借りるよ！』

お姉さんはダンボールの家に向かって言った。

『おっ』

中から声がした。

姿は見せなかったが、年の頃は70代ぐらいだろう。と、私は勝手に想像した。

すると、ダンボールの中から手だけが出て新聞紙が出された。

お姉さんはその新聞紙を持ち、ダンボールの家から少し離れた所に置かれているドラム缶に向かった。

新聞紙にライターで火を付け、ドラム缶の中に投げた。

火が燃えだしたとこで、持っていた紙袋ごとドラム缶に投げ入れた。

…シンナーが入っていたペットボトル

…葉っぱ

…注射器

…シャブ

すべてが燃えだした。

ペットボトルの焼ける嫌な臭いがしてくる。

お姉さんは、川沿いの土手に座った。

私も後に続き、少し離れて座った。

お姉さんは特攻服のポケットから煙草を出し、火をつけた。

『私、^{ひろか}広香。高哉の姉ちゃん。あんたは？』

私に顔を向けることもなく、前を流れる川を見ながら言った。

『梓です…』

広香さんは煙草を大きく一息吸うと話し出した。

『高哉はさあ、小さい頃から寂しい思いをしていたんだ…。高哉を庇う訳じゃないよ。誰だって寂しい時や辛い時はある。……でもさあ。人ってそんなに強くないんだよ。簡単に流されちゃうんだよ。』

『……』

私は黙って話を聞いた。

『私らみたいのはさあ、はけ口がないんだよ。家には居場所がない』

…誰も自分を守ってくれない…。だから高哉も薬物に溺れたんだ。特に私らみたいに、やんちゃしてる奴は、簡単に手に入るんだよね。最初はシンナー。そしてシャブ…。エスカレートしてくんだ。でも一度手を出したら最後…。見ただろ？さっきの高哉…」

『…はい』

『今までいろんな奴見てきたけど、シャブに手出したら最後だよ…。簡単にはシャブから離れられない。そして全てを失うんだ。…親…兄弟…友達…自分自身も…。あんたシャブしなくて良かったよ。…何でしなかった？高哉誘ってこなかった？』『誘ってきたけど…出来なかった…。怖かった…。』

正直な私の気持ち。

『それが普通だよ…。そう思うのが普通。』

『……高哉はこれからどおなっちゃうんですか…』

一人残してきた高哉が気になった。

『私にも分かんないよ…。多分…また何処かで、シャブを手に入れようと思うよ。あんたも、もう高哉のそこに行かない方がいい』

『どうして？』

『だから言っただろ！？人は流されちゃうんだよ！…そんなに強くない…』

確かに、私は高哉の誘いを断りきれずシャブに手を出そうとした。たまたま広香さんが来たから手を出さなくて済んだだけ…。

これから高哉はどうなってしまうんだろう…。
私だけが無傷で逃げてしまった…。

高哉を止めることも出来なかった。

高哉に付き合っただけあげることも出来なかった。

私は高哉を見捨ててしまった。

そんな思いが胸の中を埋め尽くした。

『あんたには高哉を助けることは出来ないよ』

私の思いを分かったように広香さんは言った。

『どうして！？どうして何も出来ないの？』

分かってる。

広香さんの言った通り私には何も出来ない。
でもそんな無力な自分を認められなかった。

『じゃあ何が出来る？…何も出来ないんだよ！あんたにも…私にも…。
悔しいけど…』

今まで表情一つ変えず話していた広香さんの顔が変わった。

…悲しい顔…。

私は偽善者の振りをしていただけなんだ。

…高哉を見捨ててしまった。

…何もしてあげられない自分が悔しい。

そう思う事で自分を守っていたのかも…。

今本当に悔しくって、悲しいのは広香さんなんだ。

ただ一人の兄弟がこうなってしまったんだ…。

『もう焼けたなっ』

そう言っているとドラム缶に向かい歩き出した。

中身が燃えたことを確認すると、戻ってきた。

『一緒に来る？』

『どこにですか？』

『祭り』

…そうだ。今日は祭りなんだ。

『行きます』

行く宛もないし、一人でいたくない。

きっと今一人になると、高哉の事ばかり考えて、怖さに押しつぶされる。

私はまた広香さんのバイクの後に乗った。

第29話：暴走

街は祭りで大賑わい。

対向する歩く人が肩が触れずには歩けないほど、人が溢れている。車も通行止めになって、交差点ごとに警察官が立っている。

・さつきまでの怖さを忘れてしまふくらいの熱気。

：来て良かった。

そう思う反面、今日この楽しい祭りの日。その裏では、高哉はシャブに溺れている。

・・・暗い闇だ。

広香さんは、祭りの中心からすこし離れた公園にバイクを停めた。外れた公園でも人は沢山いる。

公園は、若者でいっぱいだ。

特攻服を来た人。

髪の毛は金髪。

パツとみただけで、ヤンキーの溜まり場と思った。

私達が着いた頃には陽も落ち始めて、薄暗くなっている。

今からの時間は街中のヤンキーが集まる時間。

もちろん見て分かる様に、広香さんもレディース（暴走族）だ。

広香さんはバイクを降りると、公園の中心に向かい歩いて行った。

『広香さん！おはようございます』

広香さんの姿を見た他のレディースの人達が深々と頭を下げて挨拶をしている。

軽く挨拶を返し、広香さんは公園の真ん中へと歩いている。
私も後に続いた。

公園にいる人達（暴走族）の視線を感じる。

・誰あいつ・みたいな、暖かい視線ではなく・かと言って、
冷たい視線でもない。

不思議がっている視線だ。

すれ違う人達が広香さんに挨拶をする一方で、その後必ず私をじつ
と見る。

広香さんが向かった先には、黒の集まりがいた。パツと見ただけで
も30人はいる。

『おはようございます!』

広香さんが行くと、みんな一世に挨拶をした。

…これが広香さんのいるチーム?

でもみんな黒の特攻服だし…。広香さんは紫だし…。?

『広香遅いじゃん』

声のする方を見ると、黒集団の奥に広香さんと同じ紫の特攻服を来
た人がいた。

『ごめんごめん。弟のどこ寄っててさあ』

広香さんは黒集団の間を通り前へと進んだ。

私はここに来たことに後悔した。

ここにも私の居場所はない…。

黒の特攻服を来た人が30人以上…。その中で、広香さんと、広香

さんに声をかけた人と、もう一人は紫の特攻服…。

紫の三人はチームのトップだと分かった。

そんな広香さんがずっと私に構っててくれる訳がない…。

勿論知っている子もないし、帰りたいよ…。

『梓！こっちこっち』

どうしたらいいのか分からず突っ立っている私に広香さんは呼んでくれた。

『誰？』

私が広香さんの元に行くなり、紫の特攻服を着た人が広香さんに聞いた。でもその人の目は私を凝視している。

・・・怖い・・・

『梓っていうの！弟のツレ。ちょっとした縁で今日連れてきたんだ』

広香さんに紹介され、私はペコッと頭を下げた。

『こっちが副総の翔子で、こっちが特攻の佳奈。で、私が総長の広香』

広香さん総長だったんだ…………。

私に二人を紹介し終わると、後を振り返り、黒服の方に向いた。

『みんなー。こいつは梓つつうんだけど、私の知り合いで今日連れてきた！仲良くしてやって』

『はいっ！』

広香さんが私の紹介を終えると、副総の翔子さんが立ち上がり黒服達の前に出た。

『じゃあこれで揃ったから、22時まで自由にしなっ！チームの掟忘れんなよ！』

『はいっ！』

翔子さんのかけ声でみんな散らばりだした。

私は広香さんの隣にいるが、このまま広香さんと一緒にいていいのか分からず戸惑った。

『菜奈！』

広香さんが黒服の一人を呼び止めた。

『はい』

『梓と遊んでやって！お前と同年だし』

『はい』

広香さんは私に気を使って、私と一緒にいてくれる子を紹介してくれた。

『じゃあ行こっか！』

菜奈ちゃんは明るく私を誘ってくれた。

『うん』

菜奈ちゃんはどちらかというと、広香さんの様な美人な感じではなく、可愛い感じの子だ。

広香さんと同じ、濃い口紅。キツイアイシャドウをしても、どこか柔らかな感じの子。

…菜奈ちゃんで良かった。

『どこ行こつかあ？梓ちゃんは祭り来たらいつも何する？』

『んゝ。かき氷食べて…』

『じゃあ、かき氷食べに行こ！』

私が話し終わる前に菜奈ちゃんは決めてしまった。でも全然嫌じゃない。

『うん』

私達はかき氷の屋台を見つけに歩いた。

さすがに特攻服で歩く菜奈ちゃんに周りの人達は避けるように歩いている。

こつちを見ようとししない。

菜奈ちゃんと一緒に歩く私にも同じ。

こんなに人が混雑しているのに、誰とも体が触れることなく歩ける。目が合ってもすぐそらす。

私はこの空気が心地よかった。

…強くなつたような…。

『あつたよ！かき氷』

菜奈ちゃんは早速屋台を見つけた。

私達はかき氷を買い、道の脇に座り、歩く人を眺めながら食べた。

『ねえねえ。梓ちゃんは広香さんとどっいつ繋がりなの？』

突然私に聞いてきた。

『広香さんの弟と友達で…』

『高哉君の友達なんだ!』

『高哉のこと知ってるの?』

『見た事はないけど、名前は聞いた事あるよ。こういう世界にいると、大抵やんちゃしてる子の名前は耳に入るんだ!しかも広香さんの弟だし』

『そっかつ。菜奈ちゃんはレディース入ってどれくらいなの?』

『ちょうど一年かなあ。広香さんに憧れてね!でもまさかこのチームに入れると思わなかった』

『難しいの?レディースに入るのって...』

『他のチームは結構簡単に入れるみたいだけど...』

「シヤドウ紗童」

『って聞いた事ない?』

知ってる!

もう何年で代々続いている県で最大で最強のレディース。

『聞いたことある』

『それがうちのチームなんだよね!広香さんで11代目なの。うちのチームは、ハンパ者はいれないんだ。最初に総長と副総の面接があつて、またこれが厳しいの』

『へえ。他のレディースは面接とかがないの?しかもハンパ者で?』

『ハンパ者っていうのは...』

菜奈ちゃんは困った様子だ。

『ハンパ者っていうのは！男にもツレにも喧嘩にも中途半端な奴だよ！男には一途で…。ツレは裏切らない…。って事。後、さっき副総が言ってた掟っていうのは、喧嘩ね。目が合ったら絶対そらすな！売られた喧嘩は買え！相手が誰だろうが逃げるな！って！』

『…へえ』

正直怖い。

『レディースもさあ。名目はケツ持ちのヤクザって感じで付いてるけど、実際はヤクザのシノギに作られたチームがここらは多くて…。だから毎月会費がいたりするんだよ。だから誰彼構わずチームに入れたりする事がよくあるみたい。でもうちは一切そっというのはなし！』

『じゃあ紗童はケツ持ちは付いてないの？』

…ケツ持ち…

その名の通り、何かあった時はヤクザが尻拭いをしてくれる。

ケツ持ちのヤクザがいないってことは、潰される可能性高いんじゃないの？

断然ケツ持ちが付いてるチームのほうが強いじゃん！

なのに、県最強と言われてるのは何で？

私は何故か紗童が心配になった。

『ちゃんと紗童にもケツ持ち付いてるよ！』

でも、会費は入らないんでしょ？

良く意味がわからない。

私が不思議な顔をしていると、菜奈ちゃんは説明しだした。

『私が聞いた話しだと…。紗童初代のときはケツ持ちも何もなくてム作って、四代目のときにケツ持ち付いたみたい。詳しくは知らないけど…。私が知ってる間では紗童がケツ持ち出した事はないなあ。どんな事も総長の広香さんと、副総の翔子さんと、特攻の佳奈さんが片付けちゃうから…。あの三人は無敵だね!』

『凄いだね』

『凄いよ!でも今年で広香さん達引退なんだよね。寂しいけど…。』
『引退?』

『紗童は18歳の3月で引退なんだ。高校生と一緒にだね!これも代々変わることのない決まりなんだ』

笑って話してるけど…。寂しい顔。

それだけ広香さん達は慕われてる証拠なんだ。

私と菜奈ちゃんはかき氷を食べ終えても、どこに行くこともなく話した。

紗童の事。

広香さんの事。

色々私に聞かせてくれた。

『そろそろ公園戻ろうか!』

『うん。今からは何するの?』

『今からはあ…。みんなで走るの』

菜奈ちゃんはワクワクしたように言った。

『私…帰ったほうがいいのかなあ』

『なんで？あつ！でも一緒に走るのは無理か…。さすがに広香さんの知り合いでも、紗童のメンバーじゃないからなあ。』

『……』

『公園戻ったら広香さんに聞いてあげる！…それと今日チームの事色々話したの広香さんには内緒ね。チーム以外の子に話したのバレると怒られちゃうから…。』

『うん！内緒ね！』

『いつそ梓ちゃんも紗童に入っちゃえばいいのに…』

レディースかあ。

ちよつと抵抗あるけど、憧れちゃうなあ。

私はその思いを口には出さなかった。

再び公園に戻った

今はもう辺りは真っ暗。

公園は熱気で溢れている。爆音のマフラーを吹かすバイク。さつきより人数が増えている。

私服の私が浮いてる感じ…。

場違いな感じ…。

集団の前にいる広香さんの元に菜奈ちゃんが歩いていった。

『広香さん！梓ちゃんはどつするんですか？一緒には走れないですよねえ…』

『梓』

菜奈ちゃんに返事をせず、広香さんは私を呼んだ。

『梓は今からあの車に乗りな』

『えっ？』

広香さんは公園の外にある車を指差した。

『梓をバイクに乗せる訳にいかないから、私の男の車なんだけど、乗ってて！集会終わったら飯でもおごるよ』

『…はい』

私は広香さんに言われるまま車に向かうことにした。

『行くよっ！』

広香さんのかけ声に乗って十数台のバイクは爆音を響かせ公園を出て行った。

『…すみません』

恐る恐る車の窓をノックした。
フルスモークで中は見えない…。

『どうぞっ』

運転席の窓ガラスが開いた。

『…お邪魔します』

私は後部座席に乗った。

『こんばんは』

『…こんばんは』

助手席にも男の人が座っている。

二人とも見たからにヤンキーだ。どっちが広香さんの彼氏なんだろう…と思っていると、

『俺達也』

運転席の人が言った。

『俺は茂貴』

助手席の人が言った。

『…梓です』

『梓ちゃん幾つ?』

運転席の人が言った。

『16歳です』

『若いねえ。高一?』

『高二です。誕生日まだなんで…』

『梓ちゃん可愛いねえ。彼氏いるの?』

『いないです』

『じゃあ俺なんかどう?』

『っってお前広香に殺されるぞ!』

助手席の人が突っ込んだ。…って事は運転席の達也さんが広香さんの彼氏だ。

二人とも見た目は凄く怖そうで無口っぽい。その印象とは裏腹に二人とも凄くお喋り。ギャグを言ったり、色々な話しをして私を笑わせてくれる。

広香さんが帰ってくるまで、会話は途切れることはなかった。

・達也さんと茂貴さんは、19歳になったばかりで、暴走族上がり。

達也さんと広香さんは達也さんが暴走族現役のときに知り合ったとか…。広香さんの一目惚れから始まったとか…。

「今じゃあ広香の尻にひかれっぱなし」

など…。聞かせてくれた。

2時間ほどして、また爆音が響きだした。

「戻ってきたか」

達也さんが言った直後、公園に次々とバイクが入り、物凄い爆音が響いている。

…耳が痛くなるほどの爆音が一世に静かになった。

公園に目をやると、みんなバイクを降り広香さんを前に並んでいた。

「あの広香が今じゃあ紗童の頭だもんなあ…」

茂貴さんが呟いた。「ああ。時が経つのは早いよなあ…」

達也さんが言う二人は笑い出した。

二人にしか分からない思いがきつとあるんだろう…。

公園から次々とバイクが出ていく。

すると達也さんの携帯が鳴った。

「はい。おう、分かった」

そう言う電話を切り車を走らせた。

「広香は一旦バイクを置いてから来るから先に飯行ってよ」

私達はファミレスに入った。

席に着いたところで広香さんが来た。

『じゅめくん』

広香さんと私。向に達也さんと茂貴さん。

広香さんは特攻服姿で周りの目をひいていた。

普段なら有り得ないだろうけど、今日は祭りであって、特攻服姿も
そう珍しくない。

第30話：新しい道

『今日は達也のおごりだからじゃんじゃん食べて』

『おう！ならお言葉に甘えて！』

広香さんのノリに茂貴さんも乗った。

『お前らなあ…』

達也さんは困っている。私は三人のやり取りがおかしくて笑った。楽しい。

年が違う人達とこんなに楽しくいられるなんて初めて。

ご飯を食べているときも会話は続いた。私はおかしくって笑ってばかりいた。

一緒にいればいる程広香さんという人に魅了されていく。

高哉の危険を察知し、必死で飛んできた広香さん。

レディースで頭を務める広香さん。

達也さんという広香さん。

強くも遅しくもあり、優しくもあり、女としての可愛い面もあり、素敵な女性。

菜奈ちゃんが広香さんに憧れると言った意味を1日で分かった。

『広香ももう紗童引退なんだよなあ』

言い出したのは茂貴さんだ。

『そうだよ！私もそんな年になっちゃったよ』

広香さんは明るく言い払った。

『寂しいんじゃないの？』

茂貴さんが茶化す様にまた突っ込んだ。

『寂しかねえよ！』

笑いながら言い返した。そして一息ついて言った。

『…これが紗童の決まり。…悔いはないよ』

真剣な表情。

でも寂しさはない。満足した表情。

…悔いはない…か。

私もそんな生き方がしたい。

自分の歩いてきた道を満足だと言える生き方がしたい。

『ところで梓。うちに入らない？』

『えっ？』

『紗童に入らないかって聞いてんの！』

『……』

返事が出来ない。

確かに広香さんには憧れる。けど・レディースとなると…。しかも紗童で入るの難しいんじゃない？どうして私？

『無理に入れとは言わないよ！梓が決める事だし』

私は戸惑い、助け舟を求め達也さんと茂貴さんの顔を伺った。

二人とも何も言わない。それどころか二人で違う話を始めた。私は諦め広香さんに目を戻した。

『…噂で聞いたんですけど…。紗童は入るの難しいって。…何故私なんですか』

『えっ！誰が言ってるのそんな事！』広香さんは驚いていた。

『噂で…。違うんですか』

『…違うとは言い切れないかも。チームに入れるにはそれなりに人

を選ぶよ!」

「私…喧嘩とかは…」

「はははは。」

広香さんは腹を抱えて笑い出した。

「そんな事考えてたの? 喧嘩なんかは自分次第。するかしないかは自分で決める事」

「それでいいんですか?」

「当たり前じゃん! それはレディースだからじゃなくて、今の梓でも有り得ることだと思うよ! 友達や彼氏と楽しくしてる時は喧嘩なんてしようと思わないでしょ? でも大切な友達がイジメられてたり、彼氏にちょっかい出す奴がいたら、ムカつくし、文句言ってやりたいて思うでしょ? レディースでもそう言う感覚だよ!」

「そうですよね」

「そう! 私は逆に訳もなく喧嘩したり弱い奴をイジメてる奴を軽蔑するよ」

やっぱり広香さんはしっかりしてる人だ。

私が今まで描いていたレディースのイメージを一気に覆された。

「梓はずっと高哉の側にいてくれてたんでしょ? 高哉の事を思ってくれたんだよね…」

広香さんの言葉に胸が痛くなった。

確かに初めは高哉を一人にさせたくないと思った。そう思い合っていた。

でも今はどうだろう。

私達は薬物に溺れてそんな事忘れてしまっている。

それにシャブに手を出した高哉を遠退け自分を守ろうとした。

『…でも』

『人は強くない!』

広香さんは私の言葉を遮った。

『梓はあんな高哉だけど側にいてあげてくれた。姉の私もしてやれなかったのに…』

『それはっ』

『どんな理由だろうと』

それは高哉がシンナーを持っていたから…。

広香さんはお見通しの様に言った。

『それがどんな理由だろうと梓も高哉もお互いを居場所にしてたはず。私は高哉の居場所を作ってくれた梓に感謝してるよ』

『でも高哉はあんな事になって…』

『あれは高哉が自らした事だろ？梓のせいじゃない。自分を攻めるんじゃないよ！ワイワイ仲良くするシンナーとは訳が違うだ。梓は手を出さなくて正確だったよ。勿論シンナーだってよくない！紗童は一切薬物禁止！あんな物に逃げたって自分を滅ぼすだけ…』
話しているときの広香さんの表情は強張っている。

広香さんは煙草をくわえ一息ついた。

『だから、私はそんな梓が気に入った訳。めっちゃめっちゃ自分の事情持ちだしてるけど、一瞬でも弟の居場所を作ってくれた梓が気に入ったから。チームに入ってたほしいと思う。それに梓も高哉があなつて居場所を無くしたと思う。私の思い込みだったらごめんな』
私は首を横に降った。

確かに私は唯一の居場所がなくなっただから。

『高哉の代わりと言ったならなんだけど、チームに入ることと梓の居場所になればいいと思う。でも無理にとは言わないよ。梓が決める

事
『

『…よろしく願いします』

『それって紗童に入っていいって事？』

『…はい』

『梓が正式に紗童のメンバーになったから！』

向にいる達也さんと茂貴さんに言った。

『そっかぁ。梓ちゃんも等々紗童のメンバーになったかぁ』

『等々って今日初めて会ったばかりじゃん』

達也さんのノリに茂貴さんが突っ込んだ。

そのお陰で、場の雰囲気は和んだ。

『じゃあ早速、翔子と佳奈に報告するよ。みんなには来週の金曜日の集会で報告するから』

『はい』

私は紗童に入ることを決めた。

広香さんはその場で、副総の翔子さんと特攻の佳奈さんに電話で報告をし、私の紗童入りは決定した。

第31話：親友

今日の夜の集会で、紗童のメンバーと顔合わせする。

私が正式に紗童のメンバーと認められる日だ。

昨日の夜から緊張して良く寝れなくて、今日も朝早く目が覚めてしまった。

こんなことも珍しいので、今日は朝から学校へ行こう。

久しぶり朝の通勤、通学ラッシュに揉まれた。

嫌で嫌で省がなかった朝のラッシュも偶にだと新鮮に感じる。

教室の扉を開けると、既に真弓は来ていた。
一人退屈そうに座っている真弓の背中を叩いた。

『おはよー!』

『…おっ………』

不意打ちだったことに、真弓はひどく驚いた様子だ。

しかもそれが私だったから、一瞬言葉を失った。
その真弓のポカーンとした姿が可笑しくって思わず笑ってしまった。

『もう！ビックリするじゃん！』

声は怒っているものの、顔は笑顔だ。

『ごめんごめん。…恵里は？』

真弓に軽く謝り、教室を見渡した。

『恵里休みだよ。学校サボって彼氏とデートだって！』

まあ、いつもの事だ。

恵里は彼氏以外何も見えなくなる様なタイプ。

彼氏となると、学校なんて二の次。

恵里の彼氏も学生だが、二人して良くサボって遊びに行っている。

私は彼氏がどうというより、学校へ行く事自体がかつたるい。

朝から一日中学校に閉じ込められる事も苦痛だ。

だから、たまにしか学校へ来ない。

来ても昼からとか…

朝から来た日は昼で帰ったり…

それに比べ真弓は毎日ちゃんと学校へ通っている。

当たり前の事なんだろうが、そんな真弓を偉いと思う。

一時間目〜六時間目までちゃんと居た事は久しぶりだった。

早々に帰る支度をし、教室を出ようとした時、真弓に声をかけられた。

『今日は遊びに行けないの?』

前までは、当たり前のように、毎日学校帰り真弓と恵里と遊びに行っていた。

しかし、私は学校に来なくなり、恵里も毎日来る訳ではない。

今日みたいな日ぐらい真弓と遊びたいが、今日は初の集会だから…。

『ごめえ〜ん』

顔の前で手を合わせ謝った。

『そつかあ。何か用事?』

そう言えば、真弓に紗童に入った事を言っていなかった。

別に隠している訳でもないし、隠すつもりもないから、真弓に伝えた。

紗童に入ったこと。

今日は集会があることを。

『…そうなんだ』

真弓は特に驚いた様子もなく、冷静に聞き入れてくれた。

いや、決して、冷静ではなかったのかもしれない。

真弓からは寂しさを感じた。

真弓が感じている寂しさを痛い程分かる。

私と真弓の立場が逆だったなら、私は寂しいから…。

親友の事は誰よりも分かっていたい。

親友が悩んでいるとき、進むべき道を決断するときには、相談してほしい。

親友とは、同じ時、同じ場所を感じていたい。

……そう思うから。

私は真弓に何の相談もする事無く、紗童入りを決めてしまった。

真弓に相談する合間もなく、事が運んでしまったから仕方がないが、直ぐに報告することなく、今に至ってしまったから。

真弓は私との距離を感じてしまったんじゃないか…。

私が新しい世界、真弓と違う世界に行ってしまう様に感じているんじゃないか…。

私が真弓なら、そう思うから…。

ごめんね。

でも、私は変わらないよ。

レディースに入ったって、新しい世界を見つけても、真弓との関係は変わらない。

真弓の知る私で居続けるから。

真弓は私の大切な親友だよ。

口に出し言うのは照れる。

けど、この思いを精一杯真弓に伝えたい。

そう思い、帰り道真弓と別れるまで、話し続けた。
くだらない話を耐えることなく、話し続けた。
真弓の寂しさを取り払ってあげたくて…。

きっと私の気持ちは真弓に届いたはず…。

届いたよね…。

届いていてほしい…。

第32話：壁

集会場所は祭りの日に集まっていた公園。

紗童の集会は第2第4金曜日にこの公園で行われる。

この公園はここらでは一番広い公園。

公園は二つに別れていて、遊具やアスレチックなどがある場所と、その遊具のある場所を抜けると、広場になっている。広場の真ん中には、噴水があり、ベンチが並んでいる。その広場の方が、紗童の集会場所になっている。

私と広香さんが集会場所に着いた頃には、すでにメンバーは揃っていた。

広香さんがバイクで公園に入ると、さっきまで群がっていたメンバーが脇に寄り、道を作った。

広香さんは、その人混みの間をバイクで通り抜けた。

広香さんの紗童での偉大さを見せられた。

…と共に、私は優越感を感じた。

広香さんの後ろに乗り、人混みを分けて通り抜ける感じ…。

広香さんのお下がりの特攻服を着ている私…。

普通、下っ端が広香さんのバイクに乗せてもらえる訳もないだろう。まして、広香さんの特攻服を譲ってもらう事もないだろう。

それが私は出来る。

きつとみんなは羨ましがっているはず…。

・私は特別なんだ。

みんなが尊敬し、怖れ、目標としている広香さん。

何十人という紗童をまとめ、トップに立つ広香さん。

高い存在の広香さん。

でも、私はみんなよりも広香さんと近い場所に居るんだ。

広香さんは私を特別だと思ってくれているんだ。

紗童のメンバーは、トップ3の、広香さん、翔子さん、佳奈さんを除き、現在29名いるらしい。

私はその29名の前に立ち、挨拶をした。最初は緊張でガクガクだったが、私の挨拶は早々に終わった。

奥のほうに菜奈ちゃんの姿を見つけた。

こつちを見て笑いかけている。

挨拶が終わると、副総の翔子さんが話したし、私はどこに行ったらいいか分からず、後ろを振り返ると、広香さんが首を振り後ろに行けと合図してくれ、私はそのまま菜奈ちゃんの居る場所に行った。

「梓ちゃん紗童に入っただんだ」

小さな声で話し掛けてきた。

私は笑顔で頷いた。

菜奈ちゃんも笑顔を返してくれた。

集会は一時間くらいで終わり、今日はバイクで走ることなく、解散になった。

私はしばらく公園に残り、菜奈ちゃんと話した。

『びっくりしたよお。まさか梓ちゃんがメンバーになるなんて!』

『私もまさかだよ!急に決まった事だから...』

『しかも、梓ちゃんの特攻服って広香さんのじゃない?』

『えっ!?どうして分かったの?』

『後...』

私は後を振り返った。

後には誰もいない。

『違うよ!特攻服の後ろの文字だよ!』

『それがどうしたの?みんな一緒じゃん』

『梓ちゃん知らないの?私達黒服のメンバーは、特攻服に無駄に刺繍入れれないの...。でもバックに花の刺繍を入れるのは唯一許されてるの』

『そうなんだ。知らなかった』

『でね!大体みんな薔薇とか牡丹とか入れてるんだけど、広香さんは椿なんだ!』

菜奈ちゃんは私の背中中の刺繍を見ていた。

『他にはいないの?』

『広香さんより前にも入れてた人はいなかったらしいけど、後に入った人は入れたくても入れれないんだよね』

『…どうして？』

『広香さん黒服の時からみんなに慕われてたし、名前もかなり知れてたぐらいたし、そんな広香さんと同じ刺繍を入れる度胸はみんなないんだよ！椿』広香さん。みたいな感じで定着したって訳』

『…そうなの？』

何だか大変な物を貰ってしまった様な…。不安だ。

『うん。でも羨ましいなあ…。』

菜奈ちゃんの一言で私の不安は吹っ飛んだ。

みんなが手に出来なかった物を私は広香さん直々に譲り受けたんだ。
やっぱり私は特別なんだ！

『梓ー！』

その声は広香さんだった。

私は振り返り、広香さんに体を向けた。

『私帰るけど、梓どうする？帰るんなら送ってってやるよ』

私は振り返り、菜奈ちゃんを見た。

『私もう帰ります。お疲れ様でした』

菜奈ちゃんは広香さんに一礼し、私に笑いかけ手を振り、公園を後にした。

『じゃ！行こっか！』
『はい』

私達はバイクの置いてある場所まで歩いた。

『梓まだ時間大丈夫？』

『はい。大丈夫ですよ』

『お腹すいたから飯付き合ってよ』

『はい』

私はまた広香さんの運転するバイクの後ろに乗り、バイクは走り出しました。

風が気持ち良い。

私は居場所を見つけた気がした。

それは、紗童という居場所ではなく、広香さんという強く大きな壁に守られた居場所。

第33話： 茂貴

集会後、広香さんに連れられファミレスに来た。

メニューの注文をしたところで広香さんの携帯が鳴った。
私に断りをいれ、電話にでた。

このあたりの些細な気遣いが大人だ。

『はい。…終わったよ。…今梓とご飯食べに来てる…』

電話の途中、広香さんは電話口を押さえ私を見た。

『達也達も呼んでもいい？』

私は笑顔で頷いた。

広香さんは電話に戻った。

『来なよ。…うん。…じゃあ待ってるね』

『ごめんなあ…急に』

電話を切ると私に言った。

私は笑顔で首を横に振った。
達也さんなら大歓迎。

『今日の集会どうだった？』
急に話しを振られた。

『…緊張しました』

『そうだろうなあ。誰だって始めは緊張するよ！みんな良い奴だからさっ。すぐ馴染めると思うよ』

『はい』

メニューがテーブルに届き、食べ始めたところで達也さんが来た。その後ろには茂貴さんもいた。

私と広香さんは向かい合って座っているため、達也さんは広香さんの横。茂貴さんは私の隣に座った。

『梓ちゃん！紗童入りおめでとう』

達也さんは満面の笑みだ。

『ありがとうございます』

面と向かって言われると恥ずかしい。

『これからは広香を目標に頑張るんだよ』

達也さんは広香さんの頭をポンと叩いた。

『うるせえよ』

広香さんも達也さんの頭を叩き返した。

達也さんは冗談で言っただろうけど、私は本気で広香さんを目標としたい。

それはレディースの頭ではなく、広香さんの様な女性になりたいと思う。

情に厚く、いつも冷静で、大らかで…

広香さんの様なカッコイイ女性になりたい。

『もうそろそろ帰ろっか』

広香さんの声にみんな時計を見た。

三時間は話し込んでいただろうか。

日付は変わっていた。

『茂貴。梓ちゃん送ってやれば？』

達也さんが言い出した。

『そうだよ！』

広香さんも乗ってきた。

『俺はいいけど、梓ちゃんどうなの？』

茂貴さんが顔を私に向けた。

広香さんも達也さんも私を見ている…。

私は送ってもらう立場。誰に送ってもらうかなんて指名できない。

しかも広香さんも茂貴さんに送ってもらうことに賛成している。ここで、嫌だと言えば、ただのわがままになってしまう…。

『…お願いします』

私は茂貴さんに送ってもらう事にした。

私達はファミレスを出た。

『じゃあなっ』

『茂貴！梓に変なことをするなよ』

広香さんと達也さんは笑いながら歩いて行った。

広香さんは単車に乗り、達也さんは自分の車に乗った。
二人は同じ方向に走って行った。

『俺らも行こっか』

茂貴さんの車はかなり車高が下がっているセダンで、フルスモークで社内は全然見えない。

『…失礼します』

茂貴さんの車の助手席に乗った。

…芳香剤のいい匂いがする。

自宅の場所を伝えると茂貴さんは車を走らせた。

社内は沈黙が続いた。

茂貴さんはそんなにお喋りではない。

みんなでいるときも達也さんのノリに突っ込む程度。

私も話す事が見当たらず、流れる外の景色を見ていた。
でも、そつと視線を茂貴さんに移した。

ただ何気に……。

しかし、何気に見た茂貴さんに私は見とれてしまった。

運転する茂貴さんの横顔。

決して格好いい訳ではない。

格好良さでは達也さんの方が断然だ。

しかし、その落ち着いた面持ちが妙に大人に感じる。

でもさすが元ヤンキー。その風格は未だ漂わせている。
そこにそえられる。

暴走族を引退した今でも、名前は知られている。
達也さんにしても同じだが、現役の暴走族からも一目置かれているらしい…。

…この人の側にいれば、怖いものなんてないんだろうな…。

『どうしたの？』

私の視線を感じてか、前を向いていた視線が一瞬私に移された。

『…何もないです』

まさかそんな事を考えていたなんて言える訳はない。

また沈黙になった。

しばらくすると茂貴さんが口を開いた。

『梓ちゃん本当に彼氏いないの？』

『はい』

『でもモテるっしょ？』

『そんな事ないですよ』

『またまたあ…』

少し場の雰囲気緩和できた。

『茂貴さんこそ彼女は？』

この言葉を自分で言ってから思った。

…そうだよ。この人の側に…とか思う前に彼女がいるかどうかまだ知らなかったんだ。

『俺はいないよ…』

『本当に?』

笑みを浮かべて聞き返した。

『本当だって!』

さっきまでのぎこちない沈黙が嘘の様に社内は和み、あっという間に自宅に着いた。

『わざわざありがとうございます』

少し寂しさを感じながら車のドアを開けた。

『ちよつと待つて!携帯の番号教えて』

『…はい』

私はその言葉を待つていた。

携帯の番号を聞かれたかったばかりではない。
このまま何もなく、さよならだけは嫌だった。

少しでも進展が欲しかった…。

少しでも私に興味を持ってもらいたかった。

女として意識して欲しい。

社内での短い間に私はそう思った。

それから茂貴さんと連絡をとるようになり、二人で会う様にもなった。

茂貴さんは長距離のトラックの運転手をしていて、平日仕事が休みのときもあり、学校まで迎えに来てくれることもあった。

私はそれが嬉しくって学校に行く回数が前に比べ断然増えた。

みんな徒歩で帰る中、私は車で男に迎えに来てもらい帰る…。かなり気分がいいものだ。

このことは、広香さんにも報告はしてある。

「茂ちゃん梓の事気に入ってたからなあ」

そう言われた。

広香さんは茂貴さんの事を茂ちゃんと呼んでいる。

…私と茂貴さんが付き合うまで、そう時間はかからなかった。

初めて茂貴さんの家に行き、初めて二人が体を重ねた、その最中に

「付き合って」

って言われた。

そんな場面で言われて断れる訳がない…。

まあ断るつもりもなかったから、即OKで付き合う様になった。

このことを広香さんに報告したら…

『茂ちゃんなら大事にしてくれると思うよ』

祝福の言葉をもらった。

私達は付き合ってから、ほぼ毎日一緒に過ごした。

茂貴さんが仕事が終われば自宅まで迎えに来てくれて、そのまま茂貴さんの家に泊まる。

当然泊まった次の日は茂貴さんは仕事。

私は移動する足がないため、学校は休む。

茂貴さんの帰りをひたすら暇を潰しながら待つ。

茂貴さんが帰ってきたところで、私は自宅に送ってもらった。

だから、その日は別々に寝る。

…また次の日は茂貴さんは仕事を終え迎えに来る…。

そんな日々を続けた。

当然、増えていた学校に行くことも、以前にも増し、行かなくなっ
た。

…行けなくなった。

第34話： 茂貴の思い

週に一回…。行っても二回…の学校。

月に二回の紗童の集会。

それ以外の日は茂貴。

…それ以外の時間は茂貴と過ごす様になった。

夏は終わりを迎え様としている。

私は毎日の日々に追われていた。

たまに行く学校。

たまにしか会わなくなった真弓と恵里。

たまにだから二人との時間を少しでも持ちたい。

…学校が終わり茂貴と会うまでの数時間、真弓と恵里と過ごした。
どこに行く訳でもない。

学校帰り近くの喫茶店に入りお喋りするだけ。

…それだけでいい。

私の存在を感じられるから。

真弓と恵里の中に私の存在を感じられる時間だから…。

紗童の集会が終われば、茂貴が迎えに来る。

集会後、広香さんと茂貴さんにご飯を食べに行くことがあるくらい。紗童に入り、菜奈ちゃんと仲良くなったが、プライベートでは遊んだことがない。菜奈ちゃんのためにあける時間の余裕は今の私にはない。

今の私には、これだけの関係しかない。凄く小さな世界で生きている。

でも今の環境に不満はない。

たまにしか会わなくても、私を受け入れてくれる友達がいる…。

たまに真弓は

「もっと学校来なよ」とか

「たまにはゆっくり私達とも遊ぼうよ」とか言うけど、それは聞き流している。その点恵里は私に対して何も言わない。その場その場の私を受け入れてくれる。

広香さんと達也さんは私を可愛がってくれる。

茂貴は私を愛してくれている。

小さな世界だが、私のいる世界は大きな壁に守られ、世間の若者の間では、地位と名誉を与えてくれる場所。

…満足だ。

今の私には、これだけの関係しかない。
凄く小さな世界で生きている。

でも今の環境に不満はない。

たまにしか会わなくても、私を受け入れてくれる友達がいる…。

たまに真弓は

「もつと学校来なよ」

とか

「たまにはゆつくり私達とも遊ぼうよ」

とか言うけど、それは聞き流している。

その点恵里は私に対して何も言わない。

その場その場の私を受け入れてくれる。

広香さんと達也さんは私を可愛がってくれる。

茂貴は私を愛してくれている。

小さな世界だが、私のいる世界は広香さんや達也さんや茂貴によって、大きな壁で守られ、世間の若者の間では、地位と名誉を与えてくれる場所。

…満足だ。

今日は茂貴が学校まで迎えに来てくれる日。
真弓と恵里とは学校を出たところで別れた。

いつもの様に茂貴の家に向かった。

私達はまだ付き合って1ヶ月とない。
毎日一緒に居るせいか、まだ付き合って1ヶ月と経っていないこと
にびっくりするくらい。

陽も暮れ、のんびり過ごしていると、達也さんが来た。

達也さんとはよく会っているが、茂貴の家で会うことは初めて。
しかも今日は一人だ。

『珍しいじゃん一人で…』
達也さんを見るなり茂貴が言った。

『今日は翔子と出かけるんだってよ』

…ちゃんと広香さんは自分の時間を持つてるんだ。

広香さんを羨ましいと感じた。

…私だって、真弓や恵里がいる。
ゆっくり遊ぶ時はないが、会うことはしてる。

そう自分で自分に言い聞かせた。

『それにしても良かったなあ茂貴』

達也さんは煙草に火を付け部屋の真ん中に座った。

『何が？』

『梓ちゃんと付き合えてだよっ』

『ああ……』

茂貴は素っ気ない。

『ってか、お前まだこんなの持ってるの？』
部屋の片隅に置いてある箱を指指した。

私もこの箱に違和感を感じていた。

茂貴の部屋は角にテレビが置いてあり、無造作に布団が敷いてあり、後は灰皿がある程度の何もないシンプルな部屋。

その片隅にピンクのプラスチックの箱が置いてある。
蓋が閉まっていて中は見えない。

最初は違和感を感じたが、今は気にならなくなっていた。

『ほっとけよっ』

達也さんの問いにも茂貴は素っ気ない。

『いつまでもこんなの置いてたら梓ちゃんも嫌だよなあ？』
達也さんは私に目を向けた。

『えっ？』

急に話を振られ言葉が見当たらない。
しかも、気にも止めなかった箱の話題。

『お前も早くケジメつけろよっ』

茂貴は達也さんを見無視しテレビを見ている。

何故、達也さんはここまで箱の話をするんだろう。

この箱が凄く気になってきた。
一体何が入ってるんだろう…。

茂貴の様子もいつもと違う。

今ここで聞かなきゃ聞けない……。
達也さんのいるこの場で聞かなきゃ。

そう直感した。

『この箱何なの？』

『…お前』

達也さんは茂貴を見た。

『俺バツイチなんだ…』

やっと口を開いた茂貴の言葉。

『…え？』

『俺結婚してたんだ。子供もいる』

私に背中を向けたまま座っている茂貴。

今茂貴はどんな顔をしてるの？

私はどうしたらいいの？

沈黙が続いた。

誰も話そうとしない。

その時達也さんの携帯が鳴った。

『おう。…分かった』

電話を切ると達也さんは立ち上がった。

『広香帰ってきたから、俺…帰るわ』

茂貴はまだ何も言わない。

帰らないで…。

今茂貴と二人きりにしないで…。

そんな思いを視線に込めて達也さんを見た。

私の思いも虚しく達也さんは部屋を出た。

『ちゃんと梓ちゃんに話せよ』

『今は梓ちゃんだけだから…』

そう私達に声を掛け出て行ってしまった。

『…あいつはよく喋るよなっ！本当』

茂貴が私に向き直った。

私は茂貴の目を見れない。

『…ごめんな。騙してた訳じゃないんだ』

『…もういいよ』

言い訳なんて聞きたくない。

『これが最後になってもいい。お願いだから聞いて…』

茂貴は私に頭を下げた。

私が返事をする前に茂貴は話し出した。

『半年前に別れたんだ。男作って出ていったよ。…子供は嫁が引き取った。これは子供が残して行ったおもちゃ箱…。ずっと忘れられなくて…引きずってた…』

茂貴の目を見れない。

涙が溢れてくる…。

この涙は、怒りからなのか、悲しさからなのか自分でも分からない。

今この場で涙を流したくはない。

私の気持ちとは裏腹に涙はどんどん溢れてくる。

『言うつもりだった。ちゃんと梓に言うつもりだったけど、言えなかった。…梓に嫌われたくなくて。…ごめん。俺…自分が思ってた以上に梓に惹かれていって、…今は誰よりも梓を愛してる。』

茂貴が私を愛してくれていることは嘘ではなかったんだ…。

『もついいよ…茂貴』

涙で震える声を絞り出した。

『やっぱり俺ら終わり？』

私は首を横に振った。

『じゃあ…』

今度は縦に振った。

…私は茂貴を許そうと決めた。

『…ありがとう』

茂貴は私を抱き締めた。

茂貴の暖かさを感じ、涙が止まらない。

茂貴の震える肩。

泣いているのだろうか。

今茂貴は私を思っていてくれている。

それでいい…。

それでいいんだ。

第35話：理想の女

日曜日というのに私は昼間から家で一人。

昨日はいつものように、茂貴と一緒にだった。

…日曜日は茂貴も仕事は休みで、土曜日の夜はゆっくり過ごせ、朝も一緒に目覚め、一日中一緒にいられる。

だから私は土曜日の夜からをいつも楽しみにしてる。

しかし、昨日は違った。

茂貴は仕事が終わריいつものように私を迎えに来た。

いつものように、茂貴の部屋でゆっくり過ごした。

私達は布団に寝転がり、部屋の明かりは付けずテレビの明かりだけで過ごした。

まだ時間は早いが、私は少し眠くなってきたので、仰向けになり目を閉じた。

その時、茂貴は私に覆い被さった。

今から何が始まるのかは分かる。

私達は大抵寝る前に体を重ねる…。

…まだ時間早くない…？

…そう思いながらも私は茂貴を受け入れる体勢をとった。

唇と唇が軽く触れ、舌と舌が絡まる。

そのまま私は服を脱がされ、茂貴の唇が私の首筋へ…胸へ…。……。

また茂貴は私の唇に戻り、唇を離すことなく、今度は私が茂貴を覆い被さった。

私は茂貴を愛撫し、また茂貴が私を愛撫し…。

茂貴はその行為の良さを私に教えてくれた人。

茂貴と会うまでの私は、SEXをあまり好まなかった。

…ただその場雰囲気や、付き合い程度でしていた。

茂貴を知ってから、私は毎日茂貴を欲しがっている。

私達は頂点に達し、ぐったりと横になった。

目を閉じ余韻に浸っていると、茂貴が布団から出た気配を感じ目を開けた。

茂貴は服を着初めていた。

いつもなら一緒に寝ているのに……。

その思いを抑え、私も起き上がり服を着た。

終えた後、男が服を着初めているのに、何時までも一人裸で浸っているのは虚しいから。

そう思ったのも、茂貴が何時もと違うことを感じていたから……。

二人共服を着て、煙草を吸い終えたとき……

『今日は送っていくよ……』

やはりきた。

その言葉。

…今日は茂貴と一緒に朝を迎えられない…
そう心のどこかで感じてた。

『……………うん』

私の心の中はこんなに素直じゃない。

…帰りたくない。

…茂貴と居たい。

…どうして今日は帰すの？

…私の事嫌いになったの？

そう縋り付きたい気持ちを押さえた。

私が縋ったところで、ただ茂貴を困らせるだけ…。

うつん…。縋り付く女は醜い。

私はそう思う。

…醜い私を見られたくないから。

…嫌われたくないから。

でも、頷くだけで精一杯。

明るくいつも通りなんて出来ないよ。

帰りの車内で沈黙が続く。

私が感じている空気の重たさは、茂貴も同様に感じているだろう。

『…ごめんな』

茂貴が沈黙を破った。

『何が？』

一緒に居れないことを謝っているんだろう。
しかし、私は何も感じていない振りをした。

…それが大人だと思うから。

…それが理解ある格好いい女だと思うから。

『明日、子供と会った…』

子供？

前の奥さんが引き取った子供？

『…うん』

私は暴れ出しそうな感情を押し殺した。

『月に一回、会わせてくれる約束なんだ』

『前の奥さんは？』

聞いてしまった…。

素直に頷けなかった。

慎悟のときを思い出したから…。

あの時真実は慎悟は前の彼女に戻ったりはしていなかった。

でもそれは後になって分かったこと…。

あの時の様な寂しい思いはもうしたくないから…。
後悔したくないから…。

『前の嫁も一緒…。でも！俺は子供に会いに行くだけ！前の嫁とはもう何もないし、何も思わない。信じてほしい。…今は梓が一番だから…』

『…うん』

素直に嬉しい。

これでちゃんと茂貴を送り出せる。

『明日の夜会おうな。迎えに行くから』

『…まだわかんない』

『そつか。でも帰ったら連絡するから』

茂貴が私を気遣って言うてくれたんだろう。

ありがとう茂貴。

でも私、少し反抗したかったんだ。
少し茂貴に心配かけたかった。

だから、こんな返事をしちゃったの。

ごめんね茂貴。

愛してるよ茂貴。

だから今日は日曜日なのに、一人茂貴の帰りを待っている。

寂しくなんてない。

不安なんて感じない。

茂貴がちゃんと戻ってくるって確信してるから。

何時茂貴が迎えにきてもいい様に既に準備は出来ている。

P M・4:00

携帯が鳴った。

茂貴だ。

「はい…」

待っていた茂貴からの電話。

嬉しくてたまらない電話。

でも私は冷静を装った。

茂貴は直ぐ迎えに来てくれた。

昨日も会ったはずなのに、茂貴と会えた喜びは半端ではなかった。

その感情を押さえているつもりでも、言葉が止まらなくなる。

茂貴と話したい。

茂貴を近くで感じたい。

『帰り早かったね』

『そうか？もつと早く帰るつもりだったんだけど…』

『そうなんだ』

その話を引っ張るのは止めた。

聞きたくないから。

前の奥さんの事も…

子供と何をしていたとか…

聞きたくないから。

『今日はもう会ってくれないかと思ったよ』

『どうして？』

『…昨日そんな感じだったから』

それは茂貴に意地悪したかっただけ…。本当は会いたくて、会いたくて、ずっと待ってた。

『そうかなあ』

『そうだよ！もう梓怒って、遊びにでも行ったんじゃないかと心配したんだからなっ！』

眉間に皺を寄せ、ムキになっている。

…心配してくれてたんだ。

ありがとう茂貴。

『遊びに行こうと思ったけど、寝過ぎちゃって、行けなかったよ』

嘘。

ずっと待ってた。

茂貴に会いたくて、遊びになんて行けないよ。

本当の事は言わない。

「茂貴の帰りをずっと待ってた」

なんて、言えない。

だって、重いじゃん。

茂貴に重い女なんて思われたくないから。

茂貴には心の広い、理解のある女でいたいから。

茂貴が好きだから。

嫌われたくないから。

ずっと好きでいてほしいから。

その為だったら、気持ちを押し殺す事なんて、どうって事ない。

茂貴に愛される女でありたい。

それが偽りの私だとしても…。

辛いなんて思わない。

茂貴が結婚してたことも過去の事。

子供がいても仕方がない事。

全てを受け入れよう…。

第36話：突然

茂貴と付き合い、3ヶ月が経つ。

寒さもピークに達し、今年も終わりに近づいている。

二学期も今日で最後…。

12月といえば、カップル最大のイベントがある。クリスマスだ。

真弓と恵里はクリスマスの予定を楽しそうに話している。

真弓は彼氏と遠出をして泊まりでイルミネーションを見に行くそうだ。

恵里は彼氏にクリスマスプレゼントを買いに連れて行ってもらうらしい。

『梓、クリスマスの予定は？』

真弓が笑顔で聞いてきた。

『もち彼氏と過ごすでしょ？』

恵里も笑顔を私に向ける。

『……うん』

笑顔の二人に笑顔で返した。

クリスマスが待ち遠しくてたまらない

… かの様に。

本当の私は、クリスマスなんて楽しみじゃない。
かと言って、嫌な訳でもない。

真弓や恵里と違って、… ただ私には、いつもと同じ日常だから。
茂貴とはクリスマスも一緒に過ごすだろう。
でもそれは、クリスマスだからじゃなく、いつも通りの事。

だから、クリスマスなんて関係ない。

遠出をすることも、買い物に行くこともない。
家で過ごすのだろう。

遠出をすれば、ガソリン代だってかかる。
宿泊料だっている。

勿論、買い物に行くにはお金がいる。

だから私達はいつも家で過ごしている。

『梓はきつとプレゼントも良いもの貰えるんだろうなあ』

恵里が呟いた。

『だって梓の彼氏は社会人だもんね』

… 私も最初はそう思ったよ。

働いていても、お金がない人だっているの。

茂貴がどれだけ働いたって、余るお金なんてないんだよ。

私は心の中で真弓と恵里に言った。

茂貴と付き合って二ヶ月が過ぎた頃だった。

夜いつもの様に茂貴の家にいたら、一人のおじさんが何も言わず平気で部屋に入ってきた。

年の頃は40歳ぐらいだろう…。

髪の毛には少し白髪があり、見た感じは、生真面目なサラリーマンといった感じだ。

しかし、おじさんの登場に驚いたのは私だけ。

そのおじさんは茂貴のお兄さんだったから。

茂貴に外に行くよう言われ、私は家を出た。

茂貴の家は平屋の小さい家。

玄関に入って直ぐ左が茂貴の部屋。

右には小さいキッチン。

キッチンを通って、奥に部屋が2つあるらしい…。

茂貴の部屋以外の家の中は聞いただけで知らない。

部屋から出たものの、どうしたらいいか分からず、外に出た。

私は寒空の中、お兄さんが帰るのを待った。

少しでも寒さを感じない様に、身を丸め座っていた。

15分程し、お兄さんは家から出てきた。

私には目もくれず、前を通り過ぎ歩いて行った。

茂貴に呼ばれ、部屋に入ると、明らかに、お兄さんが来る前の茂貴とは別人になっていた。

表情は強張っていて、私の存在を忘れたかの様に、黙々と煙草を吸っている。

私はお兄さんと茂貴が一体何を話していたのかは知らない。

だから普通に話し掛ければいいのに、私は、その茂貴の放つ空気の重たさで、声を掛けることも出来ない。

茂貴の側に静かに座った。

『俺って…駄目な奴だよ…』

茂貴は頭を抱え呟いた。

『何が？』

その言葉しか出てこなかった。

『別れよう』

…？

…何？

…どうして？

…私に言ってるの？

『…………』

言葉を失ったというのはこういう事だ。

状況が全く把握出来ない。

何故急に……。

『…俺ら別れよう』

煙草を灰皿に押し付けるように消し、私を見る事なく、もう一度言
った。

『…どうして？何で急にそんな事言つの？』

こんな別れってないよ…。

訳ぐらい教えてよ。

…私は必死な思いで問い掛けた。

『…俺は梓を幸せに出来ない。…俺じゃ駄目なんだ』

茂貴と目が合った。

茂貴の目にはうつすら涙が浮かんでいる。

『…どうして？意味分かんないよ…』

茂貴は私から目を反らし、また煙草を吸い出した。

その姿は、何もかも吹っ切った様な…

もう私を消し去ろうとしている様に見える。

…お願い私を一人にしないで。

…捨てないで…

…茂貴は私のじゃなくなる。

…茂貴が私から離れて行っちゃう。

泣いたら茂貴を困らせるだけ…。

嫌われちゃう…。

だけど茂貴の横顔を見ると、涙が止まらない。

これ以上嫌われたくないから、涙を見せない様、茂貴に背を向けた。
その時、後ろに感じたのは、茂貴の温もりだった。

後ろから私を抱きしめていた。

この温もりが最後の別れだと…

最後の優しさだと…

言葉の代わりに、茂貴の温もりがそう言っている感じがした。

寂しさ。

悲しみ。

悔しさ。

無念さ。

全てが私を襲う。

声が出そうなくらい涙が出る。

『…梓…。俺のこと好き?』

さつきまでとは違い、茂貴の声は落ち着いていた。

『好き…だよ…』

話す事も出来ないほど涙は出る。
でも、必死で答えた。

ここでちゃんと自分の気持ちを言わないと駄目だと思ったから。

『俺も、梓の事好き』

耳元で囁いた茂貴の言葉に戸惑いを隠せなかった。

『ならどうして！？どうして別れるの？』

茂貴の腕を離し、振り返った。

向き合った状況も一瞬。

今度は前から抱き締められた。

『好きだから別れるんだよ…。梓が大切だから』

『そんなの分かんないよ！』

茂貴を押し退けた。

お互い好きなのに別れなきゃいけない理由なんてあるの？

そんなの納得出来ない！

好きだから…大切だから別れる…。

それが私の幸せ？

好きな相手と別れる事が幸せな訳がない。
幸せを感じられない。

私は、気持ちをありのまま茂貴に打つけた。

これほど、自分の感情を露わにした事は初めてだった。

…友達にも

…茂貴にも

嫌われたくないから…。

常に

「良い人」

でいたかった。

でも…今は良い人でいられない。

茂貴を離したくないから。

今ある気持ちを伝えないと、きっと茂貴とは終わってしまう。

その危機感が私を露わにさせた。

私の必死の思いが届いたのか、茂貴が訳を話し出した。

番外編：茂貴の過去。これが現実。

父、母、兄の四人家族。

父は家族の為に働き、母は家族の為に尽くし、何処にでもある幸せな家族。

父と母は40代半ばにして茂貴を設けた。

茂貴が生まれたときには既に兄は中学三年生。

一人っ子同然に育てられ、どちらかというと言やかされて育った。

永遠に続くはずの幸せがあるとき、一瞬で崩れた。

茂貴が10歳のとき、母が倒れた。

診断は大腸癌。

気付いた時にはもう遅く、しばらくし、母はこの世を去った。

享年54歳。

母の死を境に家族は崩れてしまった。

父は母の死から立ち直れず、仕事にも行かなくなり、一日中酒に溺れる日々が続いた。

社会人だった兄はそんな父に嫌気がさし、家を出て行った。

茂貴はその時まだ小学校4年生。
家を出ることすら出来ない。

自分を置いて、一人で出て行き…
一人だけ逃げた兄に対し憎しみしか感じなくなった。

その頃から、茂貴は炊事、洗濯、家事全般をこなす様になった。

生前、母が蓄えた貯金を崩し、何とか日々食べていく事は出来た。

しかし、父は仕事を辞め、入ってくるお金はない。
貯金がそこを付いたのはあつという間だった。

食事を取れない日々が続いた。

父は相変わらず、一人部屋に隠り、浴びる程、酒を飲んでいた。

同じ家にいても、父と顔を合わすことはなく、やせ細っていく茂貴
に気付きもしない。

その時、茂貴は感じた。

自分の身は自分で守らないと…。

酒に溺れ、顔も合わすことのない父。
そんな父だが、自分を守ってくれる。
助けてくれると……。

母が居た頃の父とは、全く変わってしまったが、昔の父の面影を、
未だ心の片隅にまだ描いていたのだ。

もう昔の父はいない…。

そう確信してから、茂貴は変わった。

働きたくても、働くことの出来ない茂貴は、自分が生き延びる手段を考えた。

……万引きだ。

茂貴は万引きで、生活を立てた。

しかし、毎回毎回上手くいくはずもなく、一度捕まった事があった。未成年。しかも子供とあって、警察を呼ぶこともなく、その場はとりあえず親の出番だ。

勿論、家に電話をした所で父が出るはずもない。

茂貴はずっと泣きじゃくっていた。

困り果てた店員は、軽く注意し、そのまま茂貴を釈放した。

これも全て茂貴の計算済み。生きて行く為の手段だ。

中学に入り、そんな生活にも疲れた頃。

茂貴は良い案を思い付いた。

簡単にお金を手に入れる方法。

……喝上げた。

標的を見つけると、直ぐに実行した。

それは以外にも簡単で、あっさりと事は運んだ。

今度は、そんな生活を続けていると、茂貴が喝上げをしていることを知った上級生に目を付けられる様になった。

茂貴も、目を付けられている事を知っていたが、そんな事では止められない。

生活が掛かっているのだから…。

等々、上級生は実行に表した。

茂貴は下校途中に囲まれたのだ。

しかし、それぐらいで、怯えていたら喝上げなんて出来ない。

自分を囲む上級生は、茂貴にはただの邪魔な壁にしか映らなかった。

…かと言って、相手は5人…。

壁は大き過ぎる。

『てめえら、下級生相手にタイマンも張れねえのかよ!』

相手はまんまと乗ってきた。

リーダーらしき奴とタイマン張る事になった。

茂貴は今まで強がってはいたものの、喧嘩は初めてだった。

しかし、負ける気がしない…。
実際、結果は茂貴の圧勝だった。

茂貴をそこまでさせたのは、ただ生きて行く為…。

それを妨げるものは、誰であろうと許さない。

その欲望が茂貴を強くさせた。

それからと言うものの、茂貴の敵は増える一方だった。

それと同時に、相手を倒し、茂貴に平伏した分、収入は増えた。

喧嘩に明け暮れ、茂貴は圧勝を続けた。

暴走族の頭が、その噂を聞きつけ、茂貴を口説き落とし、チームに入れた。

その暴走族で、達也と出会った。

茂貴、中学三年生だった。

中学を卒業し、茂貴は就職した。

その頃の父は、もはや、母の死に立ち直れないといった状況ではなかった。

只、家でゴロゴロ酒を飲む。

その墮落した生活から抜け出せないだけだった。

その証拠に、娼婦が家を出入りする様になった。

狭い家。

襖一枚向こうの出来事なんてまる分かりだ。

茂貴から見たら、古汚い婆（娼婦）の、汚い枯れた喘ぎ声までも聞こえてくる。

…酒を買う金は？

…娼婦を買う金は？

苛立ちと嫌悪感を感じない日はない。

それでも、茂貴が家を出る事は出来なかった。

中卒で、まだ16歳の茂貴の収入なんてしれているから。

それに、父の事なんて、もうどうでもいい。

何処かで金を借りていようが、何をしていようが俺には関係ない。

そう思っていた。

そんな茂貴が癒やされる場所を見つけた。

前の妻との出会いだ。

茂貴は暴走族に入ってから一段と名前が売れた。

そんな茂貴に憧れを抱き、彼女から攻めたのだ。

付き合つて半年と経たない内に、彼女は妊娠。
そのまま結婚。

茂貴 18 歳。

若すぎる二人には、お金はなかった。

二人で新居を構える事も出来ず、茂貴の自宅で結婚生活はスタートした。

父親は一緒だけど、気にしなければいい。

二人は幸せだった。

お金がなくても…

父が一緒でも…

これから産まれてくる子供と三人。
裕福じゃなくていい、幸せな家庭を築いていこうと……。

しかし、幸せも一瞬。

やはり父は酒と女を買つたため、多額の借金をしていたのだ。

働いてもいない父が、表企業の金融会社から借りれる筈もない。
裏企業からお金を借りていたのだ。

返済が届こうつていたのか、取り立てが来たのだ…。

朝晩構わず毎日めちゃくちな取り立てが来る。

居留守を使っても、そのストレスは半端ではない。

家に居ると、取り立てが来る。

妻は家に居る事が少なくなり、等々帰って来なくなった。

父親に返済能力が無いと見切ると、取り立ては茂貴へと回った。

家を出た処で、自分への取り立ては避けられない。

そう思った茂貴は、父親の借金を肩代わりする事を決めた…。

父親の借金は、利息が山となり、膨大な額だった。

茂貴の収入では利息を払っていくのも間々成らない。

茂貴はプライドを捨て、数年連絡を取っていない兄に助けて貰おうと頭を下げ頼んだ。

しかし、兄から返ってきた言葉は無残だった。

兄は結婚していて、子供にも恵まれ、幸せを掴んでいた。

『人の幸せを邪魔するな！

俺には関係ない。』

あっさり見捨てられた。

茂貴は仕事を掛け持ち、寝る間を惜しんで働き、借金の返済に宛てた。

それは、父の為ではない。

愛する妻が戻って来てくれると信じているから。

また幸せを取り戻したいから。

その一心だった。

しかし現実には、利息を返して行くのが精一杯。

そんなある日、一通の手紙が届いた。

…家庭裁判所からだ。

妻が離婚調停の申し立てたのだ。

…何故、直接妻の口から言ってくれなかったのか。

しかし、妻の取った行動は正しかった。

直接、離婚を言われた処で、すんなり承諾しなかっただろう。

妻はまだ自分を愛していると信じていたから。
何より妻を愛しているから。

夫には多額の借金があり、取り立てが厳しい

その申し立ては離婚にはかなり有利な証言だった。

まだ産まれていない子供を見ることなく離婚。

これで茂貴は働く理由も、借金を返済する理由もなくなった。

茂貴は掛け持ちしていた仕事を辞めた。

それでも、取り立ては止まない。

父の言動も変わらない。

変わってしまったのは茂貴だけ…。

愛する妻を…子供を失った。

父に対する憎しみは増す一方。

父を殺して仕舞おうと、包丁を突き付けた事もあった。

…でも、出来なかった。

昔の優しい父。

頼もしい父を忘れていなかったからだ。

離婚してからも、茂貴は返済を続けた。

三食の食事を一食にし、無駄な金は一切使わず、全てを返済に宛てた。

そんな時、私達は出会ったのだ。

第37話： 気付いてしまった思い

茂貴は洗いざらい過去の出来事を話してくれた。

今日、兄が来た理由も……。

最近、利息分の支払いが滞りぎみになり、金融会社は兄の存在を調べ、兄の元へも返済の請求に行ったのだ。

兄には家族があり、勿論、妻は何も知らない。

父の借金や、父、茂貴の存在までも知らされていなかったのだ…。

その場合は、妻を誤魔化せたが、これ以上取り立てが来る事があると困る。

俺はもうこの家とは、縁を切った。

この家に居るお前が始末するのが当然だ。

人の幸せを壊す様な真似をするな。

迷惑だ。

兄はその事を言う為に、何年も近寄る事のなかった自宅に…、茂貴の元へ来たのだ。

…確かに俺はこの家に居座り続けている。

しかし、それは出たくても、出れなかったから。

それに、この借金は俺が作ったものじゃない！

親父が勝手に作っただけだ！

俺の親父だが、お前の親父でもあるじゃないか！

なのにどうして俺だけが……。

そう言い返す事も出来た。

でも茂貴には、言い返すだけの気力もなかった。
それに、兄には、妻と子供がいる。

茂貴は愛する家族を失い、その辛さを知っている。
だからこそ、兄の気持ちも痛い程分かる。

……俺には失うものは何もない。

そう思った茂貴は、兄に言い返す事を止めたのだ。

それは、この状況を一人で背負っていくという事だ。決意だった。

『だから……俺と居たら梓は幸せになれない。俺……梓に嫌われたくないんだ……。愛する人が去って行くのが嫌なんだ……。それなら、梓が俺の事を好きでいてくれる内に別れたいから……』

初めて見せた茂貴の弱さ。

『……それは茂貴の考えでしょ？……茂貴と別れたくないよ……私は茂貴を一人にはしないよ……』

こんなに弱りきった茂貴を一人にはさせておけない。
放っておけないよ。

私で出来るのならば、茂貴の辛さを和らげてあげたい。

茂貴の安らげる居場所になりたい。

茂貴の側にいよう。

そう誓った。

だから、私はクリスマスだからといって、真弓や恵里の様な楽しみはない。

茂貴と一緒にならそれでも構わない。

私の状況を知らない真弓と恵里は、まだクリスマス of 話題で盛り上がり、年上の社会人の彼氏がいる私を羨ましがっている。

真弓と恵里には茂貴の事情を話していないのだから、しょうがない。

此からだって話すつもりはない。

話したらきつと、茂貴との付き合いを反対されると思うから…。

茂貴を好きだから…と言う気持ちを言葉で上手く伝えられないと思うから…。

きつと真弓や恵里には、借金があり、出かける事も、食事を採ることも出来ない彼氏。

そういう印象でしか残らないと思うから。

友達には祝福されたい。

だから、茂貴の事情は言わない。
…此からも。

12月24日

クリスマスイヴ

私は朝からケーキを作っている。

料理なんてした事のない私。

本を見ながら、見よう見真似で、精一杯作った。

クリスマスなんて関係ない。そう思っていたが、やはり私もクリスマスを感じたい。

贅沢なんてなくていい、プレゼントも欲しくない。

でもクリスマスを茂貴と過ごしたという思い出を作りたいから。

私は冬休みだが、茂貴は仕事。

張り切って朝からケーキを作ったものの、会うのは夜だ。

夜までの時間を持て余していると…

携帯が鳴った。

広香さんだ。

今から会えないか？という電話だった。

茂貴と会うまで時間もかなりあるし、私はOKし、広香さんの迎えを待った。

広香さんのバイクの後ろに跨り、向かった先は広香さんの家（実際

には達也さんの家)だった。

プレハブの部屋に入ると、中には達也さんがいた。

広香さんと達也さんは同棲している。

家を捨て、行き場を無くしていた広香さんと出会い、それから達也さんの自宅で一緒に住んでいるのだ。

正確には、庭に建つ六畳ほどのプレハブの部屋に住んでいる。

達也さんに挨拶し、部屋の中央にあるテーブルの元に座った。

広香さんは私の隣に、向かいのベッドには達也さんが座った。

いつもとは違う雰囲気。
和やかな空気ではない。

話して一体何？

自然と私も強張った。

そんな重苦しい空気の中、広香さんが優しい声で言った。

『最近どうしてた？』

私を労る様に、優しい口調だ。

確かに、最近こうして、広香さんや達也さんと会うことがなかった。

茂貴と付き合い始めの頃は、よく4人で会ったりしていたが、最近

では全くなかった。

広香さんとは集会で顔を会わす程度。
ゆっくり話す事もない。

『茂貴と会う以外は特に何も…』

そう。

真弓や恵里と遊ぶ余裕も、広香さんと話す余裕もないくらい、私の時間は茂貴で埋め尽くされている。
学校が終われば、茂貴が迎えにくる。

学校に行かない日は、大抵茂貴の家に泊まった次の日。
帰る足がない私は、仕事に行った茂貴の帰りを日田すら待つ。

集会には茂貴の送り迎え。

集会后、メンバーと話す余裕もなく、茂貴の迎えは来る。

毎日毎日。何時。何分。何秒。私の時間は茂貴で一杯。

『茂ちゃんとは上手くやってるんだね』

広香さんの笑顔が何故か……悲しそう。

『はい』

広香さんが何故そんな顔で私を見るのか……。

ただこの空気を変えたくて、私は明るく返事をした。

その時、私の携帯がなった。

着信は茂貴だ。

私は電話に出ることを躊躇った。

広香さんのところに来ていた事を言っていない。

最近の茂貴は、会っていない時でさえ、私の行動を把握していないと気が済まない様になっている。

誰と何処にいくのか。

何時出て、何時帰るのか。

全ての行動を茂貴に報告しなければならない。

そう言われている訳ではないが、前に茂貴に言わず、真弓と遊んだときに凄く怒られた事があった。

その時の茂貴の怒り様は尋常ではなかった。

部屋中暴れまくり、乱暴な口調で私を怒鳴りつけ、壁を殴り、私の後ろの壁に灰皿を投げつけた。

体の震えが止まらない……。

私は泣きながら、何度も何度も謝った。

しかし、その声も茂貴の耳に入っていなかったのだらう……。

険しい顔で私に歩み寄ると、私の胸ぐらを掴んだのだ。

…殴られる。

もう今の茂貴を静める事は無理だ…。

覚悟を決め、胸ぐらを掴み怒りを露わにする茂貴をじっと見つめた。

しかし、体の震えと涙は止まらなかった。

怒り狂っていると思ったら、今度は私を強く抱き締めた。

『…ごめ…ん。』

……？

茂貴の顔は見えないが、泣いているのか、私に触れる体が少し震えている。

『…愛してる…愛してるから…一瞬でも梓を離したくないんだ…』

茂貴の大き過ぎる愛を感じた日だった。

それと同様に、茂貴に恐怖を覚えた日でもあった。

だから、常に連絡を入れる様にしている。

あんな茂貴を見るのは嫌だから。

茂貴が怖いから。

何より恐怖で出る涙を見せたくないから。

悲しい涙。

嬉しい涙。

色々な涙があるが、愛する人が恐くて流す涙が一番嫌だ。

だから今、茂貴からの電話に素直に出れない。

茂貴に何も言わず、今こうして広香さん達という。

この事を知ったら、きっと茂貴はまたあの日の様になるだろう…。

今は出ずに、寝ていたと後で嘘をつこうか……。

何時までも携帯は鳴り続けている。

携帯を握り締めたまま、戸惑っていると、広香さんが携帯を取り上げ、何の躊躇もなく通話ボタンを押した。

『茂ちゃんごめん！今日年末の暴走の事で急遽集会開く事になって！梓連れ去ってきちゃったんだ』

『…梓？梓今席離してるんだ。みんなの飲み物買いに行ってる。下端は辛いよなあ』

『茂ちゃんに連絡してないって心配してさあ。連絡きたら出て下さ
いって携帯置いて行っただ！本当下っ端は辛いよ！集会中電話も
出来ないんだから』

『だから、集会終わり次第、茂ちゃん所送って行くから』

電話を切ると、広香さんは私に向かってウインクした。

茂貴を上手く誤魔化せたんだ。

さすが広香さん。

『茂ちゃん…束縛凄いでしょ？』

私に携帯を返した。

そんな事まで知っているんだ。

私は頷いて返した。

『梓ちゃん痩せた？』

今まで黙っていた達也さんが話した。

また頷いて返した。

『ちゃんと食べてるの?』

心配そうに広香さんは私の顔を覗き込んだ。

その問いには頷けなかった。

茂貴と付き合う前、45kgあった体重が、今では40kgしかない。

体調が悪いと感じると40kgを切ることもある。

達也さんが言うように、確かに痩せた。

と言うより、激痩せた。

それもそのはず、最近の私は一日一食食べれば良い方だ。

基本的に茂貴と居る時にご飯は食べない。

…お金がないから…

だから、毎日茂貴と一緒にいる私が、ご飯を食べる時間は限られている。

学校から帰り、茂貴の迎えが来るまでの間に、食事を済ます。

そのまま茂貴の家に泊まり、次の日、動く足がない私は、学校にも行かず、家にも帰らず、一日中茂貴の家で茂貴の帰りを待つ。

その間は勿論食事は無しだ。

茂貴が仕事から帰り、家に送ってもらえば、要約食事にあり付ける。

しかし、送って貰えなければ、また次の日も食事は無い。

私が家に帰るも帰らないも茂貴次第。

でも、やはり空腹を耐えるには限界がある。

茂貴と会うまでの僅かな時間に私がする事。

…彼氏と会うから念入りに化粧をする訳ではない。

…彼氏と会うから、今日は何を着ようと服を選ぶ訳でもない。

これから何時間、何十時間と食事を取れないと思い、何でもいい、お菓子でも、果物でも、その辺にある物を、お腹に入れておこうと食べるのだ。

そんな生活をしていて、痩せない方がおかしい。

『梓…。無理してない？』

……無理？

『そうだよ。茂貴の家の事情は俺も良く知ってる。でも、梓ちゃんがそれに付き合う事ないよ』

子供に話しかける様な優しい声。
二人の哀れみを持つ視線が痛い。

……そんな事言わないで。

……そんな優しい言葉をかけないで。
自分で自分の気持ちに分からなくなるよ……。

… 茂貴を好きだから…

真弓や恵里の様に、デートをしなくても…、プレゼントを貰えなくても平気。

愛する茂貴と一緒に入れるのなら…。

自分の時間が無くても、束縛がきつくても平気。

それは愛の証だから…。

そう思っていたのに…。

なのに…。

そんな優しさを向けられると、心の中の抑えていた物が出てきちゃう。

… 普通のカップルみたいに、映画を見たり、手を繋いで出掛けたりしたい。

真弓や恵里が羨ましいと感じた事…。

… 空腹の時に心配せず、お洒落にだって時間を掛けたい。

… 友達とだって遊びたい。

… 愛してるから…

そう思い、隠していた思いが…

自分でも気付かない様締まっていた思いが、表へ出てくる。

自分の気持ちが分からない。

何が本当の気持ちなのか。

茂貴を愛しているから…？。

恐怖感や偽善者振る事で、離れられずいるのか…？。

それさえも分からなくなる。

『俺：茂貴とは連れだし、梓ちゃんも広香の大切な仲間じゃん！俺にとつても大切だし。そんな二人をやっぱ応援したい。幸せになつて貰いたい！…けど、梓ちゃん見ると、何故か辛いんだよ…。梓ちゃん今幸せ？』

達也さんはじつと私の返事を待った。

広香さんは優しい視線を送ってくれている。

『幸せです！』

本音は違う。

幸せなんて感じる余裕さえない。

茂貴の為の時間。

その本の僅かな隙間に、友達との関係を繋ぎ止める時間。

毎日毎日、追われる様に過ごしているから。

でも、二人を心配させまいと嘘を付いた。

私を気遣ってくれた事だけで満足。

幸せだ。

これ以上二人に心配掛けさせたくない。

私は精一杯明るさを見せた。

私の言葉を信じたかどうかは分からない。

しかし、それ以上話しを引っ張ることはなく、私は茂貴の元へ帰った。

二人とは、精一杯の笑顔で別れた。

茂貴は何の疑いもなく、私を迎え入れてた。

集会なんて嘘なのに…。

後ろめたい気持ちと、もう一つの自分の気持ちに気付いた事とが、混ざり合い、ともに茂貴の顔を見れない。

とりあえず、今日作ったケーキを手渡すと、茂貴は驚く程喜んだ。

「美味しい」

と何度も言い食べてくれた。

茂貴の無邪気な笑顔を見て思った。

時々辛さを感じるのは事実。
でもやっぱり好きだ。

私はまだ頑張れる。

限界を感じるまで茂貴といよう。

そう込み上げて来るものを感じた。

第38話： 事件

年が明け、年末の紗童の暴走も無事終わった。

共に、広香さんの引退が近付いてきている。

… 広香さんが紗童を引退しても、私は紗童を続けていけるだろうか…。

そんな不安がある。

紗童に入って半年。

毎日茂貴と一緒に、メンバーの子達と遊ぶ事すらない。

未だメンバーと馴染めていない。

集会に行けば、それなりにメンバーの子達と仲良くはしてる。

でも、それも広香さん有ったの私だと思っから。

広香さんの居ない紗童でやっていけるだろうか…。

寂しさと不安で一杯。

引退式を一週間前に控えた時。

珍しい人から連絡があった。

菜奈ちゃんだ。

紗童に入っただけの頃に、菜奈ちゃんと電話番号の交換はしていたが、電話が掛かって来ることもなければ、掛けることも無かった。

菜奈ちゃんからの電話が嬉しかった。

嬉しさを隠せず、電話に出た私とは裏腹に、菜奈ちゃんの声は焦っていた。と言いより、脅えている様に感じた。

言葉になっていない声を出し、一方的に話し続けた。

菜奈ちゃんがどうして焦っているのかは分からない。
けど、ただ事じゃない事が起こっていることは分かる。

『落ち着いて!』

私の声に菜奈ちゃんはやつと黙った。

『落ち着いて話して...』

『...広香さんが...広香さんが...』

電話の向こうで菜奈ちゃんは泣いているのが分かった。

『広香さんがどうしたの!?!』

広香さんに何かあったの...?

一体何...?

菜奈ちゃんは泣いていて上手く話せない。

私は焦る気持ちを抑え、菜奈ちゃんが落ち着くのを待った。

しばらくし、落ち着いたのか、菜奈ちゃんは事の経緯を話し出した。

紗童のメンバーに私と同年の遥はるかと言う奴がいる。

遥はチームのメンバーから余り好かれていない。

はつきり言えば、嫌われている。

嫌われるには理由がある。

遥は訳も無しに喧嘩を売るのだ。

レディース、学生、誰彼構わない。

別に遥に被害を加えたからでもない。

ただ気に入らないという理由。

でもまあ、喧嘩をするしないは、遥の問題だから好きにすればいい。

しかし、遥の喧嘩は殴り合ったりとかいう喧嘩ではない。

相手を威嚇することが目的なだけだ。

事ある毎に紗童の名前を使ったり、広香さんの名前を使い、相手を威嚇するだけ。

そんな事を繰り返していれば、中にはやはり黙っていない奴もいた。

それが広香さんの耳に入り、遥の尻拭いをすべて広香さんがしてきたのだ。

そんな遥が何故紗童に入ったかというと、副総の翔子さんの中学の時の後輩で、どうしても紗童に入りたいと遥が頼み込んだそうだ。

翔子さんは遥を良い奴だからと言って、その言葉を信じた広香さん

が紗童入りを許可したのだ。

その時の遥は、翔子さんが言った通り、本当に良い奴だったそうだが、しかし、紗童に入り気が大きくなったのか、いつの間にか、今の遥に変わってしまったのだ。

翔子さんは、そんな風が変わってしまった遥を脱退させようと、何度も広香さんに言っていたが、広香さんは脱退を許さなかった。

…いつかは分かってくれるから。

…遥はまだ変わる。

…今見放したら、遥の居場所はなくなる。

そう信じていたのだ。

そんな広香さんの気持ちも知らず、また遥が問題を起こしたのだ。

でも今回は問題が大きすぎた。

遥は彼女持ちの男に手を出したのだ。

彼女持ちと知っての事だった。

それを知った彼女と遥は電話口で口論になった。
悪いのは遥。

しかし、遥は引かず

「自分は紗童のメンバーだ」

「自分に喧嘩を売る事は紗童に喧嘩を売ること。広香さんに喧嘩を

売ることだ」

いつもの様にそう言ったのだ。
そう言えば相手は引き下がる。男は自分の物になる。
…と。

しかし知らぬは遙だった。

遙が手を出した男の彼女は、隣の県で、最強を語るレディースの頭だったのだ。

それを知った遙は、広香さんと翔子さんに泣き付いたのだ。

翔子さんは泣き付く遙をあつさりと見捨てた。

しかし、広香さんは遙を見捨てる事が出来ず、遙の代わりに話しを付けてくると出て行ったのだ。

勿論、翔子さんは止めた。

話し合いに応じる相手ではない。一人で行くのは危険だ…と。

しかし広香さんは、翔子さんの言葉も聞かず出て行き、翔子さんは後を追おうとしたのだか、それから広香さんと連絡が取れなくなってしまったのだ。

それで急遽、今から集会が開かれるという報告の電話だった。

『後、梓ちゃんに翔子さんからの伝言で、この事を達也さんに知らせしてほしいって』

話し終える頃には、菜奈ちゃんの声は落ち着いていた。

私に話しながら、今の状況を葉奈ちゃんなりに把握していたのだらう。

『分かった』

…広香さんはどうなっちゃうのか。

冷静に話を聞いたつもりだが、心中は不安で一杯。

私達は電話を切ると、自分が今出来る事をした。

不安で心臓がドキドキしてくる中、急いで達也さんに電話した。

達也さんに事の事情を説明すると、達也さんは落ち着いて状況を飲み込んだ。

電話を切り、早々に集会に向かった。

こんな自分に驚いた。

放心状態になりそうな程なのに、体は自然と動いている。

私ってこんなに強かった？

……………違う。

私をそうさせたのは広香さんだ。

只、広香さんを思うが一心。

広香さんが心配で…

少しでも広香さんの役に立ちたい。
助けたい。

その思いが私を強くさせた。

私だけじゃない。

菜奈ちゃんも同じ。

そして今、紗童のメンバー全員が同じ思いだ。

集会場所に着くと、既に翔子さんと佳奈さんを囲み、数人のメンバーがいた。

公園にはぞろぞろと人が集まり、直ぐにメンバー全員揃った。

二人を除いて…。

一人は今みんなが無事を願う広香さん。

そして、もう一人は、事の発端を起こした遙だ。

『梓！広香から連絡は？』

私を見るなり翔子さんは言った。

私には連絡が来る可能性はあると思ったのだろう。

私は首を横に振った。

翔子さんは、肩を落とした。

唯一の望みも失ったという感じた。

翔子さんも佳奈さんも連絡が取れない。

そして私も。

この状況で、広香さんが他のメンバーに連絡をする事もないだろう…。

『…達也さんには連絡しました』

翔子さんは、その言葉に、少しの望みが持てたかの様だった。

しかし、どうする事も出来ないまま、時間だけが過ぎていく。

広香さんと連絡もとれず、居場所も分からず、当の遥とも連絡が取れず、ただ、日田すら、待つばかりだ。

メンバー誰一人言葉を出さない。

ただ一人、翔子さんは携帯で色んな人に連絡をしている。

公園には翔子さんの焦る声だけが響いている。

もう何時間が過ぎただろう…。

一向に広香さんからの連絡はない。

その間も翔子さんは、何時間も何時間も電話をかけ続けている。

…誰か広香さんの居場所を知っている人はいないか。私達は何も出来ず、翔子さんの電話の声を聞きながら、じっとしている事しか出来ないでいる。

陽が暮れ始めた頃に集まり、今は日が変わろうとしている。

！

静まり返った公園に私の携帯音が響いた。

翔子さん含め、メンバー全員の視線が私を指した。

電話に出てもよいのか、翔子さんの顔色を伺った。

翔子さんは軽く頷き、私は電話に出た。

電話の相手は達也さんだ。

達也さんから告げられた言葉は余りに衝撃的で、私には荷が重すぎる…。

電話を切り、ただ呆然と立ち尽くす私に、翔子さんは電話の内容を問い質した。

私は、状況を呑み込めず、上手く話せない。

しかし、今達也さんから聞いたことをみんなに伝えなければならぬ。

…これが今私に与えられた役目だから。

『電話は達也さんからで…… 広香さん見つかったって……』

広香さんの居場所が分かり、曇っていたメンバーの顔が明かりを取り戻した。

そんなメンバーを余所に私は続けた。

『…達也さんが駆け付けたときには… 広香さん…港で一人横たわってて……今は病院に運ばれて……まだ意識が戻らない状態だつて』

時々、詰まりそうになる声を押し出し、なんとか最後まで言うことが出来た。

しかし、誰も口を開かない。

…時間が止まってしまったかの様な静寂。

その時、勢い良く翔子さんは立ち上がり、走り出した。

翔子さんが何処へ向かうとしているのか直ぐに分かった。

『駄目だつて!』

私は叫んだ。

広香さんの元へ行かせてはならない。

翔子さんは足を止め、私を睨み付けた。

『どおして!?!』

『誰も来ちゃ駄目だつて… 達也さんが…』

『何でだよ!』

広香さんの居場所を探し、連絡さえとれず何時間も途方に暮れ、やっと居場所が分かったのに、広香さんの元へ行けないと言われ、苛立ちを露わに私にぶつけた。

『広香さんの為だって… 広香さんは今意識もない程ボロボロだから…… プライドの高い広香だから、メンバーにそんな姿を見られたくないだろうって…』

翔子さんが今すぐに広香さんの元へ飛んで行きたい気持ちは分かる。

でも、今は広香さんの気持ちを優先したい。

その気持ちは翔子さんも同じだった。

いや、私以上に広香さんを分かったの事だった。

翔子さんは行く事を止め、メンバーに今日の解散を告げた。広香さんが見つかった以上、こうして集まっても仕方がないから。

そして、誰も広香さんの元へ行かない様にと。

第39話：敷きたり

広香さんが入院して早半月が過ぎ、広香さんの意識は戻り、順調に回復している。

しかし、体に負ったダメージは大きく、前の様に戻るにはまだまだ時間がかかるそうだ。

しかもまだ誰も面会を許されておらず、あの晩一体何が起こったのか詳しくは誰も知らない。

唯一今の情報といえば、次の日の夕刊に載った記事と、たまにある達也さんからの連絡だ。

夕刊に載っていると聞き、見ては見たものの、それはとても簡単なものだった。

《未成年集団リンチ。被害者重傷意識不明…》

探す事も難しい程に、何の情報にもならない小さく短いものだった。達也さんから連絡があるものの、それは広香さんの様態の報告で、あの晩の事は口にしなかった。

『あの日の事は広香自身から言うまで待つてほしい』

そう言われ、聞くことも出来ないでいる。

この事件の発端。遙は、あの晩をもって沙童を脱退となった。

その決断は翔子さん直々に下したものだった。

広香さんのいない今、沙童に遙を庇う人などいなく、寸なりと遙は

沙童を去って行った。

広香さんや翔子さん達の引退式についても、何度も集会が開かれた後、翔子さんの意見でまとまった。

『沙童総長の広香がいない状態で、引退式を行えない』

他のメンバーも賛成し、予定していた引退式はなくなった。

こうして広香さんの事やこれからの沙童の事で頻繁に集会が行われたり、私は達也さんから連絡が来る度に翔子さんに報告をし、板挟み状態になっている事で、茂貴と会う回数が減っている。

毎日一緒にいたのが、今は週二回会う程度。

茂貴も今の広香さんの状態や、沙童の状態も分かっている。だから、会えなくても理解してくれていると思っていた。理解してくれていただろう…。

しかし、茂貴の誘いを断る事が続くと茂貴は苛立ち始めた。しかし、その苛立ちを言葉に出す訳ではないが、私には分かった。

電話の向こうで微かに聞こえる茂貴の溜め息や声のトーンで。

『ごめんね…』

いつも、謝り電話を切った後、言葉とは裏腹な茂貴への思いが募ってくる。

…どうして分かってくれないの？

…出来る限りの時間は作っているのに。

茂貴に対して、自分が冷めていくのを感じる。

しかし、茂貴会々と私は冷めた思いを隠し演じるのだ。
茂貴を好きで好きで堪らなかったときの様に……。
茂貴の思いと、私の思いとの温度差を合わせる様に…。

何故そうしてしまうのかは分からない。

少しある愛情からなのか、情だけなのか……。

茂貴が悲しむ様な厳しい言葉を掛けられない自分がいた。

*

春の風を感じる季節、広香さんは退院し、陽も明るいつきに沙童の緊急集会が開かれた。

メンバーの前に広香さんは立ち、その横には翔子さん。
久々に見る姿にメンバーは湧き上がった。

『みんな、ごめん！』

広香さんは深々と一礼した。

その姿にメンバー全員言葉を失った。

広香さんは頭を上げると話し出した。

『みんなには心配かけて本当にごめん。みんなを巻き込みたくなくて……。でもあれが私の思い付いた総長としての最後の役目だと思っただから』

……最後？

広香さんは翔子さんと顔を見合わせ、翔子さんは頷き返した。

『今日をもつて、私たちは沙童を引退する』

急に告げられた

「引退」

。

広香さんが退院して間もなく、まだ先の事だと思っていたが、広香さんや翔子さんの中では決めていた事なんだと分かった。メンバーの中には、戸惑いを隠せず、泣き出す子もいた。でも、私は広香さんの言葉をしっかりと受け止めた。そして、大半のメンバーも私と同じ様子だ。

何時もよりも長く、走り続けた。

何時もよりも、激しくバイクは音を鳴らした。

集会場に戻ると、広香さんが次の沙童の総長を決めた。淡々と事を運んで行く中、私は広香さんの言葉など耳に入らなかった。

広香さん有つての沙童。

広香さんが居なくなる沙童に何の思い入れもない。

広香さんの引退と共に、私の気持ちから沙童がなくなっていくのを感じた。

そうこうしている間に、あの晩の真相を語られる事なく引退式は終わり、そして何時もの集会の様に翔子さんが解散の合図を出し、それぞれ、場を後にしだした。

……？

もつと名残惜しく残ったりしないの……？帰ろうとする次期総長の菜奈ちゃんを思わず引き止めた。

『…菜奈ちゃん…』

引き止めたものの言葉が詰まった。

「どうしてみんな帰っちゃうの」

ただこれだけの言葉なのに、言えない…。

何時も通り解散していく見慣れた風景なのに、その空気は確かに広香さん達を名残惜しみ、重いものだったから…。

言葉は言わずとも、菜奈ちゃんは私の思いを察してくれた。

『これも沙童の敷きたりなんだよ…。こうして何時も通り別れる…。だから…泣いても駄目…』

そう言う菜奈ちゃんの目は今にも涙が零れ落ちそうな程潤んでいた。誰の目も止まらない所で沢山涙を流すのだろう…。去って行く菜奈ちゃんの背中を眺め、広香さんを振り返る事なく私も場を後にした。

…敷きたりなんて分からない。

しかし、沙童を愛する広香さんを、沙童の有るべき姿で、最後を飾って欲しいから。

広香さんが心置きなく引退出来るのであれば、この敷きたりに従おう…。

第40話： 決別1

沙童の引退式も済み、梓もなんとか進級することが出来、三年になった。

高校生活も最後だ。

みんな進学するか就職するかの分かれ道の時でもあった。

『梓は進路どうするの？』

『しないよそんなの！恵里は？』

『私は進学かなあ』

『そっかあ恵里賢いもんね』

恵里は私や真弓と学校帰りに遊びに行ったり、何よりも彼氏の為に学校さぼったりだけど、ちゃんと勉強はしていた。いつでもサボる私と違い、恵里は考えてサボる。

『あつ真弓』

恵里が真弓の登校に気付いた。

『真弓は進路どうするの？』

恵里の言葉に真弓は即答した。

『私は就職するよ！勉強はもうしたくないし』

真弓の意見に同感だ。

私も勉強はもうしたくない。

そう私と恵里と真弓は仲良く高校生最後の年はスタートした。

その矢先……。

私は朝方茂貴に家に送って貰った為、眠くて今日も学校を休んでいた時、昼に恵里からメールが来た。

《真弓ム力つく！もう友達無理！》

…え？喧嘩？

《何があつたの？》

とりあえず理由を聞いてみた。

すると恵里からの返事は直ぐあつた。

「男に惚けてて進学出来んの？」

恵里が怒った訳は真弓のこの言葉だったらしい。

そんな事、真弓が本気で言う訳はない。冗談で言っただけだって私は分かる。

真弓は私や恵里よりも友達を大切に思ってる子だから…。そして、恵里にはこういう冗談が通じないという事も私は知ってる。

今私が恵里に、真弓は冗談で言っただんだよ。と言っても恵里は私が真弓を庇ったと思うだけだろう。

だから、この場は恵里の話を聞き、話を合わせた。

その日の夜、真弓からも連絡があつた。

真弓は何故恵里が怒ったのか分からず戸惑っていた。

私は恵里が怒った理由を伝え、
「その内恵里の機嫌も直るよ」
と、その場は真弓を慰めた。

実際、このことに関しては時間が解決してくれると思った。
恵里には言わなかったが、恵里が怒る理由はくだらない事だから。
しかし、なかなか時間は二人の仲を解決してくれなかった。
恵里は断固として真弓と口をきこうとしなかった。

学校内で目立つグループに属するが、十人程いたグループの子達は高二の夏に学校を辞め、残ったのは、
私、真弓、恵里だけとなった。
私達三人は、グループ内でも特に仲が良かった。
いつも三人一緒。
しかし、性格はまるつきりバラバラだ。

真弓は友達思いのしつかり者の姉御肌。
友達が困っていれば何を放っておいても助けてくれる。
私が中絶した時もそうだった。
彼氏と居る時間を削って、何日も私と一緒に居てくれた。
精神的に支えてくれた。
しかし、人見知りをする為なかなか友達の幅は広がらず、学校内でもグループ外の子とは話す事もない。

恵里は、彼氏に一途な子。
彼氏がいないと生きていけない位男に依存する。
男と友達を天秤に掛けるまでもない。真弓とは逆に、何があっても第一に男を取る。

しかし、彼氏への一途っ振りは天下一品。

他の男には目も繰れず、自分の限界まで相手を思い続ける。

それに、恵里は人懐っこく、誰とでも話す。

しかし、恵里の中での友達。友達じゃない。という区切りがあるらしい。

私は、その場その場で行動する。

真弓の様に、友達を大切に思う事もその時次第。

私も男を優先するが、恵里の様に、純粹に相手を思い続けることも今はない。

そんなバラバラな私達だけど友達だ。

でも私は、友達なんてこんな物だと思う。

それぞれ性格が違い、趣味も考えも違う。

でも一緒に居て楽しい。落ち着く。その気持ちで友達が成り立つと思っている。

しかし一端歯車が合わなくなると、修復は難しい。

性格が似ていれば、相手の気持ちも分かり、解決策が思い当たったかもしれない。

『…明日も学校来てね』

真弓が縋るように私に言った。

『分かってるよ』

学校に行くと真弓と約束をした。

相変わらず恵里と真弓は口をきかない。

真弓は仲直りをしたいのだけれど、恵里にその気はなく、なかなか二人の気持ち为重ならない。

『梓！お昼行こ！』

恵里は私を誘いに来た。

『うん。真弓も行こ』

一人ポツンと座る真弓を誘った。

『…うん』

真弓は静かに席をたった。

真弓を誘うことに関して恵里は顔色一つ変えない。

恵里は、まるで真弓が見えてないかの様に振る舞うのだ。

端から見れば相変わらず仲良い三人に見えるだろうが、実際は違う。

会話をしているのは、私と恵里。

横に座る真弓は黙り込んでいる。

真弓に話を振ることが出来ない様、恵里は私に向かい話し続ける。

真弓が可哀想と思い、私は毎日学校へ通った。

茂貴との付き合いは相変わらずだけど、それでも、とにかくして家に帰り、寝ずに学校へ行くこともあった。

…明日も来てね…

真弓との約束通り。

『ただいま』

AM・6:00

茂貴に送ってもらい家路に着いた。

前なら茂貴の家に泊まっていた処が、今は

「約束」

の為、週末以外泊まる事はない。

この生活に茂貴はかなり不満そうだが、出席日数が足りず卒業の為に嘘を付き、無理やりにも帰っている。

学校へ行く本当の理由を言えば、きっと茂貴は

「俺より友達か？」

などと責め寄ると思うから、一番無難な嘘を付き続けている。

…まだ学校行くまで時間もあるし寝よ。

『少し寝るから起こして』

母に頼みベッドに寝転がった。

寝付く瞬間も分からない程、眠りについたのは早かった。

『梓。梓！梓！』

母の声だ。

『…んん…』

『梓！真弓ちゃんから電話よ！』

…真弓？

まだ朝も早い筈。

私の唯一の少ない睡眠を邪魔しないでよ！

眠りを妨げられ、機嫌を損ねたまま、眠り覚めぬまま電話に出た。

「はい」

口調で私の機嫌が悪いのが電話越しでも真弓に伝わっただろう。

「…あず…さ…」

電話の向こうで真弓は泣いていた。

「どうしたの？」

言葉とは裏腹に冷たい物言いになった。

いや。朝っぱらから起こされ、睡眠を邪魔された事で、真弓に怒りさえ覚える。

「梓…学校来ないの？」

「え！？」

真弓何言ってるの？

まだ時間じゃないじゃん！

そう思い、元々朝の弱い私は、真弓に掛ける一つ一つの言葉に苛立

ちを隠しきれない。

「もう昼だよ」

真弓の言葉に私は時計に目をやった。

時計の針は確かに午後12時を回った処だった。

まだ少ししか寝ていない感覚で朝だと錯覚していた。

私は寝過ぎ、真弓との約束を破ってしまった。

しかし今の私は、真弓との約束よりも睡魔の方が断然上回っている。

「ごめん。今日は行けないや」

泣いている真弓に素っ気なく言い放った。

「どうして？約束したじゃん学校来るって…。今からでいいから来てよ」

真弓は必死だった。

余程、私が居ない学校生活が辛く寂しいんだろう。

その必死さが、ウザイ。

真弓の気持ちはわかる。

約束を守らなかった私が悪い。

でも1日位いいじゃん！

今まで学校へ行くことが少なかった私が、真弓の為に毎日朝から通ってたんだよ。

茂貴が不機嫌になり私は嫌な思いをしていて、私は茂貴に嘘を付

いてまで真弓の為に毎日家に帰ってるんだよ。

1日位いいじゃん。

今まで思いもしなかった事が次々に浮かんで、真弓をウザイく感じる。

「とりあえず今日は行かないから」

そう言い、私は一方的に電話を切った。
とても冷たい言い方だっただろう…。

その日から真弓からの連絡は途絶えた。

そして、次の日真弓は学校を休んでいた。

次の日も次の日も…。

真弓の姿を見ることはなかった。

しばらくして真弓が学校を辞めた事を担任から知らされた。

…こんな事になるなんて…

真弓はいつも私の側に居てくれた。

大好きだった慎悟と別れ、寂しくて自分が惨めでどうしようもなかった時。

中絶して心が不安定だった時。

気付けば真弓は居てくれた。

支えてくれた。
守ってくれた。

頼るのはいつも私。

真弓は嫌な顔せず私に付き合ってくれた。

そんな真弓が今回初めて私に頼ってきた。なのに、私は真弓をその時の気分だけで、冷たく投げ捨てた。

私は親友をいとも簡単に見捨てたのだ。

《恩を仇で返す》

今の私の姿だ。

『もう少しで卒業なのにね…勿体無い…』

教室の何処からか聞こえてくるヒソヒソ話し。

確かに卒業を目の前にして辞めるのは勿体無い。

だが、卒業までの数ヶ月間が耐えられない程、真弓の精神的ダメージは強かったんだと、今になって分かる。

もしもあの日。

あの電話の日に私が遅刻でも学校へ行っていれば、状況は違ったに違いない。

私が真弓を退学に追い込んだのだ…。

「学校を卒業したら就職する」

と、放課後よく居残りし担任に相談してた真弓。

就職口もなくなってしまった。

私が真弓の人生を変えてしまったんだ。

第41話： 決別2

真弓を追い込んでしまった罪悪感も、時が過ぎるにつれなくなっていた。

いつも三人で居たのに、私と恵里は真弓が居ない違和感よりも、三人が二人になった事で、前にも増して仲良くなった。

そして真弓が居なくなって私の生活は元に戻った。
茂貴中心の生活に…。

そしてまた今日も茂貴の迎えを待っている。
その時、久しぶりの人から電話があつた。

菜奈ちゃんだった。

私が属するレディース沙童の現役の総長だ。

前総長の広香さん達の引退後、私が集会に顔を出したのは引退式の直ぐ後だけだ。

広香さんの居ない沙童に何の思いもない。

辞めようとさえ考えている。

それに、広香さん引退後、沙童を辞めるメンバーが後を絶たず、私が行った時の集会も寂しいものだった。

私もそれから後は、一回も集会に顔を出しておらず、菜奈ちゃんに後ろめたく感じていて、今この菜奈ちゃんからの電話に動揺している。

「…もしもし」

迷った末電話に出た。

「梓ちゃん…」

何故か、菜奈ちゃんの声は沈んでいた。

一方、私は菜奈ちゃんが怒っていない事にホッとした。
「どうしたの？」

何食わぬ顔で聞いた。

「沙童…解散するね…」

《解散》

菜奈ちゃんが落ち込むのも無理はない。

何年と代々続いた沙童を自分の代で解散させるのだから。

「そうなんだ…」

菜奈ちゃんと同様に寂しさを表す反面、本当は冷静だった。
こういう結果になることは分かっていた様な…。

それに自ら引退を口にする前に解散になって気が楽だった。
「どうして？」

一樣、成り行きを聞いてみたが、やはり私の思った通りだった。

広香さん達の引退後、半数近いメンバーが引退を表明し、それでも、老舗のレディース沙童に憧れ新しく入ってくる者も居た。しかし、長続きする者はいなかった。

沙童を鼻に掛け問題を起こす者がいたり、描いていた沙童と違うなど理由は様々だ。

早い話し、菜奈ちゃんが沙童を纏めきれなくなったのだ。

話し終わると私達は挨拶をし電話を切った。

電話を切る時の良くある普通の挨拶。

だが、最後の挨拶でもあった。

私にとって菜奈ちゃんは沙童のメンバーでは一番仲良くしてた子。

でも、プライベートで遊ぶ事もなければ、沙童の事以外で連絡を取り合う仲でもなかった。

だから、沙童がなくなれば自然と私達の関係も終わってしまうのだ。菜奈ちゃんも思いは分らないが、私は、最後の思いで電話を切った。

私が、此処まで敏感に感じるのは、きっと親友だった真弓を失ったばかりだからなのかもしれない。

そして、私の別れはこれで終わりではなかった。

次の別れは、私自ら選んだ別れだ。

『俺ら…終わりにしよう』

『どうして？』

『俺は梓を幸せに出来ない』

『……………』

『……………』

『梓、俺の事好き？』

『…うん』

『こんな俺でもいいの？』

『…うん』

行事事の様に週に一回はこんな話を切り出す茂貴。

私はいいい加減うんざりしてきている。

きつと茂貴は私の微妙な気持ちの変化に気付いての事だろう。

正直、今の私の気持ちは茂貴から離れて行っている。

自分の気持ちも変化に気付いたのは、真弓と恵里が喧嘩し、私が毎日学校へ行き始めてから…。

私は茂貴と会う時間も削ってきた。

真弓の為…。

そう思っていたが、茂貴と会う時間が減るに連れ、私自身気が楽になっていた。

毎日ご飯が食べられて、ゆっくりお風呂に入れて、学校へ行く事で、毎日、恵里や真弓と話しが出る。

そんな当たり前の事が出来なかった私には、当たり前の事が癒やしであり、とても幸せだ。

そして逆に茂貴に対し、今まで当たり前だった事が、当たり前に受け入れられなくなっていたのだ。

そして、欲も出てきた。

世間のカップルの様にデートだってしたい。

イベントの日には、何処かに出掛けたり、何か何時もと違う事をしたい出を残したい。

茂貴に対し今までなかった不満が出てきた。

正直今、茂貴の事を好きではない。

しかし、面と向かって

「好き？」

と聞かれると

「うん」

と返事をしてしまう。

けど、それではいけないと思い、ちゃんと茂貴に気持ちを伝えようと決心し、今日、今から茂貴と会う。

『…梓』

やはり何時もの様に茂貴が話を切り出した。

しかし、私が頭で描いていたシーンとは全く違う事を言い出したのだ。

『俺仕事辞めようと思ってる』

何時も通りのセリフが来ると身構えていた私は少し動揺したが、素直に茂貴の言葉の意味を聞いた。

『どうして?』

『今の仕事じゃ生活がやっていけないから…』

確かに茂貴の生活を見ていたら納得だ。

『他に良い仕事あったの?』

茂貴は直ぐ答えず、私から目を反らし煙草を手を取った。

『俺ヤクザになろうと思ってる』

『……』

私は何も答える事が出来ず、下を向いた。

『梓どう思っ?』

どう？って言われても……

私はゆっくり顔を上げ茂貴を見た。

茂貴は私の方をしっかりと見ていた。

しかし私は何も言えないでいた。

私はまた俯き、沈黙が流れた。

『俺がヤクザになっても付き合って行ける？』

茂貴は質問を変えた。

『…分かんない。でもヤクザは嫌』

私からやっと出た言葉だった。

『それは付き合って行けないって事？』

『その時にならないと分かんない。でも付き合っていく自信はない』

私は少し顔を上げた。

私の言った意味が分からないのか、茂貴は寂しく困った顔をしていた。

私も自分自身何が言いたいのか、突然の事で気持ちの整理が付いていない。

ただ、思ったままの気持ちを口に出したただけだった。
『ヤクザになつたら付き合つて行けないって事？』

これが茂貴なりの理解の仕方だった。

『…うん』

ヤクザだから？

ただ別れたいから？

理由はどれも混ざり合つたものだった。

ヤクザって言われてもピンとこない。

ただ私のイメージでは、決して良いものではなく、世界が全く違うものだと思っている。

かと言って、茂貴がヤクザになる、ならない以前に茂貴とは別れを決めていた。

黙り込む私に茂貴は事の経緯を話し出した。

一週間前、茂貴は梓を送り届けた後、友人の元へ向かった。

その友人とは茂貴の中学時代の悪友だったヨシトだ。

茂貴とヨシトは中学で知り合い、親友となり何でも二人一緒にやってきた。

煙草。喧嘩。シンナー。女。

不良真つしぐらだった。

中学卒業後、茂貴は高校へは行かず、暴走族に入った。

ヨシトは高校へ行ったものの続かず中退。茂貴とは別の暴走族に入った。

同じ道を進み、二人は相変わらず仲良が良かった。

18歳のとき二人は暴走族を引退し、その時初めて二人は別の道を選んだのだ。

茂貴は引退後、それまでしていた仕事一本になった。

ヨシトはヤクザになったのだ。

環境の違う二人の間に初めて出来た距離。

自然と遠縁になっていった。

その遠縁だったヨシトから
「話がある」

と徐々に茂貴に連絡があつたのだ。

『単刀直入に言う。ヤクザにならないか?』

久々に会ったヨシトの言葉だった。

『話しはそれかよ！俺ヤクザは遠慮しとくよ』

すんなり断った茂貴だが、ヨシトは諦めなかった。

『ヤクザになれば、今よりもっと楽な生活が出来るぞ！』

このヨシトの言葉で茂貴の気持ちが揺らいだ。

現に、ヨシトの生活は優雅だった。

全身ブランドで固め、煌びやかなアクセサリーを付け、財布には万札が束になって入っていた。

そんなヨシトの姿を見て、茂貴は自分を馬鹿らしく感じた。
毎日朝から晩まで働いて、でも余る金処か、日々の生活も間々成らない。

それに比べヨシトは、自由気ままに過ごし、お金にも不自由せず、理想の姿に見えた。

『俺の兄弟になろうや』

ヨシトが兄貴分になる事に抵抗はあったが、優雅な生活に変えられる物はなく、茂貴はヤクザになることを決めたのだ。

茂貴は目の前にある煌びやかな世界に目が眩み、ヤクザになる事の迷いなどなかった。

ヤクザになっても梓は付いて来てくれる。

そう確信もあつた。

しかし、梓の返事は茂貴の予想とは全く逆だった。

でもヤクザになるとヨシトに返事をしたし、ヨシトの組の親父で、行く行くは茂貴の親父になる人にも話しは回っている。

もう後には退けない。

ヤクザになるしかない。

俺が成功し、金を持つ様になれば、ヤクザを嫌がっている梓も、もしかしたら戻って来てくれるかもしれない…。

ヤクザが嫌なだけで、俺の事は嫌な訳じゃないんだから…。

『俺はもう決めたんだ…ヤクザになるって。それが梓が嫌なら別れるしかない。でも、俺は何時でも梓を受け入れるから…俺の元に戻りたくなったら戻ってきてほしい』

茂貴は真剣だった。

『…うん』

私はただ茂貴の話を聞き頷いた。

私は結局自分の気持ちを茂貴に伝える事はなかった。

理由はどうであれ、別れという結果は梓が望んだ通りになった。

そして、茂貴は梓の本心など知らず、最後まで梓を信じ、別れという結論を出した。

二人の最後の日となって、二人とも涙を流し、別れた。

梓の涙は情だった。

茂貴との別れには何の未練もない。

茂貴の涙は愛情だった。

愛する梓と別れ、梓も自分を愛してると信じ、お互い愛し合ってるのに別れる悲しさ。

自分が選んだ道のせいで、梓を悲しませてしまったという後悔が入り混じっていた。

お互い気持ちがいずれ違ったままの最後だった。

第42話： 汚い自分

親友だった真弓が居なくなったのに、私は今、寂しさなど感じていない。

そして、何時も一緒だった茂貴にも何の未練もない。
愛情は無くなっても、あれ程一緒だったのだから情ぐらいはあってもいい筈だし、寂しさもあってもいい筈。

それが今の私には一切ない。
それどころか、本心は清々している。

親友だった真弓。
愛した茂貴。

私は二人を利用しただけだったのかもしれない。
実際、結果的にそうなのだ。

真弓は不良っぽく目立つ存在で、真弓と仲良くなった事で、学校での今の私の地位がある。

茂貴は沙童レイリースの前総長である広香さんの知り合いで、彼氏の親友でもあった。

そのお陰で、沙童での地位も築けた。

学校での地位も掴み、沙童が解散した今、二人は必要なくなったのだ。

だから私は簡単に二人を切り捨てられたのだと思う。

私はふとこういう事を考えるが、自分のことが狡く汚く思え、直ぐに頭からかき消してしまふ。

その癖、私は寂しがり屋で常に誰かに側に居て欲しいと思う。

彼氏が居れば、友達なんか居なくてもいいと思い、彼氏が居なければ友達が良いと思う。わがまま野郎だ。

自分でも分かっている。

この自分のわがままさが二人を無くしてしまった原因なんだ。

そして気付けば私の周りには誰も居なくなっていた。

でも、唯一残った人がいた。恵里だ。

恵里もまた友達を作る事が苦手で、真弓が居なくなり、三人から二人になった事で、私達の仲は一段と縮まった。

そして幸いと言えば恵里に悪いが、私が茂貴と別れた後、恵里も長年付き合った彼と別れたのだ。

私達は今まで居た人が居なくなり、一人になったという寂しさがあり、この同じ状況が私と恵里を一段と仲良くさせた。

私と恵里は常に行動を共にした。

二人が別々に居る時が返って不自然な位に。 恵里と一緒に買い物に行ったり。

恵里と一緒に男達と遊んだり。

恵里とは男に関しての感覚が良く似ているから、楽だった。気になる男が居れば、お互いを気にする事なく行けばいい。そんな感覚だ。

ナンパをされて恵里と合図をし、その時次第で付いていき、私が恵里、どちらか気に入れば、そのまま男と抜け出す事もあった。

その内、恵里に彼氏が出来た。

ナンパで知り合い、恵里の一目惚れだった。

名前は翔次しょうじ 私達と同じ年の17歳だ。

高校には行っておらず、鳶職をしていた。

恵里は彼氏が出来ると、一途な子。

二人で、男漁りをする事もなくなり、ナンパに付いて行くこともなくなった。

でも、私も翔次と顔見知りとあり、翔次の友達も交えて良く遊び、彼氏が出来た恵里と私の関係は変わることはなかった。

私から見ても翔次は見た目も格好良く、女が寄ってくる雰囲気を持っていた。

実際かなり遊んでいたみたいだ。

恵里はそんな翔次が心配でならない。

翔次も恵里を好きだが、翔次よりも恵里の思いの方が大きく、恵里は翔次を離さないと必死になっていた。しかし、恋愛にはバランスが大切で、翔次と恵里はそのバランスが合わなくなってきた。

恵里の気持ち为重すぎ、翔次が別れを告げた。

恵里は泣いて縋ったが、これもまた男と女。どちらかが、無理だと言えば付き合いは成り立たない。

恵里は別れを受け入れるしかなかった。

別れても翔次を引きずる恵里の心境は痛い程分かる。

好きな相手を無くし、寂しい筈。

一人で居れば崩れ落ちてしまいそうな筈。

そんな恵里の気持ちを察し、私は出来る限りの時間恵里と過ごした。

そしてまた恵里を追い込む出来事があった。

翔次と別れ2ヶ月が経とうとする時。私達は何時ものファミレスで暇を潰していた。

『…生理が遅れてる』

突然の恵里の告白。

『え？どれ位？』

『もう直ぐ三週間…』

恵里はもう妊娠を確定している様子に見えた。

『三週間だったら間違いかもよ。ただ遅れてるだけかも…』

私は恵里の妊娠を否定した。

否定しなかった。

年頃の私達。

普段からセックスの話はしていた。

恵里が翔次とやるとき、避妊をしていない事も、中で出す事も知っていた。

だから、生理が遅れてると言われて『妊娠』の二文字が直ぐよぎった。

否定をしながらも、私の気持ちは妊娠で一杯だ。

妊娠していないで欲しいという私の願望だった。

だって余りに惨いから…。

妊娠した処で、産めないのは恵里も分かってる筈。

『中絶』

中絶の辛さは実際体験して痛い程分かる。

それに、時期が悪い。

付き合ってる時ならまだしも、別れてから分かるなんて…。

『検査した？』

恵里は泣きそうな顔で首を横に振った。

『なら検査してみようよ』

私達はその足で妊娠検査薬を買いに行った。

ファミレスに戻り、恵里はトイレに向かった。

『梓：居てね』

恵里は頼りなく呟いた。私は恵里に付き添った。

結果は陽性。

もう間違いじゃないかという言葉など出ない。

恵里は席に戻り、持っていたハンドタオルで顔を覆い時々肩を揺らし、声を殺し泣いている。

私は胸が締め付けられる思いで、掛ける言葉も見当たらず、泣く恵里を見つめる事しか出来ない。

妊娠していたのは事実。

恵里が泣いている間にもお腹の子は着実に育っている。
今此处で立ち止まってはられない。

『…翔次の子だね？』

私は話を切り出した。

恵里は俯き顔を隠したまま頷いた。

『恵里はどうしたいの？』

『…産みたい』

私には意外な返事だった。

恵里は進学を考え目標を持って今行動している。

それに私達はまだ17歳。

現実的な恵里から産むなんて言葉が出たのは意外だった。

それに私達はまだ17歳。

現実的な恵里から産むなんて言葉が出たのは意外だった。

それに私達はまだ17歳。

現実的な恵里から産むなんて言葉が出たのは意外だった。

私が妊娠したとき。産むなんて考えた事なかった。

妊娠した事実を受け止める事も真間ならぬ間に事が終わってしまっ

た感じだった。

私に比べ恵里は強かった。

さっきまで泣いていたかと思えば、涙を拭い顔を上げた。

『私産みたい！翔次の子を産みたい！』

恵里の決意は固かった。

『今から翔次に言うね！電話するから梓一緒にいて…』

強い口調ながらもやはり恵里に不安はあった。

私自身十分に味わった辛さだけど、結婚 妊娠なら喜びだろう。

しかし、妊娠を先にしてしまったら喜びよりも不安が大きい。

この先どうなるのか。
増してや高校生。

相手に対し、親に対し、自分に来る反応が怖い。

もし中絶になるのなら、恐怖心さえある。

自分自身が招いた事と言われればそれまでだが、前を向き現実を受け止める恵里を私は凄いと思った。

恵里を応援したくなった。何も出来ないけど、前向きな恵里を見守りたいと思った。

第43話： 恵里

恵里は妊娠が分かり、私の居る前で翔次に電話をした。

翔次の返事は、とりあえず病院で診てもらえという事だった。

次の日、産婦人科に行く恵里に付き添った。

診察が終わり、待合室で待つ私の元へ恵里は戻ってきた。

妊娠は確かだった。

医師に妊娠を告げられた処で、私達に驚きはなかった。

前もって検査薬をしていたし、その時点で私達の中では妊娠は確定だった。

妊娠が間違いかもしれないという期待を持って来た訳ではない。

翔次に証明する為に来たのだ。

『これから先生の話があるの』

恵里はそう言うと、また診察場へと行った。

ゆっくりと話せる場所がいいと、病院の帰りにファミレスへ寄った。

医師と何を話したのか、気になったが恵里が話し出すまで私から

は聞かないでおこうと思った。

『先生にね…』

恵里は話し出した。

『先生が、相手の人と良く相談して早めに結果を出しなさいって』

恵里は冷静だった。

『なら早く翔次と話さないかね』

私も冷静に答えた。

それから恵里は翔次に病院へ行った事を電話で伝え、翔次の元へ向かった。

私は恵里に何も言ってあげなかった。

励ます言葉も、アドバイスも何も言わなかった。

産んだ方がいい…。

中絶した方がいい…。

そんな事は何も思わなかったから。

ただ、どちらにしる恵里が後悔する結果にはなって欲しくない。

その為には、恵里が思うままに進んで欲しいと思った。

心からそう思う。

一方で、私は自分が不思議になった。

友達（真弓）を裏切り、利用した私がいれば、また友達（恵里）を労る私がいる。

どちらが本当の私なのか自分でも不思議な程分らない。

そして恵里から電話があつたのは、夜中の1時だった。

電話の向こうで恵里は泣いていた。

隠すことも、我慢する事もなく、泣いてた。

私は察した。

恵里が望んだ結果にはならなかったんだと…。

『中絶』という言葉が頭をよぎると同時に、私が実際味わった光景が蘇った。

少し落ち着きを戻した恵里は声を引きつりながらも話し出した。

『翔次は…駄目だって…産んじゃいけないって…恵里はこれから大学にだって行くんだろ？将来の夢もある。今は産むときじゃないって…そんな事綺麗言だよ…』

私もそう思う。

翔次の言ってる事は綺麗言。

今恵里は必死で現実と向き合っている。
そんな時に綺麗言で誤魔化さないで欲しい。
自分を守ってる様にしか聞こえない。

…男ってずるい。

翔次より何倍何十倍も恵里は辛いのに。

それから一週間後、恵里は中絶した。

毎日泣いて、傷付いて、翔次を恨んだ事もあった恵里。
しかし、恵里は今でも翔次を好きだと言った。

そして、私はそんな恵里を止める事などしなかった。

翔次の事は最低だと思う。

そう思うのは、翔次が恵里を妊娠させたからでもない。
中絶させたからでもない。

恵里が辛い時に、自分を正当化し、辛さから逃げた翔次が私は嫌だ
ったからだ。

でも恵里の気持ちは分かる。

自分がどんな辛い思いをしても、相手を最低だと思っても相手を嫌
いになれない時もある。

私が慎悟を愛した様に…。

そして慎悟と別れてからも、別れて二年が経った今も、あれ程愛し

た人はいない。

そして何より、好きな人を友達に分かってもらいたい。

私が今翔次の事を軽蔑する様な事を言えば、恵里は傷付き二度と私に翔次の話をしなくなるだろう。

友達に彼氏の話をしたり、好きな人の相談をしたり。

それって凄く必要な事だと思うから。

『好きな人を我慢しなくていいよ。好きなら向かって行けばいい。良くて悪くても自分が選んだ道じゃん！後悔はないと思うよ』

私は恵里にそう告げた。

そして、自分自身にも…。

第44話：蘇る恋

中絶後も恵里は変わらず翔次を想い続け、隠すこともなくその想いを翔次に伝え続けている。

しかし未だ恵里の想いは届かない。

翔次からしたら恵里は都合の良い女だ。

翔次に『会おう』と言われれば、恵里は会いたいのだから勿論会いにいくが、付き合っていた頃とはまるで違った。

会えば、翔次は恵里の体を求め、恵里は好きだから翔次を受け入れる。

翔次の欲情が満たされれば、恵里の存在は必要とされなくなる。

誰が見ても恵里が利用されているのは明らかだった。

《惚れた方が負け。》

恵里を見てるとよく分かった。

そして、恵里自身も分かっていた。

翔次が他の女とも会っている事も。

恵里は全て知った上だった。

好きだから…。

体を求めるだけでもいい。

翔次に愛はなくても、体を重ねてる間は幸せだから。

体だけの関係でも繋がっていれば、いつかは戻ってくるかもしれない。

みんなは恵里を『遊ばれてるのに』『分かんないのかなあ？バカじゃん』とか言う。

でも恵里はちゃんと考えて、後悔ない恋愛をしてる。

恵里の行動でどういう結果になるのかは分からないけど、好きな人に夢中で向かって行く恵里を私は素敵だと思う。

そして季節も変わり、私達の高校生活も終わりに近づいた。

恵里は希望大学への入学が決まった。

私は進学も就職もする気はないから呑気なもの。

恵里の様に夢中になれる人は現れないが、男は尽きる事なくいる。

その場の雰囲気や寂しさを紛らわす為に付き合ったり、抱かれたり。

誰かと居れば寂しさは感じないから。

けど、夜になると寂しさや虚しさや不安が溢れてくる。

私は夜が嫌い。

昼間の雑音も消え、沈と静まり返った部屋に一人していると、自分が世間から取り残されてる様な気が押し寄せる。

今の私は何も満たされていない。

心底好きな相手でもない人と付き合っている、一人になれば寂しい。

セックスで甘い一時を送っても最後は虚しい。

私は贅沢なのかな？

そんな私に恵里は決まって言う。

『彼氏が居て想ってくれる人が居て、梓は幸せだよ。私なんて一人追い駆けてるだけなんだよ』

先が見えず、追いかけている恵里からしたらそう思っらしい。

好きなのか分からない相手とただ時間を潰す様に過ごす私からしたら、自分をさらけ出し突き進む恵里が羨ましい。

そんな事を考えていると、決まって思い出すのが慎悟だった。

あの時の私は、慎悟が全てだった。
何の理屈も考えず、慎悟自体を愛してた。

慎悟と別れ、何人もの男と出会ったが、勿論慎悟の様な男は居なかった。

慎悟を愛した様に愛せる男も居なかった。

今の恵里を見てると、私には後悔ばかり。

あの時、どうしてもつと素直になれなかったのか…。

自分の気持ちをくだらない維持の為に抑え付けたのか…。

あの時…。あの時…。

思い出せば出す程、慎悟が蘇りあの時に戻りたくなる。

慎悟に会いたくなる。

別れてからも、慎悟は私の中にずっと在り続けている。

常に男を比べる基準は慎悟だった。

慎悟に勝る男は居なかった。

慎悟と歩いた街を歩けば、会えるんじゃないかと期待していた。

慎悟を探す自分がいた。

私は気付かない振りをしていただけだった。本当は知ってる。

私はまだ慎悟を想っている。

第45話： 下らないプライド

胸の中の奥の奥に仕舞っておいた慎悟を出してきてきしまい、慎悟の事ばかりを考える様になった。

いつも私を守ってくれた慎悟。

慎悟の大きな暖かい手。

無邪気な笑顔。

思い出すのは楽しかった日々ばかり。

私の中で慎悟は膨らみ、私はあの頃に完全に戻っていた。

あの頃と同じ位に今も慎悟を愛してる。

あの頃の様に毎日慎悟の事を考えている。

ただあの頃と違うのは、慎悟がいない事。

私は止まらない気持ちを電話で恵里に伝えた。

『梓何してんの!?!』

私の気持ちを知るなり恵里は強く答えた。

『何って...』

『好きなら迷ってないでいかなきゃ!』

私は初めからこう言って欲しくて恵里に電話したのだと気付いた。

誰かに背中を押して欲しくて…。

恵里の後押しで私はいける。

慎悟に向かう気持ちの覚悟はできた。

そして次の段階へ進もうとした時気付いた。

『私… 慎悟の連絡先知らない…』

あの頃からだった。

私が気持ちの整理を付ける時、まず初めに必ず相手の連絡先を消去する癖は。

『それなら私が調べてあげる！元彼なら慎悟さんの連絡先知ってるかも』

そうだ。恵里の元彼は慎悟と同じ高校で知り合いだったんだ。

恵里にお願いし、私は恵里からの連絡を待った。

恵里は仕事が早い。

30分と経たない間に慎悟の電話番号は私の元へきた。

『頑張つてね梓。また報告してよね』

恵里はそう言うと早々に電話を切った。

恵里と電話を切り、携帯を持ったまま色々考えた。

何から話そうか。

慎悟の対応はどんな感じか。

色々考えたが、私の中で慎悟が私を拒むことはないと思っている。

恵里には自信なさげに言ったが、本当の処慎悟を振り向かせる自信があった。

確実にあの頃よりも可愛くなってるだろうし、あの頃よりは大人になってる。

あの頃より男を知ったし、どうすれば自分を可愛く魅せれるのかも、それなりに分かってるつもり。

決心し通話ボタンを押した。

プルルル…プルルル…

呼び出し音が鳴った途端、あれ程考えた頭の中は真っ白になった。

プルルル…プルルル…

あれ？

長く続いた呼び出し音は留守番サービスに変わった。

慎悟は電話に出なかった。

電話を切り、携帯を置いた瞬間。夢から現実に覚めた感覚だった。

慎悟と会える。

あの頃のように慎悟と一緒にいたい。

など、勝手に想像を膨らませ一人舞い上がっていただけだった。

実際には、今慎悟がどういう生活をしているのか、彼女はいるのか、何も知らない。

そう冷めながらも、私はショックなど感じていない。

今は電話に出れなかったんだ。後でかけ直してくれる筈。など、自分の都合の言いように解釈している。

私が慎悟を思い出す様に慎悟も私を思ってくれているに違いない。

慎悟なら私の番号だって覚えてる筈。

きっと慎悟からの連絡はある。

自分でも嫌になる位プラス思考だ。

しかし私には自信があった。

それは何故かというと、今まで私の誘いを断る男がいなかったから。

狙った獲物は必ず墮ちる。

それが私をここまで自信過剰にしたのだ。

しかし、慎悟から連絡が来る事はなかった。

そして私は二度と連絡しなかった。

恵里は、『連絡しなよ』って言うけど、自分が傷付くのが怖く連絡出来なかった。

かけ直して来ないと言う事は、私を拒んだから…。

私はそう解釈した。

そして理由はもう一つ。

しつこい女だと慎悟に嫌われたくない。

追いかける女より追われる女がいい。

又しても私の下らないプライドが顔を出し、下らないプライドを捨てる事が出来なかった。

そしてまた、意地やプライドで慎悟を胸の奥へ仕舞い込んだ。

第46話：卒業

等々卒業の日が来た。

当日卒業式が行われる体育館へみんなが向かう中、私は足を止め校舎を眺めた。

今の私が居るのは全てがここからスタートしたんだ。

今まで校舎など眺めた事もなかったけど、今日で最後だと思うと校舎を通じて色々な出来事が蘇る。

嫌で嫌で仕方が無かったこの学校が今の私を作り上げた原点だった。

入学当初、少女漫画の様な学校生活や恋愛を描いてたつけ。

地味な私が、綺麗になりたい。可愛く思われない。と外見に意識したのも此処からだった。

少女漫画とはかけ離れたが、彼氏も出来、初体験もした。

辛い事もあったけど、此処（学校）へこれば仲間がいた。振り返ればそれ程嫌な所では無かった様に思う。

『梓！』

恵里に呼ばれ我に帰えり、恵里と一緒に体育館へ向かった。

式も無事終わり、教室では友との別れを惜しみ、カメラのフラッシュの嵐だった。

卒業アルバムの最初のページに友達からの寄せ書きを集めたり、みんなそれぞれだ。

『梓！私の書いて』

恵里が卒業アルバムを開き、私に手渡した。

『私にも書いて』

私も同じ様に渡した。

私は恵里のアルバムに。

恵里は私のアルバムにメッセージを書いた。

ふと隣で同じ様に寄せ書きをしている子のアルバムを覗けば、そこには何十人からのメッセージがびっしり書いてあった。

私のアルバムには恵里からのメッセージだけ。

私はそれで良かった。
んん。それが良い。

私と恵里は自分達以外の子のメッセージは書かせなかった。

このアルバムは私の最高の宝物だ。

私は家事手伝いという名目で、学校という縛りがなくなり今まで以上に遊び歩いた。

真面目に高校生活を過ごした人から見れば有り得ないだろうが、私なりに学校は窮屈だった。

ともに、歯止めでもあった。

学校へ通う事がなくなった今、24時間が私の時間。

家に帰る必要は私の中でなくなった。

恵里は大学生活がスタートし、高校を卒業しても生活は何ら変わることはなかった。

変わった事といえば、恵里のスカートがミニから膝丈になり、明るかった髪が暗くなり、外見は進化した。

私はそれが不安だった。

私達は今までとは違い環境が全く違う。

この事で、恵里との間に距離が出来るんじゃないか…。

今までがそうだったから。

今まで、その時その時で私の周りの人が変わってきた。

幾ら仲良くしていて、親友と思っていたても環境の変化で簡単に終わってしまう。

恵里ともそうなるんじゃないか…。

私は不安の一方で、傷付くのが怖く恵里との終わりを先に覚悟していた。

しかし、恵里は変わらず私を必要としてくれた。

学校がある為、前程時間が合う訳にはいかないが、私達の仲は変わらなかった。

環境が違っても変わらず友達で居れる相手（恵里）を私は本当の親友だと確信した。

第47話： 再び

私は高校生活でかなり人の輪が広がったが、友達と呼べる人は恵里だけだ。

それに比べ相変わらず私から男が絶える事はなかった。
知り合いの紹介。ナンパ。

相手は誰でも良かった。

自分を好きでいてくれる人なら。

付き合って別れて、また他の人と付き合い…。

一人の人と1ヶ月もてばいい方だ。

そんな私にまた新たな出会いがきた。

聡士。^{さとし}私より二つ上で二十歳のフリーターだ。

聡士は私が今まで出会った男とは違ったタイプだった。

今までは見たからにヤンキータイプだったが、聡士はB系スタイルのお洒落な人だ。

出会いは簡単。

恵里と街をぶらついていた時に、恵里の元彼と会い、その時居合わせたのが聡士だった。

その場の流れでアドレスを交換し、二人で会う事になり、会ったその日に告られ付き合う事になった。

私には良くある展開だ。

聡士は私と同じで仕事をしておらず、生活パターンは良く似ていた。

夕方頃目が覚め、夜になると友達と集合する。

私の場合相手は恵里だけだが、聡士はいつも5、6人でたむろっている。

恵里は学生だから次の日の事も考え遊ぶ時間も限られている。

聡士の友達も仕事をしている子がいる為時間は限られる。

しかし、夕方起きる私達は寝れず朝までDVDを見たりで、結局寝付くのは朝だった。

私達は付き合ってから時間を有効に使う事が出来た。

夜は恵里と会い、遊び終わった夜中聡士の家へと向かった。

聡士も同じだった。

今まで一人で暇を潰していた時間を一緒に過ごす事で、友達との付き合いも彼氏彼女の付き合いも上手く保てた。

聡士の事が好きだと聞かれれば好きだと答えるが、聡士に対し燃え上がる様な気持ちはない。

ただ聡士と一緒にいて気が楽だった。

変に干渉しないし、けれど私に十分愛を感じさせてくれるから。

私は知らない間に他の男との連絡を遮っていた。

それは聡士を第一に考えているからなのか…。

良く分からないが、今は誰よりも聡士と居る事が楽しい。

聡士と付き合い2週間が経った時、いつもの様に恵里と別れた後、聡士の家へと向かった。

聡士の両親は聡士が中学の時に離婚し、それから聡士は父とこの家に住んでいる。

私の父親もそうだが、聡士の父も聡士に干渉せず、私が夜中に訪れても何も言わない。

それ処か、姿すら見たことがない。

時間が遅すぎる事もあるだろうが…。

『おっ』

部屋はテレビの明かりのみで、聡士はベットに横になった状態で私に目をくれた。

私はソファ―に座った。

そこで見覚えのある物を目にした。

そして、その物は昨日まではなかった物だった。

『何これ』

物を手に取り、聡士に聞いた。

聞かなくてもこれが何なのかは分かっていた。

『知らない？』

聡士は何の疑いもなく答えた。

『知ってるよ』

聡士は私と同じ種類の人間だと直感し、私は正直に答えた。

何をする物なのか、何の為にあるのか。

私がかつて使用した物だから。

私が手に持った物はパイプだった。

世間で麻薬だと言われている葉を詰めて吸う物だ。

『やってるの？』

聡士からどういふ答えが返ってくるかは分かる。

やっけていても聡士を軽蔑したりする気持ちはなかった。

『たまにね』

軽蔑どころか、驚きもなかった。

聡士が連んでいる仲間がやっている事は恵里から聞いていたし、その中に居て聡士がやっていない方が不思議だと思っていた。

『梓はこういう事した事は？』

『あるよ』

聡士が一切薬物に手を出さない人間だとしたら、きっと私は『やっていない』と嘘をついただろう。

聡士も驚いた様子はなかった。

私の返事を聞いて聡士は、ベットから体を起こし私の隣に腰掛けた。

私の手からパイプを取り、何も言わず葉っぱを詰め出し煙草で一服する様に吸い始めた。

深く煙を吐き出した後、何も言わずパイプを私に差し出した。

私は戸惑う事なくパイプを受け取り、聡士の唾液が少し付いた吸い口に口を付け吸い込んだ。

二度と薬物には手を出さないと決めていたけど、葉っぱに対して

は余り抵抗がなかった。

私と聡士は微笑み見つめ合い、抱き合った。

後から聞いた話しだと、聡士は私の様な女は初めてだとか。

聡士が薬物をして軽蔑しない女。

薬物をする女。

好きな女に隠す事なく、共有出来る事が嬉しいと聡士は言った。

それから毎日ではないが、聡士が葉っぱを吸う時は、断ることなく共に私も吸った。

それは徐々に時と場所を選ばなくなっていった。

昼間でも車の中で吸い、夜は外で吸う時もあった。

葉っぱは他の物に比べ自分の意識がまだある為、恐怖心はなかった。

しかし、葉っぱを吸う度に高哉を思い出した。

孤独に耐えられず、お互い気持ちを寄せ合った高哉。

薬物で寂しさを紛らわした私達。

そして私が初めて薬物に手を出した時に居た高哉。

自分を止められなくなった高哉。止めることが出来なかった私。

シャブに狂った最後の高哉の姿が頭から離れない。

あの日から高哉とは会っていない。
連絡もしていないし来ることもない。

あれから高哉は何をしているのか。

高哉はどうなったのか。

私は薬物に手を出す度に今の高哉が気になり始めた。

高哉を心配してか…。

シャブに狂った人間がどうなったかの好奇心からか…。

今の高哉が知りたい。

第48話： 衝撃の真実

私は気の向くままに一軒の家の前に立っていた。
毎日毎日我が家に帰る様に通い詰めた高哉の家。

二年が経った今でもその道のりははっきりと覚えている。

此処まで何も考えず来たものの私は戸惑った。
インターフォンを押し、今更玄関から入ったらいいのか…。
昔の様に高哉の部屋へずかずかと上がっていいのか…。

迷った挙げ句、さすがに玄関からは避けた。

裏へと周り高哉の部屋の方へと向かった。

この家には高哉と高哉の義母の二人だけ。
義母に出会さない様願った。

しかし家に人の気配は感じず、慣れ親しんだ高哉の部屋の前に着いた。

高哉が留守の事は分かった。
でも私は窓に手を当てた。

…この窓を玄関の様に出入りしていたなあ。

あの頃を思い出し、窓を開けた。鍵は掛かっておらず、少し躊躇った後部屋に足を踏み入れた。

昔は誰が居なくても平気で入った部屋に、初めて緊張感があつた。

それ程時は過ぎ、私と高哉の距離が出来、お互い変わってしまった証拠だ。

誰も居ない部屋に座り込んだ。

ベット、テレビ、吸い殻の溜まった灰皿。

変わっていない部屋の構図に私はあの頃にタイムスリップした。

高哉はいつもこのベットに寝転がって漫画を読んでいた。

決してお世辞でも綺麗とは言えないこの床に、遊び疲れ知らない間に寝てしまっていた私。

そして最後に見た高哉は此处に座っていた。

楽しい思い出も必ず最後の高哉が出てくる。

私はここに来た意味を思い出し、立ち上がり押し入れへと向かった。

高哉は必ずこの押し入れに締まっていた。

ラベルを破がしたベットボトルにシンナーを入れ、何本と並べてあ

った。

葉っぱもパイプも…
注射器もシャブも…

この中に無ければ、高哉は今新しい道を見つけた筈。

あれば、高哉はまだあの頃に居る。

全てが無くなっていて欲しい。

私は押し入れを開けた。

ゆっくり目を開き、押し入れの中を見て私はほっとし、腰を抜かしその場に座り込んだ。

全てがなかった。

あるのは山済みにされた本。アルバム。

私は今日ここに来て良かった。

高哉を最後にみたあの日からずっと胸にあったつかえがスツと溶けていくのを感じた。

私は立ち上がり、高哉にサヨナラをした。

二度と会うことの無い高哉に…。

私と高哉が過ごした時は、お互い支え合つと言いながらただ薬物に溺れた時だった。

高哉とはそう言う出会いで別れ。

今になって会った処で、お互い思い出は薬物。

このまま静かな別れがいいんだ。

現在、聡士と葉っぱを吸ってる私が何だろうと笑みが零れた。
窓から出ようとしたとき車のエンジン音がこの家の前で止まった。

私は体が固まってしまった。

だつて留守中の他人の家に勝手に入り込んでいるんだから。

そして足音がこの部屋に近付いて来る。

私の心臓はバクバクと音が外まで聞こえそうだ。

でも、高哉が帰ってきたのかも…。

それなら私がここに居ても許してくれるよね。

等々外の人物がこの窓を開けた。

『……………』

私は目の前に居る人物に驚いた。

窓を開けたのは、広香さんだった。

『…梓？』

広香さんも驚きを隠せない。

『…広香さん』

『どうしたの？こんな所で』

広香さんは気を取り直し、部屋に上がった。

私も帰る足を戻し、広香さんとテーブルを挟み向かい合い座った。

煙草をくわえると広香さんは部屋を見渡した。

『梓元気してた？』

『…はい』

広香さんとは引退以来連絡が減り、沙童解散と茂貴との別れ以来、少なかった連絡は途絶えていた。

『茂ちゃんとも別れたんでしょ？』

『はい。…達也さんから？』

『うん。大体の話しは聞いた。茂ちゃんも頑張ってるよ』

『…そうですか』

何事にも真っ直ぐで、偽りのない広香さんに、茂貴との別れ時の偽りだらけの自分を見透かされない様に必死だった。

広香さんの前では、高哉を大切に思った梓。

身を削ってでも茂貴に付いて行く、あの頃の梓でいたかった。

『ところで此处で何してたの？』

『あ…あの…高哉を思い出して…』

『心配してくれてたんだ』

広香さんの優しい綺麗な笑顔は健在だ。
この笑顔を向けられると今でも嬉しい。

『実は…ずっと気になって…あの日の高哉がずっと頭から離れなくて…高哉を一人置き去りにして…あれから高哉がどうなったのか気になってたけど、来る勇気がなくて…』

誰にも言えなかった思いを広香さんに話していると、涙が込み上げて来た。

広香さんは黙って私の話を聞いてくれている。

『でもっ 今日此処に来て良かった。高哉は今何しているんですか？』

私は涙を拭った。

『梓知らないの？』

『……………』

広香さんの表情が変わった。

何だろう…。

でも広香さんの顔を見れば良い事でないのは分かる。

『高哉ね。半年前に死んだよ』

『はっ……………』

喉が詰まった様に言葉が出ない。

それ処か理解出来ない。

高哉が死んだ？

何で？何でなの？何があつたの？

『伝えようとしたけど、梓に連絡取れなくて』

私は携帯を変えていた事を後悔した。

愕然とする私を余所に広香さんは話しを続けた。

『梓が高哉を見た最後の日からも高哉はシャブを止められなかったん

だ……。出来る限りは高哉の所に来てたけど、仕事や沙童の事で高哉を監視することは限られてたんだ』

広香さんは一呼吸おき、煙草に火をつけた。

『シャブ漬けになった人間は酷いよ……醜い。知性や理性全て失うんだよな。高哉は幻覚に追われ道路に飛び出したんだ。車に跳ねられ即死だった』

『うつ……うつ』

いつも簡単に出る涙がこんな時に出ない。

狂ってしまいそうな自分を止めることで一杯だ。

『だからもう高哉を想うのは止めな！高哉に拘り、自分を責めるのはよしな！梓はあれで正解だったよ。あのまま高哉と居たら梓も高哉と同じ目に合ってた。高哉自身が招いた結果だよ』

広香さんの言うことはいつも正しい。

私も広香さんの様に割り切れたらいいといつも思わされる。

『梓は今何してるの？』

『……』

唐突な問いに気持ちの切り替えが出来ない。

『まあ何しててもいいか!』

広香さんは無理に明るく振る舞っている。

『でもね梓。何をしてても自分の想いを大切にするんだよ!自分の気持ちを曲げちゃいけない。見失っちゃいけない。負けちゃいけないよ』

広香さんは達也さんと来月結婚するらしい。

そしてお腹の中には今小さな命が宿ってる。

そして高哉も義母も居なくなったこの家に住むそうだ。

またお邪魔しますと広香さんに別れを告げ、家を後にした。

第49話：就職

高哉の死を知って愕然となったが、私の生活は何ら変わる事はなかった。

聡士が葉っぱをしようと言えば吸い、昼間は寝ていて、夜になれば出掛け、夜中は聡士と過ごした。

初めは自由な時間を手に入れ、一日中遊び満喫した生活を送れ満足していたが、次第に只ダラダラした生活になり、自覚も出てきた。

『私そろそろ働こうかな』

ふと聡士に言ってみた。

今の生活に嫌気が差したこともあるが、自由な時間と自由なお金とが釣り合わなくなってきたからだ。

『そうだな…俺もそろそろ職探さないとな』

その日から私達の職探しが始まった。

求人誌を持ち帰り、二人黙々と読んでいた。
でも、探すのは私の仕事ばかり…。
聡士はまだ働く気はないみたいだ。

『梓…』

『…ん？』

『こんなのどう？コンビニのアルバイト』

『んゝ…時給安いから嫌』

『じゃあ、ファミレスのウエイトレス』

『んゝ時間的に無理』

『シヨップ店員とかは？』

『嫌』

こんな感じで何も決まらない。

働く気はあるもののどの職にも魅力を感じず、踏み出せない。

『あつ！聡士これなんかどう思う？時給3千円で20時出勤だつて！』

『梓…それってお水じゃん』

『駄目かなあ…』

『俺的に嫌。やって欲しくない』

『…そう』

聡士には諦めて見せたが、私の中でお水の仕事に決まった。

全てが理想的だった。

時給の良さ。

夜型の生活の私にぴったりの時間帯。

そして、何より華がある。

しかし、聡士が反対している事もあり、積極的に前に進めない。
それに、沢山ありすぎて何処の店にするかも決まらない。

そこで私のずる賢い頭が働き出した。

プルルル…プルルル…

私はある人に電話した。

私が高校時代に行き交った交友の二つ上の先輩。

「はあゝい」

先輩は明るく電話に出た。

「先輩。私仕事探しているんですけど、なかなか良いのがなくて…。
何処が良いところ知らないですか？」

先輩はお水の仕事をしており、私はこうして先輩の紹介でお水の
世界へと飛び込むことになった。

『私今日面接行ってくるね』

そう聡士に告げた。

『何処の？』

『居酒屋』

聡士に嘘を付いた。

正直に言えば、許して貰えない。でもお水の世界に魅力を感じてる。私も引けない。

『そつが良かったじゃん』

聡士は疑う事なく見送ってくれた。

面接なんて名ばかり。

有って無いようなものだった。

聡士も私の働き先が決まった事を喜んでくれた。

こうして3ヶ月という短く長い私のニート生活が幕を閉じた。

第50話： スタート

私。梓18歳。

就職先も決まり、キャバ嬢としての新生活がスタートしました。

私の考えは此処でも甘く、キャバ嬢の仕事も楽ではなかった。

初対面の男性への接客。

半端無い気遣い。

どれも今まで無かった事だけど、私は苦痛よりもやりがいを感じた。

今までも向上してきた自分を綺麗にする事。

自分を綺麗に見せる事。

男性を振り向かす喜び。

お金を儲けながら、この意識を高めていく事が出来るのは、お水の他には検討もつかない。

しかしその裏には、人間の汚い部分が行き交いしていた。

誰もがNO・1を目指し争う。

全ては金と女のプライドだ。

私はそんな世界も好き。

上辺だけの付き合いで、心底が知れない付き合いよりも、この世界では言わずとも誰もが持つ貪欲さ丸見えの付き合いの方が楽だ。

そして、私もNO・1を目指したい一人だ。

いや、必ずなる。

私は見る見る夜の世界の虜になった。

そして目標を見つけた私は一人の男に頼らなくても満たされていた。

聡士と会う時間は減り、連絡さえも遮り、聡士からの連絡は途絶えた。

後悔はない。

自ら選んだ道だから。

今の私に聡士は必要ない。

メリットのない男は要らない。

1ヶ月としない内に、徐々に固定客が付きだした。

男性客との気持ちの駆け引きが楽しくてしょうがなかった。

私はこの時はっきりと分かった。

聡士との別れは正解だった。

彼氏が居れば、今の私の向上心はなかっただろう。

第51話： 仕事と恋

水商売を始め半年が過ぎた頃には、見事に私の金銭感覚は変わっていた。

今まで欲しくても戸惑い、買えなかった洋服も何の躊躇もなく買える。

憧れだったブランド品も客が持って来てくれる。

それに男は腐る程毎日見てるし、ウザイ程言い寄ってくる。とは言っても、この場をちゃんと理解してる。

本気で私を口説こうとしているのか…。
場の雰囲気と言っているのか…。

毎日何十人という男と会話をしていれば、それぐらいは分かる。

念願の一人暮らしも始め、私は今欲しかった物を全て手に入れた。

しかし仕事が終われば、華やかな夜の世界から一転、勿論誰も居ない部屋に帰るのだ。

初めは寂しさなんて感じなかったのに、徐々に仕事に慣れて行くに連れ、人恋しくなってきた。

仕事の疲れを癒やして欲しい…。

営業じゃなく、男性と電話したい。

誰かに

「お帰り」

「お疲れ」

と声を掛けて欲しい。

お水の世界に飛び込み半年。

男を切らした事のない私が半年間一人で過ごしてきた。

勿論セックスもしていない。

言葉じゃなく、キスで愛を感じたり。

手を触れ合い守られてると感じたり。

セックスをして、愛情を確かめ合い存在を感じたり。

『彼氏欲しいなあ』

ふと恵里に漏らした。

『客で良い人いないの？私からしたら出会いが沢山って感じだけど』

今もまだ恵里は翔次を思い続けている。

でも翔次を見れば恵里と寄りを戻す事がないのは明白だ。

恵里も分かつて、翔次を忘れ様とコンパに行き出会いを求めるが、なかなか良い相手が現れない。

それに、偶に翔次に誘われると会いたいものだから遂行つてしまい、誘われるが俣セックスをして、この温もりを離したくないと翔次を吹っ切れないでいる。

恵里は、常に男性と関わる事が仕事の私が羨ましいとさえ言う。

しかし、私は違う。

恵里が言うような、仕事で出会いを求めてはいない。

仕事には私なりのプライドというか、ポリシーを持っている。

客は客。

彼氏は彼氏。

客に惚れたら負け。

中には客と付き合ったり、客と寝たりする子もいるが、私の中では御法度だ。

客と付き合えば、その客が店に来る事はなくなるだろう。それにお金を出してまで自分の彼女を指名しないだろう。

付き合った時点で客が一人減ってしまう。

寝てしまえば、客は最終目的を果たし満足してしまい、それも客を減らす事となる。

客はどうしたら自分の女になるか、どうにかして墜とそうと店に足を運び女の子を指名する。

墜ちそうで墜ちない。

手が届きそうで届かない。

そう言う少し高嶺の花で居る事が、客を惹きつける魅力だと私は思っている。

だから私が客と付き合うなんて頓でもない。

そんな時、昔の男友達から連絡が有った。

私が男を取っ替え引っ替えしている時に付き合った男の一人だ。

『梓久しぶりい』

『久しぶり』

『最近何してんの？』

『今はキャバ嬢やってる』

『まじいつ！？』

相変わらず軽いテンション。
昔からこの軽さは嫌だった。

『梓今彼氏居るの?』

『居ないよお。誰か紹介して』

『良かった。俺友達に女紹介してって言われてて。丁度良かったよ』

『え?』

社交辞令で言っただけだが、本当に紹介の話になっちゃった…。

そんな事で昔の男に男を紹介してもらった事になり、仕事が休みの今日会うことになった。

待ち合わせの居酒屋には既に居た。

『どうも!』

男は隣に座る様子を指した。

男の名は中条浩一。

同じ年だ。

背は低めだが、濃い顔の男前だ。

『今晚は』

私は席に座った。

こんな処で私の仕事が役に立つとは思わなかった。

仕事柄、初対面の人と話す事に戸惑いも感じず、相手に話しを合わせ、店なら普通だろうが外に出れば此だけで好印象を与えるだろう。

同じ年と言う事もあり会話は弾み私も心地良くお酒が喉を通った。

『そろそろ出るか？』

『そうだね』

時計の針は11時を指そうとしていた。

夜型の私としては、もう帰るのかと残念だが、初対面で帰りたくないと言うのは軽く見られると思い、浩一に従った。

『まだ時間大丈夫？』

『うん』

待つてましたと言いたい気持ちを抑え、敢えて冷静に答えた。

『俺見たいDVDあるんだけど、一緒に見てくれない？』

『良いよ』

即答だった。

店を出た後ほろ酔いの私達は一人暮らしの浩一のアパートへ向かった。

1ルームの片付けられた…というか余計な物がない部屋だ。

見えている物は、テレビにベッド。それに灰皿と立て鏡。

全て地べたに置かれていた。

浩一はベッドに座りテレビを付けた。

取り敢えず私は入り口に近いフローリングに座った。

浩一は見たいと言っていたDVDを付け、私達はテレビに夢中になり会話はなかった。

『梓ちゃん…』

『ん？』

思った以上にテレビに夢中になり話し掛ける浩一に目をやる事が出来ない。

『…こっちおいで』

その言葉にやっと我に帰った。

『…うん』

そつと浩一の隣に座った。
嫌じゃないから。

『俺と付き合って』

空気の様に自然で、言葉の意味を理解するまでに間が掛かった。
その言葉に恥ずかしささえ覚えた。

男性に恥じらいを感じたのは何年振りだろう。

この感じ新鮮だ。

第52話： 仕事と恋（終）

浩一のストレートな告白を受け入れた。

私が半年間彼氏を作らなかったのには訳があった。

周りのお水の子達を見ていると、彼氏がお水の仕事を嫌がっているとか、彼氏には内緒にしているとかが大半だ。

今の私はこの仕事を第一に考えたい。

辞めるなんて言う人は、最初から論外だ。
増して内緒でするには限界がある。
内緒でするくらいなら私はお水を辞める。

私の仕事に対する情熱は自分でも驚く程だ。

浩一は私の仕事も分かって付き合っつてと言っんだから、仕事への支障は無い筈。

これが浩一の告白を受けた理由だ。

『マジでいいの？』

浩一は私がOKした事を驚き喜んだ。

『うん！』

私も嬉しい。

浩一の事はこれから知って行けばいいし、何より彼氏が出来た喜びが大きい。

浩一の顔は私に近づき、私もそっとキスをした。

『俺マジ嬉しい…』

額を付けながら小さく呟いた。

私は素直な笑顔を返した。

私と付き合った事をこんなにも喜んで貰えるなんて女として最高の気分だ。

そしてまた唇を重ね、今度は熱いキス。

浩一に服を脱がされ、付き合った晩に体を重ねた。

それから毎日仕事が終われば浩一のアパートを訪れた。

最初の晩に合い鍵を渡され

『仕事が終わったら何時でもいいから来て』

と言われた。

1時に閉店した後、店の女の子や客とafterを楽しんでいたが、今は即帰りだ。

浩一が私に会いたいと思う様に私も浩一と会いたい。

次の日が仕事でも浩一は私の帰りを起きて待つて居てくれる。

浩一は疲れて眠い筈なのに、ベッドの中でずっと私の話を聞いてくれる。

何時も会うのは夜中で、昼間の仕事をしている浩一とは何処も行けないが、浩一と過ごす数時間が私の癒やしだ。

しかし、それも長くは続かなかった。

私は客の a f t e r の誘いを断り続ける訳にもいかず、その日浩一のアパートに着いたのは A M . 3 時を回っていた。

部屋に入ると浩一は既に寝ていた。

『当たり前か…』

私は起こさない様そつと布団に忍び込んだ。

『俺ら一緒に住まない？』

そう浩一が言い出したのは、珍しくお互い仕事の休みが合った昼間だった。

『……………』

私は答えることが出来ない。

返事は決まってる。

「一緒には住めない」

この言葉をどうやって言えば浩一を傷付けずに言えるか言葉を探していた。

『俺ら毎日一緒に居るのに居ないみたいじゃん』

確かに。

お互い会話はなく寝顔を見る毎が続いている。

『一緒に住めば僅かな時間でも一緒に居れると思うんだよ』

真っ直ぐに向けられる浩一の視線から逃げれない。

『今は…駄目。ごめん』

『何で?』

直ぐ言い返された。

『今同棲しても浩一が嫌な思いをするだけだよ。客からの電話だつて毎日聞く羽目になるんだよ』

『俺はそれでもいいよ…』

言葉とは裏腹、浩一の顔は曇り声が戸惑っている。

『私は嫌なの。浩一にはそう言う姿見せたくないの。私は今の関係でいたい』

私も口が達者になったものだ。

『…分かった』

浩一は渋々納得した。

浩一の私への想いはちゃんと伝わっていた。

私達の生活は相変わらずすれ違い。

けど、浩一は一度だって私の仕事に文句を言わなかった。

私と浩一の付き合いは寝顔の付き合い。

私が浩一のアパートへ行く頃には浩一は寝ていて、浩一が朝起きた時私は深い眠りに付いていた。

私は満足だった。

浩一の元へ帰れて、浩一と一緒に寝て、浩一に想ってもらえて。

会話の無い分浩一の事は理解出来ていないが、それも私は有りだ
と思った。

偶に休みが合い、一緒に居る時間が常に新鮮だった。

しかし満足してたのは私だけ。

『梓はもつと俺と居たいとか思わないの？』

浩一が珍しく起きて居たと思ったら、仕事帰りの私を迎え入れた第一声がこれだった。

『急に何？』

私はお酒が入っている事を良い事に煽ってこの場を流そうとした。

『はあゝ疲れた』

私はベッドに倒れ込み寝る体勢に入った。

『梓。ちゃんと聞いて』

浩一は布団を捲り上げた。

…ああウザイ。
単にそう思った。

私は昔からこういう真面目というか、深刻な話しは苦手嫌い。

『だから何？』

体を起こし、思った以上にきつく言葉が出た。

浩一が一瞬顔を強ばらせたのを私は見逃さなかった。

…浩一がうざくて溜まらない。

私は今の付き合いに満足しているのに…。最近目を合わせば『俺の事好き?』の連発。

嫌いなら一緒に居ないって!

浩一が今の付き合いに不満がある事は知ってる。

けど、付き合い方を変えようとするのなら、今度は私が満足しなくなる。

それなら私に浩一はいらない。

惚れたが負け

その通りだと思う。

お互いが満足する付き合いなんてない。

結局はどちらかが我慢するのだ。

それは惚れた方。

浩一が今が嫌なら別れたっていい。

私は今の生活全てを失いたくないからそれも仕方がないと思えるから。

だから、私も嫌になったら別れる。

そんな簡単な事なのに…。

『俺は梓が好きだから。一緒に居たいって思う訳……』

浩一は延々と自分の思いを話している。

私は壁にもたれ髪の毛を見ながらクルクルと回し、偶に相槌を打った。

しかし、浩一の言葉は私には届かなかった。

既に浩一を想うバロメーターはゼロに達していたから。

その場は浩一に合わせ話を終わらせた。
共に、私の中で浩一は消えた。

私は珍しく朝早く起き、部屋にある私物を全て鞆に入れた。
テーブルに合い鍵を置き、そつと立ち上がり眠る浩一を横目にアパートを出た。

1ヶ月と3日の付き合いだった。

寝顔の付き合い。

浩一とちゃんと向き合った事…無かったなあ。

浩一の好きな物。嫌いな物。私は何も知らない。

さようなら。

情も愛情もない。

私が浩一を見る心は無だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5542a/>

小さな出会い。 本当の居場所

2010年10月11日12時41分発行